

# 『暗殺教室RPG』 RTA 殺せんせー札害チャート

朝は四本足、 昼は二本足、 夜は三本足

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

殺せんせーをコロコロするRTAはあじまあるよー！

計測開始は柵ヶ丘中学校に入学してから、計測終了は殺せんせーの心臓に刃を突き立てた時点までとします。

淫夢要素はありません。

# 目次

	Part 1	キャラクター作成	特
		別強化クラス	1
		「衝撃の知らせ」	18
	Part 2	特別強化クラス	烏間
		先生就任	29
		「地に堕ちた妖精」	48
	Part 3	烏間先生就任	修学旅
		行	60
		「潮田渚の分析」	81
		「修学旅行」	97
113	Part 4	修学旅行	鷹岡襲来
		「深まる謎」	131
		「球技大会」	149
		「教員二人の所見」	165
		「鷹狩り」	181
	Part 5	鷹岡襲来	沖繩離島リ
		ゾート	207
		「寺坂竜馬の悔恨」	227
		「当人不在」	242
		「準備期間」	265
		「急転する事態」	275
		「赤羽業の述懐」	288
	Part 6	沖繩離島リゾート	死
		神襲来	303

「萌芽」



320

# Part 1 キャラクター作成 ① 特別強化クラス

はい、よいいスタート（棒読み）

殺せんせーをコロコロするRTAはあじまあるよー！

計測開始は柵ヶ丘中学校に入学してから、計測終了は殺せんせーの心臓に刃を突き立てた時点までとします。

細かい説明は後回しにするとして、まずはキャラクリエイトに入りましょう。男女どちらかを選ぶことができますが本チャートでは女性で進めていきとうございます。名前の方は入力速度を考慮して『穂波水雲』、通称ホモちゃんです。え、女性につける名前じゃない？ うるせえ！ 今日からお前はホモちゃんだ！（松岡修造）

次はステータス作成です。ステータスは主に四つの分野があります。

その四つとは『心・技・体・知』です。恐らく説明する必要はないかと思われませんが一応大雑把に説明しておくとして、『心』は精神的なやつで、『技』は技術的なやつで、『体』は体力とか筋力とかで、『知』は知識的なやつです。

男性を選んだ場合『心・体』の二つの数値に若干の補正がかかり、女性を選んだ場合は『技・知』の二つの数値に若干の補正がかかります。今回は後者にあたりますね。

では、運命のダイスロールです。これからそれぞれのステータスに0～100の数値が割り振られる訳ですが、あまりにも低ければ当然リセットです。当たり前だよなあ？  
世の中才能が物を言う、はつきり分かんかね。

とは言えそこまで粘るつもりありません。取り敢えずは全体的に50を超えていれば十分でしょう。ステータス自体は後からいくらでも上げられますからね。無論、数値が高いに越したことはないのですが。

そして、数値が振られたホモちゃんのステータスがこちら。

名前：穂波水雲 女性 『心』……88 『技』……80

『体』……54 『知』……97

ああ～ういっすねえ～（恍惚）

四つの内三つが80を超えています！ 補正のかからない筈の『心』もなぜか高いですし、『知』に至ってはほぼ最高の数値です！ 何だか『体』が少し低いように見えるかも知れませんが許容範囲内です。

残すはスキルですね。『動体視力』や『記憶力抜群』など、数ある中からステータスに応じて三つランダムで選ばれます。ホモちゃんは全体的にかなり数値が高いため良い

ものがきやすいです（必ずくるとは言ってない）。

ここで狙うのは『直感』一択、このスキルがあるのとないのでは大幅にタイムに差が出てきます。具体的には、1（時間）……か2（時間）ぐらいです。それくらい有用なスキルだと言うことです。

まあ、ここで手に入らなくても一応後から入手しようと思えばできるのですが。スキルの入手はステータスの方と違って結構時間がかかってしまいます。

『直感』さえくれば後二つは何でもいいです。

しかし、ランダムな以上これがいつくるかは分かりません。なるべく早くきてくれよなく頼むよ。

……（倍速中）

ん、きましたね。……うーん、ただ一つだけ足を引っ張っているスキルが……。

名前：穂波水雲 女性 『心』……88 『技』……80

『体』……54 『知』……97 《スキル》

『直感』・『好奇心旺盛』・『語学堪能』

外国人と流暢に喋ることができるようになる『語学堪能』はともかく、問題はもう一つのスキル。

……『好奇心旺盛』は普通にプレイする分には悪いスキルではありません。キャラクターが運動や勉強などあらゆることに対して意欲的になり、ステータスの伸びにも繋がります。ただし、その代わりとしてキャラクターが勝手に行動するようになってしまいません。

誰彼構わず話しかけたりするのはまだかわいいもんで、ヤバい時は殺せんせーを頃しにきた暗札者に平気で話しかけたりします。やめてくれよ……（絶望）

余計なことに首を突っ込む分タイムが伸びますし、ある意味これは走者泣かせのスキルですね。

どーしよっかなー。だめだよっば——

大丈夫だつて安心しろよ。平気平気、平気だから（天啓）

……。



おつ、そうだな（適當）

と言う訳でこれで行きたいと思えます。使いようによっては有用なスキルだし、多少はね？ 多分大丈夫でしょ。ガバなんて起きない起きない（フラグ） 仮に起きたとしても、死んでもカバーするのが走者ゾイ！（DDD）

んだらばいよいよ最後です。最後はホモちゃんの大まかな容姿を決めていきます。ここだけは唯一プレイヤーが自由に弄れるポイントです。髪色や長さ、顔のパーツを好みに組み合わせることができます。

んまあその、よく分かんないですと言う方にはオートモードがおすすめです。機械が勝手に設定してくれます。大体美形に作ってくれるから安心！

私もオートモードで作ります。ふむ、どれどれ……ほう金髪のボブカットですか……大したものですね。それに碧色の瞳……。右目の下にある泣き黒子がセクシー……エロいっ！ 明らかに日本人離れた容姿ですが、ひよつとして外国の血でも混ざっているのでしょうか？

まあホモちゃんには『語学堪能』のスキルがあるのでちようどいいですね。

……ヨシ！（現場猫）

決めるものは全て決め終わりました。それでは本編に参りましょう！ タイマースタートです！ イクゾー！ デッデッデッデッ！（カーン）

▽穏やかな春の日差しの下、新品の制服に身を包んだ貴女は伯母と共に柵ヶ丘中学校を訪れた。今日からここが貴女の通う学校となる。

……ん？ 折角の子どもの晴れ舞台なのに両親じゃなくて伯母？ あ、ふーん……  
(察し)

どうやらホモちゃんは既に両親を亡くしているみたいですね……。悲しいなあ……  
(諸行無常)

でもまあ正直両親が生きてようが死んでようがどうでもいいです(人間の屑) ぱつと見た感じ伯母さんがちゃんとホモちゃんの面倒みてくれてるっぽいです。生活環境さえ整っていれば問題ないない。

さて、ここから少し長い入学式に入るため、今の内にこのゲームが一体どんなゲームなのか、そして本RTAの大まかな流れを解説していきます。ごさいます。

このゲーム、『暗殺教室RPG』はプレイヤーがオリジナルキャラクターを作り、そのキャラを操作して原作を追体験するゲームです。一緒に勉強したり、遊んだり、恋愛し

たり……勿論、最終的には殺せんせーを札害することが目的です。他のゲームと比べて自由度もそこまで高くありませんが面白いゲームであることは間違いないです。

あんな青春送りたかつたけどなく俺もなく、と過去に心残りのある方なんかには刺さるのではないでしょうか。

……今し方自由度が高くないと言いましたが、このゲームなぜか恋愛方面に関しては自由度が高かったりします。二股とかも普通にできちゃいますし、なんなら律こと自律思考固定砲台ちゃんとも付き合えるらしいつすよ（白目） 機械姦とはたまげたなあ……。他にもLGBTに配慮してなのか男同士、女同士でも――

失礼、話が逸れました。

何はともあれ詳しくは自分でプレイするのが一番良いと思います。皆も製品版を買って、プレイ、しよう！

それと本RTAの大まかな流れですが、当面はホモちゃんのステータスの強化ですね。四つの項目をなるべく偏りがないようにバランス良く上げていきます。

ホモちゃんの初期ステータスだと特進クラス配属は確定なので、取り敢えずは将来的には五英傑と呼ばれる彼ら、学秀くんたちと仲良くなつていきます。今後『知』のステータスを上げていくためには彼らの存在が必要不可欠です。ともあれホモちゃんの容姿と学力なら彼らと仲良くなるにさして問題はないでしょう。

後はひたすらに、勉強 B! 部活 B! 勉強 B! B! B! B! B! って感じて……。校内でも尊敬されるミス・パーフェクトオールラウンダーを目指していきます。

ここで、ん? とと思われる方がいるかも知れませんが。良い成績を取り続けたらE組に落とされることはないんじゃないの、と。

はい、その通りです——普通ならば。

ここがこのゲームの面白いところで、例え作成したオリキャラがどんなに悪い成績、あるいはどんなに良い成績を取ろうと、三年生へ進級する際に必ずE組に落とされます。そして、皆がいる原作のE組へ、時系列的には第一話のすぐ後に仲間入りをします。

つまり、挫折を味わうことができるんですね(Ges顔)

こんな回りくどいことをするくらいなら最初から3—Eスタートで良いのに……。製作陣の意地の悪さが窺えます。そんな原作再現しなくていいから(良心)

また、その挫折の理由もまちまちです。原作でもE組の生徒たちは様々な事情を抱えています。

このゲームは成績が悪ければ言わずもがな、成績が良ければストレスに耐えかねて暴れたりだとか、もしくは学校内にある貴重品をうっかり壊したりだとか……。ホモちゃんやどんな挫折を味わうのかはまだ分かりませんが、とにかくE組に落とされることは確定しています。心配していたホモの皆さんはどうかご安心ください。

▽入学式が終わった。これから割り当てられた教室に行くそうだ。どうやら貴女のクラスは『1—A』らしい。

と、入学式も終わったようですね。

さて、ここからホモちゃんがみるみる成長していく様を1145141919倍速で流していきたいと思います。

……はい。まあ、ほぼカットみたいなものですね。

ぶつちやけ最初の二年はTDN準備期間みたいなもので、原作に突入するまで特に何の見所さん!? もないです（辛辣）ホモちゃんがテストや学校行事でひたすら無双しまくるだけです。あーつまんね。まるでなろう主人公みたいだあ……（直喩）

さつさと原作に進みたい方はベッドから出たり入ったりを繰り返して、どうぞ。繰り返す度に日数が経過するのであつという間にE組にいきます。勿論、成績は最底辺かつステータスに変化はありませんが。きょうはなんにもないすばらしい一日だった（ぼくなつ並感）

と言う訳で、大きな動きがあるまでじゃんじゃん流していきます。画面が早すぎて何が起こっているか分からないであろう皆様のために、先に二年生終了時のホモちゃんの写真とステータスを載せておきます。

名前：穂波水雲 女性 2—A 弓道・ソフトボール部所属 『心』……168

『技』……170

『体』……153 『知』……207 《スキル》

『直感』・『好奇心旺盛』・『語学堪能』・『話術』

『動体視力』・『速筆』・『仮面』・『記憶力抜群』

『速読』・『皆中』・『集中力』

『教え下手』・『未来予測』・『知識欲』

14歳です。学生です。えー身長は172cm、体重は57kgです。しかし、修行やっています。いつの日か世界を救うと信じて――

いい体してんねえ！ 道理でねえ！

おっぱいも制服越しで分かるくらいでかい……でかくない？ いや、胸の大きさは意外と重要だったりします。これは実は私がホモの皮を被ったノンケだからとかではな

く、単純に殺せんせーの油断に繋がるためです。

ざつくりとスキルの方も解説していきたいと思います。

まずは『話術』・『速筆』・『仮面』・『速読』の四つ。これらのスキルの入手はそう難しくありません。『話術』は色んな人に積極的に話しかければ、『速筆』・『速読』は学校でテストを受けていたらいつの間にか勝手に身についています。『心』のステータスが一定の数値を越えれば手に入る『仮面』は、他者に心の内を悟らせないようにするスキルです。

『記憶力抜群』は五英傑が一人、小山夏彦くんと仲を深める（意味深）ことで取得しました。いやー、彼から得られるこのスキルは色々なところで重宝しますからね。ありがたやーありがたやー……。

『動体視力』と『皆中』、『集中力』はそれぞれ部活動によるもの。動いているものを捉え易くなる『動体視力』、逆に静止しているものには必ず命中させることができる『皆中』、ミスを限りなく減らす『集中力』。どれも今後欠かせないスキルです。

字体が青く染まっている『教え下手』は……何か知らん間についてました。人に勉強を教えるのが下手になるデバフです。消すのに時間がかかるので放置してます。

残るは『未来予測』と『知識欲』ですね。字体が赤く染まっているこれらはスキルから派生したスキルです。

『未来予測』は『直感』と『動体視力』の最大限強化、そして『知』のステータスが200を越えていること。『知識欲』は『好奇心旺盛』をもっていることと『知』のステータスが150を越えていることを条件に獲得できます。

前者に関してはかなり強力なスキルだと言っておきましょう。文字通り相手の動きを予測することができるようになります。代償として体力の消耗が早くなりますが、そのことを差し引いても非常に強力です。

『知識欲』はその過程で得た副産物です。『好奇心旺盛』の上位互換的な存在、(RTAには必要) ないです。ないので……一応使いようによつては有用な部分も。

このスキルの影響で、ホモちゃんの攻撃に殺意がのりにくくなります。相手を頃そうと思つて頃すのとそうじゃないのでは大きく異なるのです。

だから何の話だよ何なんだよ！ と言うホモの方は、取り敢えずホモちゃんの攻撃が相手に当たり易くなるだけで覚えておいて下さい。代償にホモちゃんは相手を頃すことができなくなります。そして、それは殺せんせーも例外ではありません。

……ん？ 暗殺教室なのに殺せんせーを札害できない？ そんなの本末転倒だろ！  
いい加減にしろ！



そう思う方たちのために説明しますと、まず殺せんせーは頃せません。これはギャグとかではなく、彼を頃すことができるのは原作と同じく卒業式の前の日のみです。

例えばどれだけオリキャラのステータスが高かろうと、スキルを揃えていようと、絶対に無理です。

そもそも全世界がガチで頃しにかかってようやく頃せる存在なのに、一端の中学生が頑張ったところで頃せる筈ありません。努力するだけ無駄です。

では、どのようにして頃すのか？

原作と同じようにこのゲームでは卒業式の前の日、二代目死神や柳なんとかと死闘を繰り広げ弱った先生は生徒たちに全身を押しえられ、最後は渚君ちゃんによって心臓をナイフで貫かれます。

そのポジションをホモちゃんに代わって貰います。ハイエナみたいな行為してんな、お前な（ここでは流石にスキルも無効化される）。

そのための条件はE組全員との友好度が60%以上なこと、殺せんせーとの友好度が80%以上なことです。

何度も試走しましたが、多分どのチャートでもこの部分は変わらないかと思われま  
す。後はいかにして道中のイベントをスキップできるか、ですな。

……はい。以上でホモちゃんのステータス関係の解説を終わります。ぬわああああ

ん疲れたもおおおん。

また何か忘れていることがあれば後からつけ足すかも知れません。

……あ、そうだ（唐突） 余談ですが、部活動を兼部できるのは二つまでとなっております。

……。

現段階のホモちゃんの人間関係の解説は……もういいですかね？ どうせE組に落とされたら誰とも連絡取れなくなりますし。

強いて言えば……学校のテストや全国模試で一位を取りまくったせいで、腹黒系イケメンボーイこと浅野学秀くんからライバル認定を受けたくらいです。きつかけは何だったかな……確か「君だけは僕の隣に立つことを許そう」とかそんなだった気がします。

クツクツソ上から目線な発言ですが、多分これは彼なりのデレです。A組の皆を手駒だと思ってるような子だからね、しょうがないね。

言い忘れていましたがE組の子たちとは全く交流してないです。後からでも友好度は余裕で稼げます。

……。

そろそろ画面を等速に戻したいと思います。

現在、修了式を終えたホモちゃんは理事長室に来ております。実にご満悦そうな顔でホモちゃんを見つめる浅野理事長、多分「今後も3—Aを引っ張って欲しい」とかそんな感じのことを伝えるために呼んだのでしよう。

言ってみれば自らが手塩にかけて育て上げた学秀くんを越える存在が急に生えてきた訳ですからね。彼が期待を寄せるのも当然でしょう。

と、おやあ？（ジョン・カビラ）

▽——貴女は柵に置いてあった壺を床に落としてしまった！ 割れた破片が辺りに飛び散る！

▽貴女はE組行きとなってしまうた！

「うわー！ どうか行かないで……（悲嘆）」

「あー！ 落としちゃった……」

「ウワアアアアアア……マアアアアアア……」

「うあー！ 落としたあー！」

「なんか高そうな壺を落としちゃった！」

「どうかあ、しましたか？」

「はい！ なんか高そうな壺を落として、しまったのですが！」

……はい。と言う訳でホモちゃんは無事にE組行きとなりました（予定調和）

原作で言われていたのと同じやつです。どんなに成績が優秀でも粗相をした生徒は容赦なく突き落とす……理事長鬼畜スギイ！ 本当にこの人はどこまでも徹底してますね……。こわいなーとづまりすところ。

なんか思っていたのとちよつと違う感じでしたが、いずれにせよこれで今日からホモちゃんも劣等生です！ 次回からようやくE組の皆と交流できますね！

……でもこれ、まだ一割くらいしか話が進んでないんですね（絶望）

ふわああああ疲れたもおおおん（ホモは疲れ易い）ここまでで四時間以上かかるとかやめたくりますよRTA……。どうすつかなく俺もなく（残留思念）

この後も防衛省のお役人さんから暗殺の依頼を受けたりと色々な予定が詰ま  
て――

今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## 「衝撃の知らせ」

私立柵ヶ丘学園の傑物、浅野学秀は現在急ぎ足でとある場所へと向かっていた。

その顔はまるで苦虫を噛み潰したかのよう。実に険しいものであった。

目的地へとたどり着いた彼は、そのままノックもせずに乱暴に『理事長室』と書かれた扉を開く。

「——理事長！」

「……ノックもせずに扉を開くとはね。礼節を欠く行為だ。感心しないな、浅野君」

扉を開いた先、果たしてそこにいたのはこの学園を経営する理事長——浅野學峯。それに加えて、学秀の実の父親でもある人物である。

開口一番に嫌みを言ってくる彼だったが、しかし学秀はそんなことはどうでもいいと切り捨てる。礼節云々よりも今の彼には優先すべきことがあった。

「そんなことはどうでもいい！ 僕があなたにうかがいたいのはただ一つ、A組の穂波

さんの——」

「E組行きの件かい？」

「……っ！ ええ、そうです！ 分かっていらつしやるのなら話は早い。トップの成績を持つ穂波さんが、なぜ底辺のE組行きになったのですか？」

穂波水雲——学秀のクラスメイトの少女。

これがただのクラスメイトであれば、学秀とてここまで必死にならない。何の歯牙にもかけず、翌日には全て綺麗さっぱり忘れてのことだろう。彼がここまで必死になるのには理由があつた。

「非常に、非常に癪ではありますが……成績では、この僕ですら彼女に負けています。彼女はこの学校の中間・期末の全てのテスト、および全国模試においても、今まで僅か一点たりとも落としたことがない……。それがどれ程までに困難なことか……」

例えどんなに優秀であろうと、人間とは必ずミスをする生物だ。

トップクラスの成績を誇る学秀とて例外ではない。満点を取ったことはこれまでに何度もあるが、統計的に見れば取れなかつた割合の方が大きい。

穂波水雲、彼女はいい意味で異常だつた。

だからこそ、学秀は彼女を認めただ。自身の隣に立つことが許される唯一の存在だと。

……それが、まさかこのような事態になるなどとは微塵にも思わなかったが。

「君はやけに肩入れするんだね。彼女に」

「……彼女は特別ですから」

「特別、ね。まあ、それはともかく……浅野君、その棚に置いてあつた壺の行方は知つてゐるかな？」

「壺？ いえ、知りませんが……」

學峯が指差した先、そこには確かに何かが置かれていたかのような不自然な空間があつた。

彼が言うには壺が置いてあつたらしいが、その壺の行方など学秀には知る由もない。

「とある卒業生から頂いたものでね。何でもその業界ではかなり高名な先生がお造りになられたものだとか」

「はあ……。それが何か？」

「彼女が割つた」

「なつ、それは……！ ……いえ、そういうことですか」

一瞬驚いたものの、すぐさま冷静になる学秀。

明らかとなつたのは水雲が理事長の私物を壊したという事実。たつたそれだけのことでE組行き……いや、たつたそれだけのことで見切りをつけるのがこの男なのだ。



今回の件で、A組の生徒たちはより一層気を引き締めることとなるだろう。例えどんなに成績が優秀でも、場合によってはE組行きになるという前例が生まれてしまったのだから。

冷徹な合理主義——それが浅野學峯という人間だった。彼の血を引く学秀はそのことをよく理解している。

ゆえに、この場は引き下がった。

既に彼女の処分が決まってしまった以上、今更彼に何を言っても無駄に終わるだろうと。

「とはいえ、君からすれば彼女がいなくなつてよかつたんじゃないのかい？ 万年二位の浅野君。幸運にも、これで君が名実ともにトップな訳だ！」

「ありがとうございます。用が済んだので失礼します」

だからといって馬鹿にされるのは腹が立つ。

入室した時と同じくらい乱暴な勢いで、学秀はその場を立ち去つた。

教室へと戻る道中、彼の頭を過つたのは水雲との様々な思い出であった。

彼女と初めて出会つた場所——図書室。

そこでたまたま同じ本を求めていた両者は、しかも全く同じタイミングで互いに手を触れ合わせたのだ。少女漫画ならここから物語が始まりそうな、そんなロマンチックな

光景である。

『……君もこの本を？』

『まあ、そうだね』

『悪いけど、僕の方が少しだけ早かったみたいだ。今回は諦めて欲しい』

『そうかな？ 私には私の手の方が早く見えたよ。そっちの方こそ諦めるべきだと思うけど。浅野学秀君』

『僕の名前を？ 穂波水雲さん』

『そりゃあ知ってるよ。入学式の生徒代表のスピーチ、君だったでしょ……というか君も私のこと知ってるんだね』

『君の容姿は目立つからね。自覚した方がいい。鏡を見ることをおすすめるよ……それじゃあ』

『生憎、鏡はあんまり好きじゃなくて——って、ちよつとちよつと！勝手に持つていこうとしないでよ！』

そして五分に渡る話し合いの結果、結局二人はその本と一緒に読む運びとなり——  
『ねえ、浅野君』

『……何だい？ 今中身に集中してるから黙って欲しいんだけど……』

『さつきからページを捲るのが早いよ』

『僕はもう読み終わってるからね』

『私がまだなの！ こっちは逆側から読んでるんだよ？ おかげですつごく読みにくいんだから！』

『それなら僕が読み終わった後でまた借りに来ればいい。放課後には借りられる筈さ。このくらい、二時間もあれば十分だからね』

『……え？ 浅野君、これ読み終わるのに二時間もかかるの？ 私なら一時間で読み終わるのになあ……』

『……訂正しよう。三十分もあれば十分だよ』

『……へえ？ 私なら読み終わったうえで要点をレポートに纏めることもできるよ？ 二十分で』

『……僕なら十分でレポートに要点を纏めたうえで、かつ人に分かり易く解説することもできるかな？』

『……あはは』

『……ふふふ』

最終的には殺伐とした内容の会話になっていたが。

何にせよ、これが二人のファーストコンタクトだった。これを機に二人の仲は進展していく。

『浅野君ってさ、名字がこの学園の理事長と同じだけど、もしかして何か関係があったりするの?』

『……理事長は僕の父親さ。ただそれだけだよ』

『ふーん……なんか色々大変そうだね』

『別に大したことないさ。……穂波さんの両親は? 一体どんなお仕事を?』

『私の両親は……実は二人とも、もういないの。ママは私が小さい頃に病気で、パパは事件に巻き込まれて……』

『……それはお気の毒に。そっちの方こそ結構大変そうに見えるけど』

『それでもないよ。伯母さんが代わりに色々と面倒を見てくれるから。あ、そういえばさー! この間他のクラスでちょっと面白そうな子を見つけてね! 確か、小山君っていうんだけど——』

時には家庭環境を語り合ったり、時にはたわいない雑談に興じたり。

『浅野君、やつほー!』

『……』

『……あれ? どうかしたの? あんまり元気がなさそうだけど』

『……いや、少し考え事をしていただけさ。例えば、君がどうやってテストで満点を取り続けているのか、とかね』

『ああ、それ？ 隠していた訳じゃないんだけど……実は私ね、未来が分かるんだ！』  
『へえ……』

『あ、さては信じてない？ それじゃあもう一つだけ……今日の数学の時間、多分抜き打ちテストが——』

『穂波さん』

『……へ？ 急にどうしたの？』

『次の中間は僕が一位を取る。もちろん全国模試の方も。今度こそ、僕は君を下してみせる』

二年の月日が流れ、気づけば彼女が自らの隣にいるのが自然となっていた。

自身を特別と確信して止まない学秀が、生まれて初めて対等と認めた存在——それが穂波水雲という少女だった。

（穂波さん……僕はこれで君に勝つたとは思っていない。君ならすぐにA組へと戻って来られるだろうか？）

E組の生徒にも救済措置は用意されている。

中間または期末の試験で学年五十位以内に入り、そして元の担任がクラス復帰を許可すれば、本校舎に戻って来ることができる。どちらも彼女なら余裕の筈だ。

水雲が戻って来るまでにすべきことは、A組の生徒たちを今より更に纏め上げ、彼女

がいつ戻つて来ても問題ないように態勢を整えておくこと。

いつか目指す先、実の父親、學峯を越えるためにも彼女の突出した個としての力は必要不可欠だ。

当面の方針は決まった。

廊下を歩く彼の表情に、既に先程までの焦りはない。



学秀が立ち去った後、學峯は深く溜め息をついた。

脳裏に浮かぶのは件の彼女——穂波水雲と最後に会話を交わした時のことだ。

実のところ、彼は水雲のことをいたく気に入っていた。

成績面ではあろうことか自らが手塩にかけて育て上げてきた息子、学秀を越える逸材である。それに加えて性格も社交的で明るく、運動面に関しても他より秀でている。

学校中の先生から期待され、生徒からは尊敬されている彼女を學峯が気に入らない理由はない。

身内を不幸で失っている彼女だが、もし叶うならば養子として迎え入れたいくらいだ。彼女のその高い素養と學峯の教育が合わさった時、果たしてどのような反応が起るのか。彼ですら想像もつかない。

だが、初めて彼女と対面した際、彼は確信した。

学秀はあれを特別と称していたが、あれはそんな範疇に収まる存在ではない。あれは、決して誰にも御することはできないと。

『浅野理事長、実は一つお願いがありました……』

『……え？ どうしてそんなことを、ですか？ 特にこれといった理由はないですよ。ただ強いて言うなら……E組に興味を抱いたから、とかですかね』

『後は何となく面白くなりそうな予感がするというか……やつぱり駄目ですか？ んん』

……じゃあこういうのはどうです？ ……あー、しまつたー。手が滑つたー』

『これで私もE組行きですね。……A組に未練ですか？ 特にないです。戻るつもりも一切ありません。浅野君たちにもそうよろしくお伝え下さい』

あの短時間の会話では、さしもの彼も彼女の本質までを見抜くまでには至らなかつた。

しかし、もはやどうでもいいことだ。

どのような意図があろうと、彼女が他人の私物を平気で割る程に問題児だったのは変

えられない事実。あのような異端児はA組に必要な。ただ邪魔なだけだ。

それに彼女がE組に落とされたことで、残りの者たちは今後さらに励むことだろう。そう考えれば、今回の判断は将来への先行投資のようなものであった。

「さて、この後は——」

次の予定を確認する學峯。

彼の頭からは、穂波水雲という少女のことなどすっかり忘れ去られていた。



## Part 2 特別強化クラス 烏間先生就任

メガトンコイン並みに垂直な転落人生を送るRTAはあじまあるよー!

前回、ホモちゃんは不幸にも黒塗りの壺を割ってしまった、その結果E組へと落とされてしまいました。今回はその続きからプレイしていきたいと思います。

さて、E組行きになったとは言えホモちゃんが本格的に参戦できるのはまだ先です。それまではひたすら運動と勉強を繰り返し、可能な限りステータスを上げておきましょう。E組行きとなつてなお鍛錬と勉学に励み続けるホモちゃんは学生の鑑。

徐々に原作が始まる日が近づいてくると、ある日防衛省のお役人さんから呼び出されて、原作でも言われていた暗殺依頼を受ける運びとなります。

▽「はじめまして。貴女が穂波水雲さんですかね？」

▽目の前の女性の問いかけに貴女は頷いた。

▽「申し遅れました、私は園川と申します。防衛省の役人で、主に交渉の方を担当しております。今回は貴女に対し、暗殺の依頼をするために参りました」

園川さんオツスお願いします。

ちよつとしばらくの間長いテキストが続くのですが、彼女が言うことを要約すると以下のようになります。

- ・この黄色のタコみたいなやつを傾して欲しい
- ・報酬金は30分で、100億!
- ・武器は防衛省が用意してくれる
- ・期限は来年の三月まで
- ・期限を過ぎた場合、地球が壊れちゃ〜う!
- ・なお、上記は国家機密なのでくれぐれも人に漏らしてはいけない（戒め）（漏らしたら記憶が）消される! 消される!

大体こんな感じですよ。

突拍子もない話にさしものホモちゃんもフアツ!? と目を丸くして驚いています。取り敢えずは分かったと頷いておきましょう。

大丈夫だって安心しろよ。平気平気、平気だから。ワーツとやって、パパパツと行って、終わりっ!

▽ 「ありがとうございます。つきましてはこれらが奴に効く武器となります」

▽ 貴女の目の前に用意されたのは……ゴム製のナイフと、空気銃と、BB弾。一見た  
だの玩具にしか見えないが、効果は保証すると彼女は断言する。

こ→こ←で殺せんせーに効く武器が手に入ります。

イカれたメンバーを紹介するぜ！

まずは、対先生ナイフ！ ゴム製でびよんびよんしてるが効果は本物だ！ やつの体  
を豆腐のように裂けるぞ！

続いて、対先生特殊弾！ やつに当たればダメージを与えられるぜ！ 物に埋め込ん  
だり、地雷として使うこともできる！ ……以上だ！

……はい。お察しの通り、なぜかは分かりませんがこのゲーム内でのエアガンは扱  
いやすこぶる悪いです。

至近距離で発砲すれば音でバレるし、かと言って遠くからの狙撃はスナイパーライフ  
の方が断然上だし……サイレンサーに改造することもできますが、正直これ使うくら  
いなら素直にスナイパーライフルを使った方がいいです。

まあ、一応貰ってはおきますが……多分ホモちゃんがこれを使う機会は来ないかなと

思います。誰かこの武器を救って差し上げろ（他力本願）

それとは対照的に他二つはとても優秀です。

軽くて熟練度が上がり易いナイフに、単体として機能する他、物にも埋め込むことができたりと色々応用が利くBB弾……エアガンとは雲泥の差ですね。本当にどうしてこうなったのやら……。

製作陣は今からでも遅くないからちゃんと武器のバランス調整してくれよな～頼むよ～。

本チャートでは主にこのナイフを用いていきます。

当てるには殺せんせーに接近する必要がありますが、接近自体はそう難しくありません。

後は私の趣味です。刃物（ゴム製）を巧みに操る女の子ってロマンがあつてめっちゃ格好いい……格好よくない？（共感を求める声）

それでは早速ですが、対先生ナイフの改造を園川さんにお願いしましょう。お願いする点の一つ、ナイフの刀身を倍に伸ばして貰うこと。こうすることでリーチがより広がり、殺せんせーに攻撃を当て易くなります。

▽貴女は彼女にナイフの改造を頼んだ。

▽「ナイフの刀身を倍に？ 承りました。近日中に完成したものを送らせて頂きま  
す。他には何か？」

▽貴女は首を振った。もう話すことはない。

▽「分かりました。それでは御武運を祈っています」

▽園川と名乗る防衛省の女性は、最後にそう言い残して去っていった。

園川さん謝謝茄子！ 君もう帰っていいよ（豹変）

これで全ての下準備が整いました。後は当日を待つまでの間、家に届いたナイフを振  
りまくって熟練度を高めるだけです。

では当日まで——甥の木村、加速します（倍速）

……（倍速中）

……はい、当日になりました。

いよいよ今日が殺せんせー、及びにE組の皆との初めての顔合わせです。あ、やっと  
……原作の皆と交流できるんやな……（感銘）

ですが、ここからが真にRTAの本番でもあります。

まずは取り敢えず、既に皆が集まっている教室へと向かいましょう。

▽歩き続けること十分、貴女はようやくE組に宛てがわれている旧校舎へとたどり着いた。古びた木造建築……災害時には少し心許ないような気がする。

▽中に入ると辺りには材木の香りが充満していて、床を踏む度にぎしりと軋む音がした。外観から分かつていたことだが、やはり本校舎とは大きく異なる。空調も存在しないし、ワックスもかけられていない。

▽生徒徒にとってあまり良い環境とは言えないが、しかし貴女は胸を踊らせていた。貴女にとってここは目に映る全てが未知の世界である。

▽廊下を歩きながら3年E組の教室を探す。この校舎のどこかにある筈——見つけた。どうやらここが貴女の教室らしい。中からたくさんの人の気配がする。

無事に目的地に着きましたね。それでは中に入ってイキますよ……イキますよ……イキクツ……ヌツ！（迫真）

▽ガラガラと建てつけの悪い扉を開いた。瞬間、中にいた生徒たちから視線が集まる。その視線には驚嘆や好奇心など様々な感情が含まれていた。

▽貴女も全体をぐるりと見渡し——そして驚いた。教壇に立っていたその存在に。

▽それは、タコのような何かだった。事前に話は聞いていたし、写真でも確認したが……実物はとても衝撃的であった。この珍妙な生物が来年になったら地球を破壊すると宣言したのか。……まだ色々よく分からない。

お待たせ。皆大好き、殺せんせーの登場です。

これマジ？　こんなやつが地球を破壊できるとかウツソだろお前www　笑っちゃうぜ！　……と、大半の人なら馬鹿にするであろう変なビジュアルをしていますが、それは純然たる事実です。

彼の体内には実は膨大なエネルギーが秘められており、だからこそマツハ20とか人間には視認不可の桁違いのスピードが出せる訳です。おまけにかつては†死神†と呼ばれる伝説の頃し屋だったとか……そんな危険人物を僅か一年くらいで改心させためぐりさんは菩薩か何か？

まあ、殺せんせー談義はさておき話を進めましょう。

▽「話には聞いていました。貴女が穂波水雲さん——今日からE組へと移動になった

生徒ですネ？」

▽ヌルフッフッフ、とその謎の生物は触手をくねらせる。貴女がこくりと頷くと、それはさらに言葉を続けた。

▽「既にご存知かと思いますが私がE組の担任です。生徒からは『殺せんせー』と呼ばれています」

▽殺せんせー、と貴女は繰り返した。成る程、誰が名づけたのかは分からないが、恐らく殺せんせー先生だから殺せんせーなのだろう。

▽「穂波さん、早速ですが貴女には自己紹介の方を」

▽にゅつと貴女の方へ伸びてきた触手、そこには一本のチョークが握られていた。これで自己紹介をしろと言うことなのだろう。貴女は黒板に自らの名前を書き、皆に向かつて簡単に自己紹介をした。

14歳です。学生です。えー身長は172cm、体重は57kgです。(スポーツは今) 特にはやってないんですけど、トレーニングとかはやっています。

「じゃあオナニーとかって言うのは……」「やりますねえ!」「やるんだ……」「やりま  
すやります……」(ホモ特有の幻聴)



▽「ありがとうございます。穂波さんの座席は……先生から見て右から三列目の一番後ろですなえ」

要するにイトナ君とカルマ君の間です。オリキャラの席はここで固定になっています。

さて、自己紹介も終わったので後は座席に着くだけなのですが……なんか足んねえよなあ？

……。

そうだよ（自己肯定）（暗殺教室は）もう始まつてる！ 依頼を受けた以上、暗札者として頃しにかかるのは当たり前だよなあ？

と言う訳で、自己紹介を終えて早々殺せんせーを頃しにかかります。とは言え完全には頃し切れませんが。

ただ、うまくいけば触手を二本、最低でも一本は必ずもっていくことが可能です。

早速その手順を行っていきます。

まず教壇から下りる際、睡眠薬を飲んだTONのようにわざと足をふらつかせます。お、大丈夫か？ 大丈夫か？

するとこのように、殺せんせーが素早くかつ優しくホモちゃんを受け止めてくれるんですね。これで距離がぐっと近くなりました。ホモちゃんの射程距離内です。

そして、袖に隠し持っていた改造済み対先生ナイフを握ります。最後にそのナイフで先生を切り裂きます。

離れるなよ……離れるなよ……。

お前のここが隙だったんだよ！ 邪剣『夜』——逝きましようね……。

……。

▽貴女のナイフが殺せんせーを襲う！ ……成功だ！ 貴女は三本の触手を切り落としました！

▽貴女は60のスキルポイントを得た！

F o o → 気持ちいい。ポツチャマ……。

良くて二本くらいだと思っていました。なんと三本も落とすことができました！

(潤沢なスキルポイントが) うん、おいしい！ (ナイナイ岡村)

三本も落とせた主な要因は三つで、ホモちゃんが女性で巨乳だったから、殺せんせーと完全に初対面だったから、高いステータスに加えて殺気を抑える『知識欲』のスキルをもっていたからだと思われます。

この三つが上手いこと噛み合った結果、三本も落とすことに成功しました。いやー、こう考えると『好奇心旺盛』のスキルがあつてよかったですね。試走段階では二本までが限界でした。

……とは言え、この不意打ちが通用するのは最初だけです。次回からは全く通用しなくなります。

今日はもう特にすることがないので、後はもう倍速で流してしましましょう。手に入ったスキルポイントは『未来予測』に全ツツパします。

…… (倍速中)

ここからしばらく何の面白みもない日々が続きます。

と言うのも今後のためにもE組の皆と関わりたいのは山々なんです。今のホモちゃんもクラスメイト全員からめちやくちや警戒されている状態です。

それもそうです。現段階のホモちゃんはなんか突然A組からやって来て、そしてなんか初日から殺せんせーの触手を三本も切り落としたTDNヤベーやつです。

一応こちらから話しかけることもできませんが露骨に避けられるのがオチです。なので、今は誰かが話しかけてくるのを根気よく待ちましょう。

……今日もまた一人でご飯を食べるホモちゃん。

あーいったい痛い痛い！（心が）痛いんだよおおおおお！ ライダー助けて！（過去のトラウマ）

▽「あの……穂波さん？ ちよつといいかな？」

▽昼休み、貴女が自分の席でお弁当を食べていると誰かが話しかけてきた。随分と小柄な女子生徒だ。

と、なんやかんやで来ましたね。ホモちゃんに話しかけてきたのは……まさかのカエデちゃんですか。

▽「私は茅野カエデ！ よろしくね！」

ポツチのホモちゃんにも話しかけてくれるとかはえへくすつごい優しい……。

そんなふうと考えていた時期が俺にもありました。

一見友好的に見える彼女ですが、その正体は首元で触手を密かに飼っているヤベーやつです。

毎日脳を蝕む地獄の痛みに耐えながら、しかも殺せんせーに悟らせることなく学校生活を送つてるとかお前精神状態おかしいよ……。

まあ、話しかけてきてくれたのはありがたいです。

こちら素直に応じましょう。オツス！ オラホモ！ よろしくなカエデちゃん！

▽「うん、よろしくね！ ところでさ、穂波さんって元A組なんだよね？ どうしてE組に？」

▽彼女からの質問に対し、貴女はうっかり理事長の私物を壊してしまったことを伝えた。

▽「え、嘘！ そんなことでE組行きになるの!？」

▽貴女がE組へと移動になった理由を聞いて彼女はとても驚いた表情をしている。

とぼけちゃって……。俺知ってるんですよ？ カエデちゃんも似たような手段使ってE組に来たって。

……あれ？ 今更気づいたのですが、理事長は現時点で二度も私物を壊されてますよね？ しかも、この後また竹林君にも壊されると言う……。

……まあまあええわ（思考放棄）

かわいそうですが、これもいわゆるコラテラルダメージと言うものですね。仕方なかったってやつです。

理事長の私物は犠牲になったのだ……。古くから続く因縁……。その犠牲にな。

▽「それは災難だったね……。それにしてもさ、穂波さんってすごいよね！ あんなに速い殺せんせーにナイフを当てるなんて！」

……ん？ 話題の急転換……。妙だな？（バーロー）

あー……成る程。そう言うことですか。

どうやら力エデちゃんはホモちゃんと仲良くなりしてきた訳ではなく、単に牽制しにきただけみたいです。

今最も殺せんせーを傾せる可能性があるのはホモちゃん、そうなると困ると言った具合でしょうか。

どちらにせよそれは彼女の杞憂です。

先程も言ったように、あれは最初の一回しか通用しない手です。単独で殺せんせーを傾し得るのは、それこそ触手を移植された二代目死神くらいでしょう。ここは日本人らしく控え目な返答でもしておきましょうか。

▽別に大したことはない、恐らく二度目は通用しないだろうと貴女は言う。

▽「……穂波さんって結構謙虚なんだね。ちよつと意外かも」

▽昼休み、貴女は彼女と一緒に楽しく会話した。『茅野力エデ』と顔見知りになった！

……はい。と言う訳で、茅野力エデ（偽名）ちゃんと顔見知りになることができました。

今後は彼女を足がかりにE組の皆との交流を図っていく予定です……が、そんな友好度をせせこせと稼ぐところを見せられて誰が喜ぶんだって話で、ですから——

みなさまのためによろしく

このような動画を用意しました。ゲーム内に幾つか存在するミニゲームの一つ、『暗殺バドミントン』です。

主なルールは原作2巻に書かれている通りです。

ボールに触れているのはナイフのみ、腹に当てるか先で突くかによって獲得できる点数が変わります。

こちらの陣地はオリキャラ一人。対する相手は磯貝君、前原君、カルマ君の三人です。なお、今回使用しているデータは本編とは別のものになります。

▽「楽しくやろう!」「よし、負けねーぜ!」「せっかくだし罰ゲームでも賭ける?」

三人に勝てる訳ないだろ! 馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前! (天下無双)  
それではやっついていきましょう。



操作方法は簡単です。十字キーでボールの下に移動し、後はタイミングよくボタンを押すだけ。基本的な戦術としては攻める時は突きでガンガン攻め、逆に守る時は腹で受けて粘るのがおすすりめです。

ボタンを押すタイミングも大事ですね。威力の増減に関わつてきます。

——ガトチュ☆石鹼スタイル！（突き）

——ガトチュ☆パンツスタイル！（受け）

——ガトチュ☆エロスタイル！（突き）

——逝つてるミツルギスタイル……お取り寄せええええええええ！（マッチポイン  
ト）

▽「良い勝負だったよ！」「クソツ……また誘えよ！」「まあ、そこそこ楽しめたかな」

……はい、勝ちました。

勝つても負けても一緒に遊んだ子たちとは仲良くなれます。本RTAでは一切登場しないため、こう言った形で紹介させて頂きました。これ以外のものも、またいつか紹介することができたらなと思います。

さて、そろそろ本編の方に戻りましょう。

カエデちゃんと顔見知りになり、そこから渚君ちゃんに、渚君ちゃん経由から杉野君へと繋がりました。

まだまだ人数も少ないですが、これから徐々に増えていく予定です。それと……こちらの方が重要です。

▽「今日から俺がE組の副担任を受け持つことになった。よろしく頼む」

▽防衛省の烏間がE組の副担任になった！

ホモちゃんの強化パーツこと烏間先生の登場です。これから体育の授業は全て彼の指導になります。それは別にどうでもいいです。

これから放課後に一度だけ、彼と組み手ができるようになりました。

RTAでは勿論、普通にプレイする分にもかなりのうま味ポイントで、そこそこの難易度の代わりに『技』と『体』のステータスが著しく伸びます。

また、回数を重ねていくと彼から特殊なスキルを教えて貰えます。『護身術』や『格闘術』、『関節技』や『寝技』などどれも強力なものばかりです。やっぱ烏間先生の……指

導を……最高やな!

ただし、今言ったように彼に挑むことができるのは一日に一度のみです。

それ以外は特にデメリットもないので、気になったホモの皆さんはぜひ挑戦してみれば? (迫真のすけ)

▽「わ、すっげ。本当にタコみたいだ」

▽体育の授業が終わり、校舎の中に戻ろうとした貴女たち。すると、上の方から誰かの声が聞こえてきた。貴女がその方向を見やると、そこには赤髪で背の高い少年が立っていたのだった。

烏間先生の就任と同時にカルマ君も参戦で――

今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## 「地に堕ちた妖精」

あれは確か……二年くらい前だったと思う。

入学式が終わって早々、学校内にとある奇妙な噂が流れ始めた。その内容は——『A組に妖精がいるらしい』。

妖精がいるってどういう意味なんだろう？

好奇心に負けた僕は、一度その噂の实情を確かめにA組まで行ったことがある。

噂の意味は、教室を覗いてすぐに分かった。

照明に反射して輝く金色の髪、遠目からでもはつきりと分かる目鼻立ちの整った顔、そして星のように澄みきった青色の瞳。

彼女こそが、噂の妖精の正体なのだろう。

確かにそう噂されるのも納得できた。お淑やかさが印象の日本では、彼女の容姿はかなり目立つに違いない。

当時の僕はそれだけを確かめて立ち去ったのだけれど、件の人物——穂波水雲という生徒は、その後とんでもない活躍を続け、その名をさらに広めることとなる。

中間・期末のテスト及び全国模試において堂々の一位を記録、他にも数々のコンクールで表彰され、全校集会の度に彼女が賞状を受け取るため壇上に呼ばれるのは、もはや僕らにとつて当たり前の光景となっていた。

また、彼女が所属している部活動、弓道とソフトボールでも優秀な成績を収めていらしい。特に弓道では、的の中心を狙って正確に射ることができる……のだからか。

文武両道、そのうえ上記の容姿も相まって彼女は瞬く間に学校内の有名人となった。それこそ、彼女を知らない人はいないと断言してもいいくらいに。

その非の打ち所のなさは、まさに別世界からやって来た妖精のようだった。

だからこそ僕は……いや、僕以外の皆も、今のこの状況に酷く驚いている。

『皆さん、おはようございます。本日も大変いい暗殺日和ですね。張りきっていきましよう』

『ああ、そういえば……本日からこのE組に、新たな仲間が一人加わります』

『どのような生徒が来るのか、ですが……説明する必要はないでしょう。彼女のことについては、恐らく先生よりも皆さんの方が詳しいでしょうからねえ』

殺せんせーは言った。今日新しくE組に入ってくる生徒は、先生よりも僕らの方が詳

しいだろうと。

実際その通りだった。

でも……こんな展開、一体誰が予想できたんだろう。

「——失礼します」

ガラガラと扉を開けて姿を見せたのは、ここ、櫛ヶ丘の生徒なら誰もが見知っている少女であった。

金色の髪と青い目を持ち、抜群のスタイルを誇り、さらには頭脳明晰で運動面においても目覚ましい活躍をしている人物——なんとあの穂波水雲その人だったのだ。

「ね、渚。ちよつといい？」

「……あ、茅野。何？」

「今教室に入って来た子……私以外、皆すつごく驚いてるように見えるけど、誰なの？  
っていうか、あの子本当に私たちと同じ中三？」

茅野は途中から転入してきた生徒だ。だから、彼女——穂波さんのことは一切何も知らないだろう。

僕は僕が知っていることを話した。

彼女が学校中の誰からも知られているくらい有名な人物であることを、そうなった理由を。

「へえ、そんなに有名なんだ。……なんでE組に？」

「それは……僕にも分からないかな」

そう。一番分からないのはそこだ。

この上なく優秀な成績を持ち、なおかつ先生たちからも大層気に入られていた筈の彼女が……どうしてE組行きになったんだらうか？

これは僕だけでなく皆も今思っていることだらう。

そんな僕らを置いてきぼりに、殺せんせーと穂波さんは和やかに会話している。

「わ、すつごい！ 写真で見たまんまだ！」

「話には聞いていました。貴女が穂波水雲さん——E組に移動になった生徒ですね？」

既にご存知かと思いますが、私がこのE組の担任です。生徒たちからは『殺せんせー』と呼ばれています」

『殺せんせー』……ですか。それじゃあ私もそのように呼びますね！」

「ええ。穂波さん、早速ですが貴女には自己紹介の方を」

「わわわっ！ 触手が伸びた！ ……えー、皆さん。今日からこのクラスでお世話になる穂波水雲です。仲よくして貰えると嬉しいです。よろしくお願いします」

黒板に名前を書き、ペこりとお辞儀をする彼女。

新しい仲間が増えたというのに、皆の反応は微妙なものばかりだった。拍手も疎ら

だ。

一番多いのは戸惑いの感情だと思う。彼女がE組行きになった理由が分からず、現状にひたすら困惑する者。

そして、その次に多いのが……エンドのE組ならではのことなのかも知れない——元優等生の彼女を敵視する者。

寺坂君なんかはそれが顕著だ。

最近暗殺が失敗したことも関係しているのかも知れないけど、ものすごい目つきで彼女の方を睨んでいる。

「ありがとうございます。穂波さんの座席は……先生から見て、右から三列目の一番後ろですわね」

「分かりました。あそこですね」

彼女の参入は、きつとこのクラスに少なからずの影響を及ぼすに違いない。

そう思った僕は、でもとりあえず一時間目の授業の準備をしようとして——

「——きゃっ！」

突如として聞こえた悲鳴に手を止めた。

どうやら壇上から降りようとした穂波さんが盛大に足を滑らせ、転びそうになったらしい。



らしい、というの、その時には既に彼女が助けられていたためだ。

「——おっと。大丈夫ですか？ 穂波さん」

「……え？ ……あれ？」

「足元にはくれぐれも気をつけて下さい」

殺せんせーの、最高時速はなんとマツハ二十にまで及ぶ移動速度。僕らの暗殺が軽々と避けられる速さ。

事前知っていたとしても、実際に体験してみればそのすさまじさに誰もが言葉を失う。さしもの穂波さんも驚きを隠せない様子だった。

「……うわー……殺せんせーって、聞いていた通りすごく速いんですね……」

「さ、立てますか？」

「はい！ 助けて頂いてありがとうございます！」

そう言つて彼女は手に持っていたナイフを振るつた。

切り落とされた先生の触手が床でびちびちと跳ね回る。

……え？

空気が、止まった。

E組の全員が誰一人として身動きを取れず、その一点に釘づけになる。

——切り落とされた、先生の触手。

続いて、沸き上がる疑問。

——誰が？

そんなの決まっている。

殺せんせーの、一番身近にいた人間だ。

「いったあゝい……ちよつと先生！ いきなり離さないで下さいよ！ お尻打っちゃつたじゃないですか！」

涙目でお尻をさすりながら、しかしその手には対先生ナイフが。恐らく改造を施されたのであろうそれは、従来のものよりも刀身が倍になっている。

……そんなに長いものをいつから？

いや、違う。彼女は最初からそれを持っていた。僕らは全員目撃している。彼女が転びかけた時に、既にその手にナイフが握られていたことを。

にも関わらず、何も思わなかった。

彼女は、極自然な動作でそれを振るっただけだ。

「……………そ、そういうえば……………先生はどこに？」

「……………あ……………後ろ……………」

皆一斉に後ろを振り返った。

そこには……………今まで見たことないくらいに動揺している先生が。顔色を文字通り青く染め、滝のように汗を流し、そして――

足の触手までも二本も失っている先生が。

驚愕が、驚愕を呼ぶ。

今の一瞬で起こったことを、誰も理解できない。

なぜ僕は彼女の行動に何も思わなかったのか？  
なぜ殺せんせーは攻撃を避けられなかったのか？

最初の腕の一本はともかく、足の二本はどのタイミングで、一体いつ切られたのか？  
「それにしても、このナイフって本当に効くんですね。ただのゴムにしか見えないのに。それと……………これが先生の触手か！ もちもちで柔らかく！」

床に落ちていた触手も拾い上げ、都合三本の触手を手にした穂波さんは、それらに頬擦りをする。

……その光景を見ても、殺せんせーは何も言わない。

「顕微鏡で見たらどんな感じなんだろ？ マツハで動ける理由とか分かるかな？ もしかして……先生の正体も突き止めることができちゃったり！」

「……」

「うん！ 私、俄然貴方に対して興味が出てきました！ これからよろしくお願いしますね？ 殺せんせー♪」

見る人を魅了する、艶やかな笑みを浮かべる。

翼を失い、地に堕ちた筈の彼女は、しかしそんなことを感じさせない程に依然として美しかった。

「あ、皆もよろしくね？ 私、貴方たちのこともいっぱい知りたいな」

僕らは、殺し屋。

ターゲット  
標的は、先生。

桐ヶ丘中学校三年E組は暗殺教室、始業のベルが今日も旧校舎に鳴り響く。



油断していた訳ではなかった。

殺すことをやめてからしばらく経つとはいえ、それでも身についた経験がそう易々と抜ける筈もない。

例えば生徒たちがどんな手段を用いようと、切り抜くことができる確信があった。

そう。自信、ではない。確信だ。

彼らはまだ子どもで、私はそれなりに生きてきた大人。ゆえに確信があった。……殺しに関しては、特に。

しかし……いや、だからこそ、彼女の攻撃を躲すことができなかつたのだらう。

腕の一本に関しては切り落とされるまで気づかず、足の二本に関しては、あろうことか切り落とされていたことにすら気づかなかつた。

この異常事態を言葉で説明するのは簡単だ。

彼女の攻撃には、殺意が一切としてなかつたのだ。

だから、私は触手を三本も切り落とされた。

……正直、そこは大した問題ではない。一番の問題は、彼女に殺意が一切なかつたと

いう点。

経験上、それは絶対にあり得ないと断言できる。

殺意というものは、隠すことはできても無にすることはできない。仮に本当に殺す気がなかったとしても、相手に攻撃するという行動の際、必ず何らかの気は漏れる。

穂波水雲という少女にはそれすら無かった。

彼女は確かにそこに存在していて温もりもあつたというのに、放たれた斬撃は異様なまでに無機質だった。

彼女が機械なら、あるいは生まれたての赤子ならそれも頷ける。だが、それは違う。彼女は年頃の少女だ。

それに加え、あの長いナイフを巧みに操る技術。効率的な筋肉の動かし方。驚異的な動体視力。

……思わず、かつての「弟子」を思い出してしまふ。

それ程までに彼女は豊かな才能に恵まれていて——同時にどこまでも危うかった。

「少し調べる必要がありますねえ……」

彼女がああなつてしまった原因を突き止めなければ。

E組の担任として、そして、かつての「弟子」の時と同じ過ちを繰り返さないためにも。

私はマツハで彼女に関する情報を集め始めたのだった。

## Part 3 烏間先生就任 ～ 修学旅行

友だちひやつく人でつきるかな、なRTAはあじまあるよー！

前回、烏丸所長と赤髪のシャンクスが本格的にE組に参戦したところで終わりました。今回はその続きからプレイしていきたいと思います。

現在、画面ではカルマ君が殺せんせーの触手を一本破壊している場面が映し出されています。原作でも衝撃的だったカルマ君の騙し討ち成功のシーンです。

こう見るとやっぱ殺せんせーは初見に弱いですね。

……まあ、この後彼は殺せんせーにお手入れ（意味深）されて、精神的に墮ちるんですけどね。初見さん。

（ホモちゃんには関係）ないです。彼女には前回と同様に友だち作りに励んで貰います。

学校に行つて、授業を受けて、空き時間に友だちと会話して……ああ、なんか……なんかあったかい……（今は失われし青春の光）

しかし、絵面的に地味なのには変わりません。と言う訳でいつものです。オラ！ 倍速！（TNTNT亭）



……（倍速中）

この間に現段階におけるホモちゃんのE組の皆との交友関係をざっと見ていきとう  
（ざ）います。

まずはカエデちゃん。

彼女とは休み時間によくスイーツの話をしめます。相手と仲良くなるためには相手の  
好きなものについて話せばいいんだよね、それ一番言われてるからな。

同じスイーツ好きの倉橋さんとも仲良くなれる日もそう遠くはないでしょう。

次に渚君ちゃん、杉野君。

渚君ちゃんはカエデちゃんから、杉野君はその渚君ちゃんから派生しました。

渚君ちゃんとは主に殺せんせーの生態について教えて貰っています。好奇心旺盛な  
ホモちゃんにとって、情報収集が得意な彼との会話は実に楽しいものでしょう。

杉野君とはたまにキャッチボールをしたりする仲です。

もう忘れられているかも知れませんが、本校舎にいた頃ホモちゃんはソフトボールの  
部員でした。野球と勝手が違うとは言え同じ球技、加えて元から運動神経が良いホモ

ちゃんです。今では野球の投げ方もマスターしています。

磯貝君とも顔見知りになりました。

彼はE組の調和を第一に考える良い子です。ホモちゃんがクラスに馴染めているか心配で声をかけたのでしよう。

まだ事務的な会話くらいしかしていませんが、これからもっと仲を深められればなと思います。

後は……カルマ君とも。

意外に思われるかも知れませんが、声をかけてきたのは向こうからです。

彼が停学中の間、オリキヤラが一本でも殺せんせーの触手の破壊に成功していれば、彼の方から高確率で声をかけてくるんですね。ふーん、おもしれー女（道明寺司並感）って感じでしょうか？ 少女漫画かな？

ざっと見てきましたが大体こんな感じですよ。

上記の面々以外にも顔見知りはこちらほらと増えてきております。目指すは、全員との友好度60%以上。まだまだ先は長いですね。オレはようやくのぼりはじめたばかりだからな、このはてしなく遠い男坂をよ……（未完）

そうこうしている内にイベントです。

イベント、と言つても殺せんせーが強化されるイベントです。原作でもあつた奥田さんのやつですね。

ただでさえ無理ゲーなのに強化パッチが入るとか……あほくさ。やめたらこのゲーム？ 液状になつた先生が教室中を動き回っていますが、こんなもん無視だ無視無視。こんなクソゲーやつてられるか！ 俺は自分の部屋に戻るぞ！（死亡フラグ）

……スキルポイントのためにも積極的に殺せんせーの触手を破壊しにいきたいのですが、これまで何度も言ってきたように彼には余程の奇策でもない限り通用しません。

液状化と言う強化パッチも入つた以上、真正面から頃しにかかるのは愚策もいいところですよ。

一応他にも入手できる方法はあるのですが、得られる数がかかる時間と明らかに釣り合っていないです。クソ過ぎて個人的にはあまりおすすめしません。

一番良いのは、やはり策を弄して殺せんせーの触手を破壊することでしょう。

▽「イリーナ・イエラビッチと申します。皆さんよろしく！」

じゃんじゃん飛んで次のイベントです。

英語教師兼お色担当、ミラ・ジョヴォヴィッチ先生がE組に参入しました。

おっぱいがでかいパツキンのねーちゃんですがその正体は暗殺者で、殺せんせーを暗札するためにE組に呼ばれました……が、そんなことは別にどうでもいいです。

この人もカルマ君同様、殺せんせーにお手入れ（意味深）されて最終的には皆から慕われる先生になります。

それはともかく、先生としての彼女が優秀なのは間違いありません。十カ国語を操る能力は伊達じゃないです。

ですが……ホモちゃんには既に語学堪能のスキルがあるので、正直彼女と関わる意味はあまりないです。

とは言え、本RTAの目的を達成するためには殺せんせー本人との友好度を80%以上、E組全員との友好度を60%以上にする必要があります。この「E組全員」の括りには、実は鳥間先生とビッチ先生も入ってるんですね。

だから一切関わらない、と言う訳にはいきません。

ある程度は仲を深める必要があります。

……。

そう言えば、今まで友好度についてあまり言及してこなかったですね。

一応説明しておくくと友好度とはその名の通り、他者との交友関係の深さを表すものです。一緒に話したり、遊んだりする度にゲージが溜まります。

100%を越えると告白ができて恋人になれます。お前のが好きだったんだよ！（大胆な告白は女の子の特権）

後、この告白、前にも言ったように複数人に可能です。最大で何人までいけるかは忘れましたが……自分好みのハーレムを自由に作ることができます。

いや、ダメだろ。彼女がいて、他の女性と付き合うなんて……（パンケーキ並感）

ただし、殺せんせーだけは90%で止まります。

まあ教師と生徒だからね。仕方ないね♂

……これでゲームのシステムは大体全部説明し終えましたかね——つと、次のイベントです。

▽「さて、始めましょうか」

▽鉢巻を頭に巻いた殺せんせーが何十人にも分身する。もうすぐやってくる中間テ

スト、そのために高速強化テスト勉強を行うそうだ。

一学期の中間テストです。殺せんせーが高速で分身し、マンツーマンで勉強を教えてくださいます。

しかし結局は理事長の妨害により、E組の皆はカルマ君を除いてあまり点数を伸ばさず終わるんですね。

まあ、ホモちゃんには関係ない話です。

知力がぶつちぎってるホモちゃんなら、例えば出題範囲が変わったとしても一位はよーよー。何もしなくても楽勝です。……やっぱりなろう主人公じゃないか（呆れ）

結果が見えている以上、これもどうでもいいです。倍速で流してしまいます。

……。

一応確認だけしておきましょうか。

えっと、今回のテストの一位は……はい、ホモちゃんですね。相変わらず全てのテストで満点です。はー、すごいすごい（棒読み） 流石だー（棒読み）

まあ、どれだけ良い点を取ったとしても、仕様上A組にはもう戻れないんですけどね。そして、テストが終わってからしばらく、次のイベントが始まりました。

▽「来週から修学旅行か〜」

▽「楽しみだね〜」

▽教室の至るところで生徒たちが楽しそうに会話をしている。来週の修学旅行が待ち切れないのだろう。2泊3日の京都市行き——貴女も楽しみにしていた。

修学旅行篇、またの名を不良襲来篇ですね。

原作では渚君ちゃんたちの班が突如として不良グループに襲われ、女性陣が攫われてしまいました。

残念ながら、今回ホモちゃんもこのままではその事件に巻き込まれてしまいます。

修学旅行の班は、オリキャラの場合友好度によって自動的に決まります。今ホモちゃんとの交友関係が一番友好度が高いのはカエデちゃん、次に渚君ちゃん、杉野君と続くので彼らがいる班と同じになるでしょう。

率直に言ってそれは大変困ります。大幅な時間のロスでしかありません。

ですが、ご安心下さい！

こうなつた時のためにもチャートはちゃんとして練つてありますからね！（激ウマギャグ）

要は事件さえ起きなきやいい訳です。

取り敢えず、神崎<sup>マドナ</sup>さんが修学旅行の日程帳をうっかり落としてしまうところまで飛ばします。

▽ E組の皆と一緒に電車に乗り込む貴女。車内での移動の最中、ふと貴女は足元に何かが落ちていることに気がついた。……どうやらこの修学旅行の日程を纏めたものようだ。神崎有希子、と名前が書いてある。

▽ 「私に何か用？」

▽ 貴女は彼女を呼び止め日程帳が落ちていたことと、そしてそれを拾ったことを話した。

▽ 「嘘つ、気づかなかつた……！ 穂波さん、本当にありがとう！」



工事完了です……（達成感）

これでリユウキ君たち不良に日程バレすることはなくなり、よつて誘拐事件も起きなくなりです。加えて神崎さんの友好度も稼げると言う。まさに一石二鳥です。

▽しおりがあると言うのに独自に日程を纏めていたとは感心だ。貴女は彼女にそう伝える。

▽「あはは……殺せんせーのしおりは、その、ちよつと分厚いから……」

あのクソ分厚いしおりをちよつとで済ます神崎さんは本当に神的に良い人だから（kousei）

あ、ちなみにホモちゃんにはしおりの中身を全部暗記させています。持ち歩くの面倒だからね。しょうがないね。

ここでも小山君の暗記術が役に立ちました。

小山夏彦ー！ 小山夏彦見てるかー！ 小山君ありがとう！ フラーツシュ！（意味不明） あえ——

▽「ね、皆の飲み物買ってくるけど何飲みたい？」

▽「あ、私も行きます」

▽「私も！」

フラグが折れたとは言え念には念を入れておきます。

既に神崎さんが目をつけられていると言う可能性も否定はできません。電車での移動の間、ホモちゃんには常に女性陣のボディガードに徹して貰います。彼女たちは俺が守護らねばならぬ（公園最強の生物）

どんな些細なことでも見逃しませんよ。

細かいところまで気になるのが僕の悪い癖（杉下右京）

▽「京都楽しみだね」

▽「穂波さんはどう？」

▽茅野からの問いかけに、貴女は無論楽しみだと頷く。京都は歴史のある街で、寺社が多く、景観をととても大切にしていると聞く。観光が実に待ち遠しい。……彼女の方は何を楽しみにしているのだろうか？

▽「私はやっぱり八つ橋かな。京都の名物と言えばこれでしょ！」

▽甘いものが好きな彼女らしい解答だった。貴女も彼女に同意して笑う。

……あ、そうだ（唐突）

八つ橋には生地を堅焼きにしたものと、そうでない生のものとの二種類あります。両方ともおいしいのでホモの方は京都を訪れた際には是非食べてみてくれよな〜頼むよ〜（ステロイドマーケティング）

後、テレビではよく京都県民は腹黒いだの皮肉屋だの性格が悪そうに言われますが、全部TDN風評被害なんだよなあ……。涙が出、出ますよ……。

全員が全員そうじゃないし、性格が悪いやつって多分県に限らずどこにでもいると思うんですけど（凡推理）

と、何やかんやで京都に着きましたね。

神崎さんの日程帳も無事だし、車内でもこれと言って特に何も起こらなかったため、誘拐事件は未然に防ぐことができたと言っていていいでしょう。そもそもなぜ旅先で誘拐なんてされるのか私には理解に苦しむね（ペチペチ）

んだらば後は京都の街を観光しつつ、徒労に終わる殺せんせーの暗札計画を遂行するだけです。

つー訳で、修学旅行が終わるまで倍速です。

……またですか。うえーい、チンタラやってんじゃねえぞー！（ECZN）あくしろよ（ホモはせつかち）

……。

……ん？　なんで等速に戻す必要があるんですか？

▽坂本龍馬が暗殺された『近江屋』の跡地、織田信長が討たれた『本能寺』……京都に存在する様々な暗殺所縁の地。どこか親近感のようなものを感じながら、貴女たちは殺せんせーを殺すための下見を続ける。

▽貴女たちが神崎が希望した『祇園』、人通りの少ない場所を見て回っている時のことだった。

▽「お、情報通りいやがったぜ」

▽「なーんでこんな拉致り易い場所歩くかねえ」

▽貴女たちの目の前に、突如として学ランを着た者たちがぞろぞろと現れた。全員が貴女たちよりも一回り以上は大きい。……高校生、なのだろうか？

……。

……あれ〜？ おかしいね、いつの間にか不良たちに囲まれてるね。

▽「へえ……リユウキから聞いちゃいたが、結構な上玉が揃ってるじゃねえか」

▽彼らの視線は神崎と、特に貴女に対して向いている。そんな中、真つ先に動いたのは赤羽だった。

▽「……何？ お兄さん等。観光が目的っぽくないんだけど」

▽「男に用はねーよ。女置いて帰ん——ガアツ！」

▽彼は一人の高校生の顔を掴むと、そのまま電柱に容赦なくぶつける。いきなり始まった喧嘩に貴女たちも驚きを隠せない。

▽「ほらね渚君。目撃者のいないところなら喧嘩しても問題ない——」

▽「そーだねえ」

▽しかし、そんな赤羽も背後からの不意打ちで倒されてしまう。恐らくこの場で最も頼りになる存在が倒れてしまい、もはや貴女たちにはなす術がなかった。

▽「おい、お前等。女攫え」

……えー、ホモちゃんたちは原作通り不良たちに捕まってしまいました。しかも、本来なら逃げていた筈の奥田さんまで一緒に捕まっております。

捕まる際に抵抗することも考えたのですが、それをやってしまうとホモちゃん以外の皆が傷つけられる恐れがあるため踏み止まりました（賢明な判断）

……。

いや賢明な判断じゃねーよオイ！ フラグ折った筈なのに折れてねえってのはおかしいだろそれよお！ オラア！ 違うかオイ!?

あああああああ！ なんでなんでなんでなんで!?（混乱）

……ふう。取り敢えず続行します。

リセも考えましたが、まあこの程度は誤差の範囲です。遅れた部分は他で取り戻します。やり直すの面倒だし……。

……そもそもなんでホモちゃんたちの居場所がバレたんですかね？ コレガワカラ

ナイ。

神崎さんの日程帳も無事だし……いくら旅行先が同じだからって、偶然街中で出会すなんてあり得ない……あり得くない？ 勿論完全には言い切れませんが……。

でも、こいつらが登場したタイミングを見るになんか怪しいんですね……。

いつちよ本人たちに聞いてみますか。

何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ（下人）

▽「お前等みたいな良い子ちゃんは勉強ばつかで知らないだろうけどよく……便利なんだよなあ、最近のSNSつつーのは」

▽助手席に座っている男——恐らくリーダー格と思われるこの男は、そう言うときと貴女に携帯の画面を見せた。

▽そこに映っていたのは……貴女の顔写真。当然、貴女に覚えはない。そして、その写真の下には『修学旅行先の京都で友人とはぐれてしまいました！ この娘を発見された方は至急ご連絡下さい！ #拡散希望』『おかげ様で無事に見つかりました！ ありがとうございます！』と白々しい文章が書かれていた。

はー、成る程成る程。ホモちゃんの写真をこっそり隠し撮りして、それをSNSに載

せることで情報を集めたんですね。はえ、くすつごい知的……。

つまり、こいつらは電車に乗ってた時からホモちゃんに目をつけていたと……お前らノンケかよお！（驚愕）

オートモードで適当に作ったホモちゃんのこの容姿、実際のところかなり目立ちますからねー、良くも悪くも。情報も集まり易かったことでしょう。

……あれ？ 結局この誘拐事件が起きたのって、もしかしてホモちゃんのせい？

……。

そ、そう言えばリュウキ君ってスマホも持ってたんですね。原作だとガラケーだけだったのに。まあこんだけ悪いことしてるやつらなら、携帯くらい複数台持ち歩いててもおかしくないか（露骨な話題逸らし）

▽「……っ！ それ、犯罪ですよね？ 勝手に人の写真を撮って、SNSに上げて……

男子達にも暴力を」

▽茅野が怒気を含ませてそう言うが、彼らはへらへらと笑うばかりだ。縄で縛られている私たちなど怖くも何ともないのだろう。



ホモちゃんの顔が全国に晒されたことに対しカエデちゃんが怒ってくれましたが、世の中には顔どころか素っ裸の全身を無断で晒されたあげく、それを切り抜かれてBB素材にされて、その素材で奇怪なBB劇場を作られ、皆から散々笑いのにされ、そのうえ喘ぎ声や排泄音で音MADを作られたりする人たちもいるんだよなあ……。

そう思えば顔が晒されたくらい何のそのつて感じですよ。ネットの世界つて、怖いですよねえ？

……今のところこいつらの目的はホモちゃん一人。それなら他の子は頼めば解放してくれる可能性が微粒子レベルで存在している……？

すいません他の皆は許して下さい！ ホモちゃんだけが何でもしますから！

▽「そう言う訳にはいかねーな」

▽リーダー格の男は、懐から今度は別の携帯を取り出す。その画面に映っていたのは、今とはかなり雰囲気異なる神崎の姿だった。

▽「どっかで見たことあったのよ。目ぼしい女は報告するよういつもツレに言っ

てよ」

ああ、やつぱり神崎さんも目をつけられてたんですね。……これもう無理ゾ。もう終わりだあ！（レ）

さて、こうして捕まってしまった以上できることは限られています。精々他の皆を励ますくらいです。殺せんせーたち皆が助けにくるまで大人しくしていきましょう。

まま、そう焦らないで。もうすぐ助けが来るから大丈夫だって安心しろよー。（心配する必要は）ないです。

▽「いいか？ お前等には今から俺等十人ちよいを夜まで相手して貰う。宿舎に戻ったらこう言え、ちよつと知り合いとカラオケに行つてましたつてな」

▽恫喝の言葉を聞かされても貴女が動揺することはない。貴女には確信があつた。きつと大丈夫だと、先生たち皆が助けに来ると。

▽そして、貴女のその予感は的中する。

……はい。原作通り助けが来ましたね。

後は流れに任せるだけ——と言いたいところですが、ガバった元凶のリユウキ君はも

う許せるぞオイ！　もう許さねえからなあ？（二律背反）

オラ！　鳥間先生直伝、対男用究極の護身術をくらえ！

▽「さて……私の生徒達よ、彼等を手入れしてあげましょう」

▽殺せんせーの号令と同時に、三人は鈍器しおりを振り下ろす。残るはリュウキと呼ばれていた男のみ。

▽「こいつら……何の躊躇いもなく頭を……！」

▽勝ち目が無いことに気づいた彼は逃げようとするが……そんな彼の前に貴女が立ち塞がる。皆を危険な目に遭わせたことに貴女も腹を立てていたのだ。

▽「——グオツ！」

▽彼の股間を思い切り蹴り上げる。しばらく悶絶した後、彼は動かなくなった。

よかった、これで解決ですね（シユルク）

一応皆にも謝罪しておきましょう。こうなってしまった原因の二割程はホモちゃんにもありますからね……。

皆さん、申し訳ナイス！　センセンシャル！

……。

ぬ嗚呼ああん“魂”を奪われたもおおおん。ザ・バツクミラーキツかったつすねー今日は。

本来のチャートでは殺せんせーと祇園を回るだけだったのが、結果散々な一日になってしまいましたね……。

今回、せつかく身につけたホモちゃんのスキルもあまり役に立ちませんでしたし……。まあ、ある程度情報がないと発動しない『未来予測』はこう言った突発的な事態には非常に弱く、『直感』に至ってはスキルポイントを全く振ってないので仕方ないと言えれば仕方ないのですが……。

何はともあれ、これで修学旅行もほぼ終わりです。

次回からは新たな転校生、律こと自立思考固定砲台ちゃんがノルウェーから来日――

今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## 「潮田渚の分析」

穂波水雲——元A組の優等生。

勉強や運動以外にも様々な分野で活躍していて、学校中にその名が知れ渡っている有名な人。

そして……殺せんせーに対して初めてダメージを与えることに成功した生徒。

突如としてE組にやって来た彼女のことを、当初僕たちはそう易々と受け入れることができなかった。

ここは、いわゆる『エンドのE組』。

勉強についていけなかった生徒や素行が悪かった生徒が集められた場所。つまり……落ちこぼれの世界。

僕たちを陰と例えるなら、彼女は間違ひなく陽の当たる側の人間だろう。

だから、僕らはあまり彼女と関わろうとはしなかった。

彼女だつて僕らみたいな落ちこぼれとは関わりたくないだろう、と。彼女は、いわゆるエリートなのだから。

それが存外間違いであつたことに気づいたのは、彼女がE組に来て三日目が過ぎた頃だつた。

『殺せんせー、次の授業の準備を手伝います』

『ねえ磯貝君。学級日誌の書き方つてき、これであつてるかな?』

『速水さーん、ハンカチ落としたよー』

『寺坂君、制服の袖のボタンが取れそうになつてるよ? 縫い直した方がいいんじゃない?』

殺せんせーの触手をナイフで三本も切り落とし、そしてそれに頬擦りしたりと初日からちよつと危なげな雰囲気を漂わせていた穂波さんは……とても善良な人だつた。

むしろ最初のあの雰囲気は一体なんだつたんだ、と皆が首を傾げるくらいに善良な人だつた。

本校舎の他の生徒のように僕らを見下したりすることもなく、対等に接してくれる。自分の成績を誇示することもない。それどころか自分はそんなに大したことないと逆に謙遜する始末。……これに関しては嫌みと捉える人もいるかも知れないけど。

僕が一番驚いたのは、E組に来てから僅か三日目にして生徒全員の顔と名前を一致さ

せていたことだった。

その性格のよさと、加えて容姿のよさ。

僕は次第に警戒心を解いていき、ほんの少しずつではあるけど彼女を受け入れるようになっていった。

率先したのは、意外にも茅野だ。

「あの……穂波さん？　ちよつといいかな？」

「……ん？　私に何か用？」

「用って程のことじゃないんだけど、その、ちよつと貴女とお話してみたいなって。隣座ってもいい？」

「もちろんいいよ！　座って座って！」

途中からの転入だった彼女は、穂波さんのことをあまり知らない。だから気兼ねなく声をかけられたのだろうか。

相性的にも、どうやら二人はばつちりだったようで。

五分も経てば互いに打ち解け合っていた。

「——え、嘘！　そんなことでE組行きになるの!？」

「あはは……参っちゃうよね……。まあ、もうどうしようもない話だし……。私の方はともかく、茅野さんのことを聞かせてよ！　何か好きなこととかある？」

「うーん……甘い物を食べるのが好きかな？」

「いいね！ スイーツ、私も好きだよ！ 隣町の二丁目にあるお菓子屋さんのロールケーキが絶品でね——」

「ちよつとその情報詳しく——」

彼女がE組に溶け込む日もそう遠くはないと思う。

「余裕かましやがって……」

「……」

「けっ……」

……もちろん、全員が全員そうという訳じゃないけど。

ところで、そんな穂波さんにも実は少しばかり変わったところがある。

「ね、潮田君。殺せんせーの情報に詳しいって本当？」

「えっと……他の人よりかは知ってるってくらいで、別にそこまで詳しい訳じゃ……」

「それでもいいからさ、よかつたら教えてくれない？」

「……うん。大丈夫だよ」

それは、人より好奇心が一段と強いところ。

本人曰く、幼い頃から気になったことや知りたくなかったこと、やってみたいと思つたことは、とことん追究したくなる性分らしい。



今は殺せんせーのことに關してハマっているようだ。

「殺せんせーの顔色なんだけど、緑色のしましまになった時は――、暗い紫色の時は――」

「へえ、そんな意味があるんだ」

「面白いのは昼休みの後で――」

「ふむふむ……」

その性格からか、彼女がもつ知識はとても豊富だ。話題がどんなものでも嬉々として語ってくれる。

そのうえ、聞き上手でもある。

こつちが話している最中は細かく相槌を打ち、何らかのリアクションを必ず取ってくれる。

外見は言わずもがな。内面もまさに非の打ち所がない。

「――よっ！ ……こんな感じかな？」

「お、上手い上手い！ ちゃんと球も曲がつてたぜ。……にしても上達はえーな、穂波は」

「……まさか。杉野君の教え方がよかつたからだよ」

「まあそんなに謙遜すんなって。本当、何でもでき過ぎてこえーくらいだわ……なんか

「苦手なもんとかないのか？」

「苦手なもの……鏡が苦手かな？ 小さい頃、それで手を怪我しちゃったことがあつて」

「ふうん。そんじゃあさ、今度はそっちの投げ方を見せてくれよ！ アンダースロー

……下投げだっけ？」

「もちろん！ そういう約束だからね！ ……ふっふっふっ、かつて敵から恐れられた

私の超大車輪投法、とくと味わうがいいわ！」

でも……彼女を見てみると、時折違和感のようなものを感じる時がある。

例えるなら……そう。間違い探しの残り一つがどうしても見つからないような……

そんなもどかしい感覚。そこに確かに間違いがある筈なのに、一見したところ何の変哲

もないように見える。

……そう思うのは、僕だけなんだろうか？

他の皆は、特に何事もなく彼女と接している。

「……渚？ どうしたんだ？ そんなにポーっとして」

「あつ……ふうん。何でもないよ」

……やっぱり、ただの気のせいかも知れない。

仮に気のせいじゃなかったとしても、彼女はまだE組に来たばかりだ。これから分かってくることもあるだろう。

〈穂波さんメモ その1〉  
社交的で明るく、とても謙虚

〈穂波さんメモ その2〉  
好奇心が人一倍強い

〈穂波さんメモ その3〉  
話し上手、聞き上手



柗ヶ丘中学校三年E組は暗殺教室。

僕は教師を殺そうとしていた暗殺者であり、同時にこの学校の生徒でもある。

そう。つい忘れがちだけど、僕はまだ学生なのだ。

そして、学生である以上、僕らには決して避けられないものがある。

もうすぐ一学期の中間テストが迫っていた。

『俺たちE組のE組だぜ？ 殺せんせー』

『テストなんかよりも暗殺の方がよっぽど身近なチャンスなんだよな……』

けれど、僕らにはあまりやる気がなかった。

俺らには暗殺があるからそれでいいや——どこかそんな風に甘く考えていた皆に対し、すると先生は巨大な竜巻を校庭に起こしながら警告を送る。

自信をもてる第二の刃を示せ。……つまり、明日の中間テストでクラス全員五十位以内を取ってこいと。

さもなくば、この教室には相手に値する暗殺者はいないと見なし、今のように辺り一帯を平らにして去ると。

『君たちの第二の刃は先生が既に育てています。任務を成功させ、恥じることなく笑顔で胸を張るのです』

正直、殺せんせーからの言葉は疑わしかった。

E組の僕らが、それも全員五十位以内なんて……でも、先生はそれが可能だと確信していたようだった。

そして、いよいよテストの日がやって来る。

テストは全校生徒が本校舎で受ける決まり、僕らE組にとってはアウエーの戦いだ。加えて、露骨に集中を乱しにくる試験官の存在。

「あー、あー。げふん、げふん。カンニングなんてするんじゃないぞ、お前ら。俺たち本校舎の教師が、しつかりとお前らを見張って——」

「大野先生、先程からうるさいです。気が散るので静かにして頂けませんか？」

「……善処しよう」

……もつとも後者に関しては穂波さんの一喝で収まったのだけけれど。

とはいえ、うちの学校のテストのレベルは凶悪だ。

集中できる環境が整ったところで、そう易々と解くことができる問題じゃない。

——やばい……！ このままだと殺られる……！

『——おやおや。ちゃんと教えた筈ですよ？ あれは正体不明のモンスターではありませんか』

『ほら、落ち着いて観察してみましょう……。なんてことない相手ですねえ』

『さあ。君の刃で料理してしましましょう』

そんな僕らのピンチを救ったのは、殺せんせーのマツハによって授けられた教えだった。

あれだけ凶悪だった問題が次々と解ける！ 分かる！ 理解できる！ 次も、次も、その次も――

しかし次の瞬間には、僕らは背後からの見えない問題に殴り殺されていた。

「これは一体どういうことでしょうか？ 公正さを著しく欠くと感じましたが……。テスト二日前に、全ての教科で出題範囲を大幅に変えるなんて」

しんと静まり返った教室に烏間先生の抗議の声が響く。

返ってきたテストの結果は……。ボロボロだった。手応えのあつた前半はともかく、後半に関してほぼ全滅。

出題範囲が変わったなんて、当然僕らは知らない。情報の伝達ミスの覚えはないと烏間先生も言う。

……恐らくこれは、何としてもE組をこのままの状態にしたい理事長からの妨害なのだろう。

殺せんせーは無敵だ。どんな暗殺だって避けられる速さがあり、僕ら全員に一遍に教鞭を取れる程頭もいい。

でも……その教師としては無敵じゃない。

この学校のトップに立っている浅野理事長、彼には誰も逆らえないのだ。いくら殺せんせーでも、雇われている側の教師という立場である以上は。

「……先生の責任です。この学校の仕組みを甘く見過ぎていたようです。……君たちに顔向けできません」

僕らと同じく、とても落ち込んだ様子の殺せんせー。

そんな教室のお通夜みたいな雰囲気を取っ払ったのは、なんとカルマ君だった。

元々頭のいい彼は、たまたま先生にテスト範囲の先まで教えられていて、その結果学年五位というすさまじい記録を出したのだ。

「それでさく、そっちはどうすんの？ 全員五十位以内に入れなかったから逃げんの？ それって結局殺されんのが怖いだけなんじゃないの？」

「なーんだ。殺せんせー、怖かったのかあ」

「それならそう言えばいいのにねー」

「にゅやーッ！ 逃げる訳ありません！ 次の期末テストでは倍返しでリベンジですー！」

カルマ君に便乗して先生を煽る皆。怒った先生は真っ赤になって触手をうねらせる。それが何だかおかしく感じて、皆一斉に笑った。

中間テスト、僕らは壁にぶち当たった。E組を取り囲む分厚い壁に。

それでも……僕は心の中で胸を張った。自分がこのE組であることに。

「——で、あんたの方はどうすんの？ 学年一位さん」

皆が笑っている最中、突如として発せられたカルマ君のその一言に、僕らは全員はつと気づいた。

……そうだ。忘れていた訳じゃないけれど、このクラスにはもう一人、理事長の妨害を物ともせず驚異的な記録を出した生徒がいる。

かつてA組からE組へと落とされた彼女もまた、これで本校舎に復帰できる権利を得た訳だ。カルマ君は全然戻るつもりがないみたいだけど……彼女の方はどう思っているのだろうか？

……。

正直に言えば、彼女にもE組に残って欲しいと思う。

最近は随分とクラスに馴染むようになってきていたし、個人的に彼女のことは嫌いじゃない。殺せんせーに纏わる話で一緒に盛り上げられるのは彼女くらいだし、実際話し



ていてとても楽しい。

それに本校舎の他の生徒たちのように僕らを見下したりせず、至つて普通に接してくれる。その普通に救われた人が、果たしてこのE組にどれだけいることか。

多分、僕以外にもそう思っている人はいるだろう。

彼女と一番仲がよかつた茅野なんかは、特に。

……でも、僕らにはどうしようもない。

この先どうするかを決めるのは彼女自身なんだから。

彼女が一体どんな返答をするのか。期待と不安が複雑に入り混じつた気持ちで、僕らは件の人物、穂波さんの方に顔を向けて――

「くああ〜……。……。ふえ、何?」

全員心の中で盛大にずっこけた。

「え、皆どうしたの!? 何で私の顔見てるの!?!」

話を振られた筈の当人は、のんきにも大きな欠伸をしていた。……。どうやら本当に何

も聞いていなかったらしい。

教室中が、緊張感から一変して微妙な雰囲気になる。

——おい。どうすんだよ、この空気。

僕はカルマ君の方を見る。

多分、彼も心の中ではない感じに決まったと思っていたのだろう。先程の台詞も、何だかとてもドラマチックだったというか、漫画や小説だと一気に読者を惹きつけるような展開になりそうというか……。

それを、まさか欠伸一つでぶった切られるなんて。

うわ……カルマ君のあんな表情、初めて見た。怒りたいけど、相手に悪意がない分怒り辛い。そんなやり場のない感情が彼からひしひしと伝わってくる……。

「……いや、だからさ。穂波さんは——」

「ああ！ 私が元のクラスに戻るのかどうかって話か！ それなら戻る気はないよ。E組の皆とも、殺せんせーとも会えなくなっちゃうし。まだ全員のことを詳しく知った訳じゃないからね！」

「……あつそ」

(あのカルマがいいように振り回されてやがる……)

(ぶふっ……)

……何はともあれ、彼女もE組に残るそうだ。  
それと、もう一つ分かったことがある。

カルマ君と穂波さんは、多分相性があまりよくない。

〈穂波さんメモ その4〉

意外と天然なところがある



一方その頃、三年A組の教室では。

柵ヶ丘学園の傑物こと浅野学秀が乱心していた。

「宍戸先生」

「ど、どうかしたのかな？ あ、浅野君……」

「今回の中間テストの結果、ご存知ですよね？」

「そ、そりやあもちろん……」

「では、なぜ学年一位である筈の穂波さんが一向に本校舎に戻って来ないのでしょうか？ まさかとは思いますが、元担任の貴方が彼女のことを……」

「そ、それだけは絶対にないよ浅野君！ 生徒の評価は、私の評価にも関わってくるんだ！ 彼女に戻ってくる意思があるなら今すぐにでも認めるとも！」

「……そう、ですか」

（クツ……！ なぜ彼女は戻って来ないんだ……！）

## 「修学旅行」

「あ、そろそろ出発するみたい」

「いよいよかー。京都、楽しみだね！」

暗殺教室でも行事の予定は目白押しだ。

中間テストを終えた僕らを待ち受ける次のイベントは、京都への二泊三日の修学旅行。

もちろん旅先では既に凄腕のスナイパーが配置されていて、僕らも殺せんせー暗殺計画に一枚噛んでいるのだけれど、そういつたことはともかくとして。

未知の地形に未知の景観、未知の文化に未知の食べ物。

ありとあらゆる未知で盛りだくさんのこの旅行は、僕らにとって非常に楽しみなものだった。

「到着が待ち遠しいなー。……ふわぁ〜」

「そうだね。……穂波さん、また欠伸してる。もしかして昨日あんまり寝れなかった？  
まだまだ時間かかるみたいだし、少し寝たら？」

「ううん、大丈夫だよ。そこまで酷くないし、それに旅行の醍醐味は道中も楽しんでこそだからね！」

「それじゃあ穂波さんの眠気覚ましのためにも、皆で何かお話しするのは？」

「神崎さんの言う通りだね。テーマは……各々京都で一番楽しみにしていること、で、はい、奥田さん！」

「ええっ、私からですか!? えっと、その、私が楽しみにしているのは——」

僕の班は、男性陣は僕と杉野とカルマ君の三人、女性陣の方は茅野と奥田さんと神崎さんと、それから穂波さんも加わっての四人。計七人のメンバーで構成されている。

……成り行きとはいえ、随分と錚々たる顔ぶれが揃ったものだと思う。

特に、杉野が以前から誘っていたクラスのマドンナたる神崎さんや、茅野が誘った、学校内では言わずとも知れた西洋風美人の穂波さん。この二人の存在は大きい。

「それにしても、穂波さんの髪って地毛？ すつごく綺麗な色してるよね。ハーフとかだった？」

「正確にはクォーターだよ。……私としては、神崎さんの長い黒髪も素敵だと思うな。ほら、日本には大和撫子って言葉があるけど、神崎さんにぴったりじゃない！」

お淑やかか印象の神崎さん、明るく活発な穂波さん。

外見や性格がほぼ対照的な二人だけど、彼女たちは既に打ち解け合っている。何でも道中神崎さんが落としていた修学旅行の日程帳を、穂波さんが拾ったのだとか。

「あく、いいなあ……俺も神崎さんと話してえ……」

「杉野も混ざってくれば？」

「いや、さすがにそれは無理だわ！ あの中に割り込むのは相当勇気いるって！」

実は神崎さんに密かに想いを寄せている彼は、遠くから彼女を眺めるだけに留まっていた。

発破をかけた僕が言うのもなんだけど、確かにあの中に男子が参入するのはかなり厳しいだろう。彼女たちのあの空間は、すっかり完成されているような雰囲気がある。

でも、そんな杉野にもチャンスが回ってきた。

「渚…… ちょっと来て！ 杉野君も……」

声のする方を見れば、茅野が手招きをしていた。

一体何事だろう。顔を突き合わせた僕らは、とりあえず呼ばれるがままに彼女の元へと向かう。

「じゃ、じゃあこれは？ 鴨川の縁でイチヤつくカップルを見た時の淋しい自分の慰め

方——」

「『自分は平安貴族だと自分に言い聞かせる。平安貴族の求愛は人目を忍んで行うものなんだから、今この場で一人ぼっちでも何ら不自然ではない』……だったかな？」

「すごい！ 正解です！」

僕らが向かった先では、奥田さんと神崎さんが殺せんせー自作のあのとても分厚い修学旅行のしおり片手に、穂波さん相手に様々な問題を出していた。

……いや、本当にどういう状況なんだろう。

中間テストはつい先日終わったばかりなのに。まるでテスト前に戻ったかのような光景だ。

「穂波さんがしおりの中身を全部暗記したって言うから、その中から皆で問題出してたんだ」

今のところ全問正解らしい。「すごいくない？」と茅野が僕らに同意を求めてくる。

確かにすごいけど……正直、中身を全部暗記する必要があるのかどうか……。しおりの中には、今回の旅行に関係ないこともたくさん書いてあったし……。

「えー、だってあんな重いの持ち歩きたくないもん……」

だから丸々暗記したのだと穂波さんは言う。

……そういえば、彼女には天然なところがあった。

明らかに願望とそれに対する労力が釣り合っていないのだけれど、彼女らしいと言え



ばらしいだろう。

初回特典の金閣寺もすっかり組み立てたと胸を張る彼女に、僕はただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

〈穂波さんメモ その5〉

努力の方向性がおかしい

でも、おかげで班のメンバーの仲が深まった。

杉野も神崎さんと話せて嬉しそうだ。後はカルマ君だけなんだけど、きっと彼のことだから――

「へえ？ 皆なんか面白そうなことやってんじゃん。俺も混ぜてよ」  
ほら、やつぱり。これで全員が揃った。

「――しおりの中身を全部暗記……？ あー、うん……。穂波さんって、やつぱあれだわ」

「……あれ？ 赤羽君、あれってどういう意味？」

「じゃあ、俺からも一個問題ね」

「いや、それは別にいいんだけど……そんなことより先にあれの意味を教えてください——」

「クラスメイトが拉致られた時の対処法……が載っているページ数は？」

カルマ君が出した問題は、少し意地悪だ。

内容ではなく、その内容が記されているページの場所を問うもの。人の心理的な盲点を突くような問題。

けれど、さすがは穂波さん。期待を裏切らない。

言葉に詰まったのは一瞬だけで、すぐさま口を開き解答を述べる。

「千二百四十三ページ。覚え方は、不意に<sup>1</sup>シャツに染み<sup>2</sup>がつい<sup>3</sup>ちやつた<sup>4</sup>って感じかな？」

「……大正解」

両手を上げて降参のポーズを取るカルマ君。

彼女の解答は正解だった。それも、覚え易いよう丁寧<sup>1</sup>に語呂合わせをつけてまで。

「すっげえ……けど、実際これって役に立つのか？ 拉致られるって、そんなこと起きねえだろ。ふっーは」

「まあ、確かに……」

「あはは……殺せんせー、恐ろしくまめだから……」

杉野の正論に僕らは笑う。旅先でそんな馬鹿げたことが起きる筈ないと。取るに足らない杞憂だと。

この時の僕は微塵にも思っていなかったのだ。

旅先の京都で、まさか本当にあんな事態に巻き込まれるなんて……。

「ねえ、赤羽君。結局さっきの私があれつてどういう意味なの？ あれが何を指しているのか考えても分からないんだけど……。指示語じゃないの？ 名詞？ あんな切り方されたらすごく気になるよ。……赤羽君？ ちょっと目を逸らさないで、こっち向いて——ねえ教えてよ赤羽君！」

「……渚君、パス。俺寝るわ」

「ええっ！ 僕に丸投げしないでよ！」

「潮田君なら分かるの!? 私があれつて、一体どういう意味なの？ 潮田君もそう思ってるってこと？」

波乱に満ちた修学旅行が今まさに始まろうとしていた。

「おい、リュウキ！ 隣の車両見たか？ あの金髪の子、すっげー美人だったな！」

「どこの学校よ？ そういや前の方のグリーン車にも同じ制服がたくさんいたな」

「あれは多分……柵ヶ丘の中学だな」

「おいおい、あれで中学生ってマジ？ 最近の子は随分と発育がいいんだな！」

「おまけに頭もいいんだろ？ エリートってやつか」  
「それなのに俺らみたいな馬鹿高校と隣の車両かよ！」  
「……なあ、あの子に俺らから勉強でも教えてやろうぜ。馬鹿ってさあ、意外と結構知ってるもんなんだよ」



それは、突如として渚たちの前に現れた。

「お、情報通りいやがったぜ」

「なーんでこんな拉致り易い場所歩かかねえ」

高校生——渚たちより一回り以上大きな体をした、未知の生物の襲撃。そんな彼ら相手に男性陣は軒並み倒され、女性陣は全員攫われることとなる。

「うひゃひゃひゃ！ ちよろ過ぎんぞ、こいつら！」

「言ったべ？ 普段計算ばつかしてるガキはよ、こういう力技には丸つきり無力なのよ」  
狭い車の後部席に無理やり押し込められた四人。

その内、下卑た笑い声を上げる連中に屈せず確かな氣を保っていたのは、水雲とカエデの二名のみ。

そして水雲の方は、恐らくこの犯行が計画的に行われたものであろうと半ば確信していた。

人通りの少ない道で襲ってきたタイミングといい、予め武器を持つて隠れていた者もいたことから、まず間違いはないと思う。計画的でないとしたらむしろ不自然だ。

しかしだとすると、この連中は渚たち全員の動向を把握していたことになる。

……そこだけが分からない。彼らは一体どのような方法を以つてして我々の情報を集めたのだろうか。

「何で俺らがあの場所に待ち伏せてたのか分かんねえって顔してんな」

——いいぜ、せつかくだから教えてやるよ。

仲間たちからリユウキと呼ばれているリーダー格らしき男は、そう言つて水雲に懐から取り出したスマートフォン画面を見せつけた。

そこに映っていたのは……水雲の顔写真。当然、彼女にこんな写真を撮られた覚えはない。それから写真の下には実に白々しい文章が書かれていた——『修学旅行先の京都で友人とはぐれてしまいました！ この子を発見された方は至急ご連絡下さい！ #拡散希望』『おかげさまで無事に見つかりました！ ありがとうございます！』。

「お前らみたいない子ちゃんは知らねえだろうが、最近の携帯は便利だね。無音カメラアプリなんてものもある」

……どうやらこの男たちは存外知恵が回るようだ。

無音カメラで水雲を盗撮し、それをSNSに載せることで情報収集を図る。言うまでもなく犯罪行為だが。

にやにやとした笑みを浮かべながら、リュウキは水雲の顔にカメラレンズの面を向けた。そのまま指で何度か画面をタップする。シャッター音は一切しなかったが、きつとそこには目を極限まで細めた水雲の顔写真が複数枚ばかり映っていることだろう。

「……っ！ それ、犯罪ですよね？ 勝手に人の顔写真を撮って、しかもSNSに載せるなんて……！」 男子たちにも酷い暴力を……！」

「人聞き悪いこと言うなよ。修学旅行なんてお互い退屈だろ？ カラオケでも行こうぜ」

「……なるほど、貴方たちの目的は分かりました。それなら私以外の三人は離して頂けませんか？」

「ちよつ、穂波さん!？」

「最初から貴方たちが狙っていたのは私一人でしょう？ 彼女たちを巻き込む必要はない筈。カラオケでも何でも、私が全て付き合います」

彼らの狙いが水雲一人なら他は全くの無関係だ。

今すぐ自分以外の三人を解放しろ——言葉遣いこそ丁寧であれ、水雲が言ったのはつまりこういうことだった。

「ほおく？ 随分と仲間思いなんだな。嫌いじゃないぜ、そういうのは。……確かに当初の狙いはお前一人だった。こん中じやお前が一番イケてるからな」

「……」

「だが、答えはノーだ。……目ぼしい女は報告するよう、いつもツレに言つてな。お前のこと、どつかで見たことあつたのよ」

リュウキは、懐から今度は別の携帯を取り出す。

その画面に映っていたのは、現在とはまたかなり雰囲気異なる有希子の姿。

「これは……神崎さん……？」

「俺には分かる。毛並みのいいやつ程よ、どこかで台無しになりたがつてんだ。楽しいぜー？ 台無しってのは！」

またしても車内に連中の下品な笑い声が響く。

そのあまりの悍ましさに、有希子は体を震わせた。

「私たち、これからどうなるのでしょうか……」

今の今まで黙っていた愛美がぽつりと呟く。極度の不安から、彼女もまた有希子と同

じように身を震わせていた。

彼女のその問いかけに答えられる者はこの場にはいない——たった一人を除いては。「大丈夫だよ、皆。絶対に先生たちが助けに来てくれる」

水雲はそう断言する。

小声でありながらも、意思を感じさせられる力強い口調で。三人だけに聞こえるように。「どうしてそう言いきれるんですか……？」

舌先を少しだけちろりと出し、彼女はまるでいたずらが成功したかの如く微笑んだ。

「実は私ね、未来が分かるんだ♪」

本当に助けが来るかは分からない。

もしかしたら、自分たちはこのまま酷い目に遭わされてしまうかも知れない。

それでも四人はその胸に希望を抱き続ける。殺せんせーたちなら必ず来てくれると、そう信じて。





クラスメイトが拉致られた時の対処法。殺せんせー作、修学旅行のしおりの千二百四十三ページに記載。ページの覚え方は、不意にシャツに染み<sup>4</sup>がついちやった。

……特に意味はないと思われた電車でのしおり問答が、まさか本当に役に立つとは思わなかった。

おかげで茅野たちの居場所を突き止めることができた。

見張りの男は主にカルマ君がボコボコにし、僕らは堂々と敵地に乗り込む。

「さて……私の生徒たちよ。修学旅行の基礎知識をその体に直接教えて上げるのです」  
さらにその後殺せんせーも駆けつけて、形勢はこちらが圧倒的過ぎるくらいに有利となった。

残すは……この事件の主犯格らしき男が一人。

「クソツ……!」

「どこへ行くつもり? 逃がさないよ」

自らの不利を悟ったのか、男は何の躊躇もなくこの場から逃げようとする。そんな彼の前に立ち塞がったのは、全身を縄で縛られた穂波さんだった。

「私たちをこんな目に遭わせといて……許さないから」

「どけ! 邪魔すんな!」

男がポケットから取り出したのは——折り畳み式の小型ナイフだ。丸腰で、しかも今

の身動きの取り辛い彼女にはあまりに危険過ぎる代物。

でも、彼女はとても冷静だった。

すかさず放ったハイキックでそのナイフを遠方まで蹴り飛ばす。

「なっ……………」

「ナイフの使い方がなつてないよ。……………これに懲りたら、ちゃんと心を入れ替えることね」

そして続く第二撃で、容赦なく彼の股間を蹴り上げた。

「ぐ、おお……………」

悶絶の声を上げて男は地面に倒れ伏す。

……………そのままびくりとも動かない。まあ、同じ男としてその痛みはよく理解できる。

でも、同情はできない。

実際、彼はそれ相応の罪を犯した訳だから。穂波さんも珍しく険しい顔をしている。

「ま、自業自得だわな……………」

「ひゅー。やるね、穂波さん」

何にせよ、これで事件は解決だ。

せつかくの旅の時間が削られちゃったけれど、全員無事で本当によかった。僕らはほっと胸を撫で下ろし――

「皆、本当にごめんなさい！」

突然の穂波さんからの謝罪に心底驚いた。

「ど、どうしたのいきなり!?!」

「そうですよ! 穂波さんが謝る必要なんて……」

話を聞けば、どうやら彼女は今回の件を全て自分のせいだと考えているようだった。

……確かにきつかけは彼女の存在が彼らの目に留まってしまったことだけど、だからといって彼女が責任を感じるのとは違うと思う。

僕らは全員被害者で、向こうが加害者。

そのうえ被害の大きさ的に見れば、実は彼女が一番深刻という。……何せ顔を全国に晒されてしまったのだから。

「私のせいで皆を危険な目に……。せめて盗撮されたことにでも気づけていれば……」

「もう、気にし過ぎだつてば!」

「茅野さんの言う通りです。穂波さん、貴女が自責の念を抱く必要はありません。悪いのは彼らです」

「殺せんせーもこう言ってるし、もう気にすんなつて! カルマもそう思うよな?」

「そんなことより俺喉渴いたんだけど。京都の甘ったるいコーヒー飲みたい……」

「こうして僕らの波乱に満ちた修学旅行は終わった。」

次からはまた旧校舎でいつものように暗殺教室が始まることだろう。

「……。……。あ、そういえば赤羽君！ 頭の怪我は大丈夫なの!? 消毒はした!? ちよつと屈んで屈んで——」

「え……。いや、見なくていいよ別に。こんなのただの擦り傷だつて……」

「それは駄目だよ！ 頭の怪我は怖いんだから！ 潮田君と杉野君も後でちゃんと見せてね？」

「う、うん……」

〈穂波さんメモ その6〉

怒ると結構容赦ない

「……」

「殺せんせー? どうかしたの?」

「いえ、何でもありませんよ」

## Part 4 修学旅行 鷹岡襲来

やっぱり不良はろくなもんじゃなかったRTAはあじまあるよー!

前回の修学旅行では思わぬところから妨害をくらい、結果本来の予定より少し遅れてしまいました。が、そんなことは気にせず今回もガンガン進めていきます。

もう二度とあんなことは起きて欲しくない……。いや、フラグとかじゃなくマジで……。

ともあれ早速イベントです。

ノルウエーからE組に新しい仲間がやって来ました。自律思考固定砲台、通称律ちゃんです。

▽ある朝、貴女がいつものように教室を訪れると、そこには黒くて巨大な箱のようなものが鎮座していた。近づくともモニターに電源が入り、少女の顔が映し出される。

▽「おはようございます。今日から転校してきました、『自律思考固定砲台』と申します」

なんだこれは……たまげたなあ。これがリッツちゃんですか。よろしくお願いさしませそ（料理の基本）

新たにE組にイロモノ枠が増えましたが、最終目標のためにも彼女との交流は必要不可欠です。積極的に話しかけて60%以上を目指しましょう！

……とは言え、後期のマスコットと化した律ちゃんならともかく、初期の律ちゃんは単に邪魔なやつです。

殺せんせーを傾すために、例えば授業中であつてもBB弾をばら撒きまくります。先生の授業は逐一止まるし、その後始末に追われるE組の皆からはかなりのヘイトを買ってしまいます。当たり前だよなあ？

▽「おい、掃除機能とかついてねーのかよ。固定砲台さんよお？」

▽「……やめとけ。機械に絡んでも仕方ねーよ」

ハハア……（呆れ） そんなことしちやあ駄目だろ！

何とかしたいのは山々なのですが、今はどうしようもありません。取り敢えず二時間目が終わるまで待ちます。

……はい。操作キャラを動かせるのはここからです。

三時間目が始まるまでの間、まずは体育倉庫までロープを取りに行きます。そしてロープを見つけたらそれを教室まで持って帰って、早速律ちゃんの不幸にも黒塗りのボディに巻きつけてしまいます。

縛らなきゃ……（使命感）……よし！（適当）

お〜いい格好だぜえ？ お前はもうこつから出れないんだよ！（デスゲーム主催者）  
こうして思うように暗札することができなくなつた彼女は今日の放課後、彼女を作つた保護者たちに助けを求めます。原作では殺せんせーの改造イベントまで一日余分にかかっていますでしたが、これでその分を短縮できました。

はえ〜〜まるでRTAみたいだあ……（恍惚）……そう言えばRTAだったわ、これ。  
さてさて、後は家に帰るだけ――

▽放課後、E組の教室に戻ってきた貴女は、殺せんせーが彼女――自立思考固定砲台に対し何やら手を加えている場面に遭遇した。

▽「おや、穂波さん。忘れ物ですか？」

▽貴女は頷く。……それはそうと殺せんせーは何をしているのだろうか？ 仮にも

機械とは言え、彼女は立派な生徒だ。生徒に危害は加えないと言う契約なのでは？

▽「危害を加えるのは契約違反ですが……性能アップさせることは禁止されていませんからねえ」

なのですが、なぜかこの時の私は家に帰ることなく教室に立ち寄り、あまつさえ殺せんせーの律ちゃんへの改造を手伝っています。……これは、本来なら必要のなかった行動。つまり、本筋から外れた行動です。

……。

やだやめて叩かないで叩かないでよ！

違う！ 違うんだ、これは！ 修学旅行のイベントでガバって、その動揺から指が変に……！！ 後これまで走ってきた疲れから目も霞んで……！！ それで……！！（早口）

正直、今思い返してみても何でこんな行動を取ったのか自分でも分からないです……

（池沼）

ま、まあ縮めた分のタイムが無駄になったけどその代わり二人とちよつとだけ仲良



くなれたし（不要）、おまけに殺せんせーの触手をまた一本破壊することもできたから多少はね？（震え声）

……ガバった矢先にガバっていくとか、走者にあるまじき情けない格好恥ずかしくないの？（自嘲）

んんっ！ 取り敢えず殺せんせーの触手を壊した方法についてお話しします。お聞きのホモの皆様の参考にもなれば幸いです。

と言っても用意するものは簡単。対先生BB弾を細かくすり潰し粉末状にしたもの、以上です。カリ……ここ、これは……青酸ペロ！（バーロー）

後はこれを先生が踏みそうな箇所撒くだけ。カルマ君と菅谷君が使った手法を合わせたような感じですね。

ですがこの場合、殺せんせーに気づかれにくくなる代わりに効能が極めて薄くなってしまう。なので結構重点的に撒く必要があるんですね。ただし、撒き過ぎたらそれはそれで不自然になると言う……。

何はともあれ、これで律ちゃん関連のイベントは終わり！ 閉廷！ 以上！ 皆解散

！

しかしそれにしても、このタコ先生は本当に何でもできますね。機械を血の通っ

た生徒に仕立て上げるなんて中々できることじゃないよ（バス女） 流石殺せんせー、略してさすころ。

ではでは、どんどん進んで次のイベントにイクゾオオオオオオオ！ オエツ！（嘔吐）

次のイベントはビッチ先生の師匠であり彼女をこのE組に斡旋した人物、頃し屋屋口ヴロさんの登場です。

……つつつてもこのイベントに関しては全スルーします。

彼と仲良くなることができれば、原作で渚君ちゃんが教えて貰った「猫だまし」を同じように教えて貰えます。が、本チャートでは不要の代物です。

それではいつもの倍速で流してしましましょう。

この間、前回のパートでお話した友好度システムに少し抜けているところがあったため、それについての補足をしたいと思います。

まず、鳥間先生とビッチ先生について。

この二人とも友好度100%にできるの？ という質問ですが……可能です。殺せんせーとは違い、二人はちゃんと100%まで上がります。

ただし、両者ともめちゃくちや面倒です。

烏間先生は言わずもがなクツツツ鈍感ですし、ビッチ先生の方は相手が中学生つての後は自分の過去に負い目を感じていることから、友好度が70%を越えると途端に上昇値がミリ単位まで減ります。

どちらか一方と恋人になりたいならハーレムルートは諦めましょう。私の青春の全てを捧げます！ くらいの勢いがなければ到底攻略は不可能です。しかもこの二人、放置してたらいつの間にかいい感じの関係になってます。

それでも彼らを攻略しようと思っている人は、是非とも攻略して下さい。で、攻略しようかなと思っている人は……攻略して下さい。絶対、後悔すると思いますウ……（テロリスト無職）

後は殺せんせーの友好度に関して。

前回、殺せんせーの友好度が90%で止まると言いましたが、これは恐らく仕様上の問題かと思われまます。

だって、考えてもみて下さい。どう足掻いても殺せんせーは最終的に氏んでしまう運命にあります。

それなのにもし先生と恋人になれちゃったりしたら……その後がめっちゃ辛いんですか？ 私はとても辛いです……（ハッピーエンド厨並感）

好き合った相手が氏んじやうなんて、残された方はたまったもんじやないです。カワイソウニ……カワイソウニ……。

憶測ではありますが、多分製作陣の方たちは我々プレイヤー側のそう言った意思を汲んでくれたのでしょうか。だから、友好度も90%までしか上がらないのだと思います。

さて、ロヴロさんとビッチ先生による烏間先生暗札対決も終わりを迎え、次のイベントが始まりました。

▽「ごめんごめん驚かせたね。転校生は私じゃないよ。私は保護者、『シロ』とでも呼んでくれ」

▽突如としてE組に現れた全身を白装束に身を包んだ謎の人物——『シロ』。そしてこの後、貴女たちはさらなる驚きに打たれることとなる。

▽「……俺は勝った。この教室の壁よりも強いことが証明された」

▽またしても突如、教室の壁をぶち破って現れた二人目の転校生——『堀部イトナ』。……今まで以上に一波乱ありそうな展開に、貴女たちは冷や汗を流す。

はい。二人目の転校生暗札者イトナ君と、その保護者であるシロの登場です。すつこ

い怪しい格好してるけど一体何者なんやろなあ……（すつとぼけ）

まあ何にせよこれもスルーします。

実はイトナ君が触手持ちだったり、シロがなんかやたらと殺せんせーの体に詳しくかったり、二人して彼を追い詰めますが結局完全に頃し切るには至りません。

今現在、教室では三人が熾烈な争いを繰り広げていますが……こんなのTDN茶番です。すいませくん、木下ですけど、まくだ時間かかりそうですかね？（煽り）

▽「すいませんね、殺せんせー。どうもこの子は……まだ登校できる精神状態じゃなかったようだ」

……と言う訳で、二人は帰っていきました。

ちなみに教室の壁が穴だらけになっちゃいました。これらは翌日には全て直つていきます。恐らく殺せんせーがマッハで直してくれているのでしょう。さすころ。

さあ、話はどんどん進んでいきます。

イトナ君襲来の次はクラス対抗球技大会です。皆で一丸となり男子は野球部の、女子は女子バスケットボール部の選抜メンバーと戦います。

同性の子たちからがつぼりと友好度を稼ぐことができるこのイベントはRTAにおいて実は結構重要です。活躍すればする程、それに比例して皆から信頼を得られます。

▽梅雨が明け、ギラギラとした太陽が照りつける。そんな中、E組の教室では生徒たちによる話し合いが行われていた。テーマは……もうすぐ行われるクラス対抗球技大会について。

一応ルールをおさらいしておきましょう。

まずホモちゃんはその女の子なので、対戦相手は女バスの選抜メンバーとなっております。スポーツの内容は当然バスケットボールです。ルールの方は――

- ・ 3ピリオド30分（同点の場合フリースロー対決）
- ・ 50点差でコールドゲーム
- ・ E組は何人でも交代可能

と言った具合です。

……ぶつちやけこの戦い、勝つのは無理です。

バスケットボールでは技術もさることながら、体格も重要なのは言うまでもありません。今からどれだけ努力したところでそう言った差は埋まらないことでしょう。素人がガチ勢に勝てる訳ないです。(敗色が)濃いですか？

まあ、別に勝つ必要はないんですが。

そこそこいい感じに善戦できれば十分です。勿論勝てそうなら勝つのがベストなんです……相手が相手なだけにいやーきついつす(素)

▽「良い試合して全校生徒を盛り下げるよ。ねー皆」

▽片岡のかけ声に合わせて貴女たち女子は拳を突き上げる。見せしめ扱いとは言え負ける気は毛頭ない。むしろ、勝つて彼らの鼻を明かしてやろう。貴女たちはそんな風に意気込んでいたのだった。

もうどうせ勝てないって分かり切ってるので、球技大会も倍速で流してOK？ OK

牧場？(激寒)

……流石に見所さん!? が少な過ぎますかね。

せつかくなので、別枠でちよろつと試合風景を流したいと思います。

大会当日、場所は柵ヶ丘中学校体育館、イケメグさんを筆頭とするE組女子と女子バスケットボール選抜メンバーの試合がいよいよ始まりました。

ちなみに本戦はA組が見事な優勝を果たしています。流石は優等生組ですね。勉強もできる、スポーツもできる、ビキビキビキニ、2、3（レ）

こちら側のスターティングメンバーはカエデちゃん、原さん、速水さん、中沢さん、矢田さんの五人。彼女たちには主に守備を意識するよう指示を出しています。

作戦としては、第一ピリオドではこちらの主戦力たる片岡さん、岡野さん、ホモちゃん、の三人を温存しつつ相手の体力をじわじわと削っていく、第二ピリオドから逆転を狙っていく形です。やっぱり僕は王道を征く……逆転勝ち系ですか。爽快感がああ、くたまらねえぜ。

ですが、この作戦にも穴（意味深）はあります。

主戦力を投入できない以上点差が開いてしまうのは必須で、それがあまりに開き過ぎてしまうとチームの士気が著しく下がってしまいます。

無論そうならないためになるべく守りを意識するよう伝えてはいますが……そこはとにかく頑張つて貰うしかありません。メンバーチェンジも駆使して何とかします。



さて、第一ピリオドが終わり——結果は10点差。

守備に重点を置いているのと、相手が舐めてかかってきてるおかげで点差はそこまで開いてません。逆に言えば、これは大きなチャンスです。

インターバルの後、第二ピリオドから主戦力を投入して反撃に転じます。あ、あ、あ、あ、あ、イクイクイクイクイク！　いくよお！　イク！（緩次郎）

本格的に攻めに入る第二ピリオドですが、ここでのホモちゃんの役割はパス回しです。ボールを中継して片岡さんや岡野さんのアシストに徹底します。

この娘の活躍は第三ピリオドからです。それまでは極力目立たないようにする必要があります。

……二人の活躍で点差が大分縮まりました。

しかし、次からが本番です。E組が思っていたよりも侮れないと察した相手はついに本気を出してきます。攻撃が今まで以上に苛烈に、守備も一切隙がなくなります。

ここでホモちゃんのスキルが炸裂します。

皆さんはホモちゃんもつスキルの中に『皆中』と言うものがあつたことを覚えていますか？　その内容は、静止しているものには必ず命中させることができるというものです。……ん？　静止しているもの？

はい。このスキル、実はゴールにも適用されます。

要するに、あの超人バスケット漫画に出てくる中でも極めてヤバいあの技が擬似的に再現できる訳です。

オレのシュート範囲はコート全<sup>レンジ</sup>てだ（緑間慎太郎）

▽貴女が放ったボールがゴールのネットを揺らす。

Foo → 気持ちいい。やっぱバスケットは3Pシュートを決めるのが効率的、はつきり分かんだね。

と言つても流石に本家には及びません。

センターラインまでがギリギリの範囲ですし、体力も結構消耗します。打つても三発くらいですか。

……とまあこんな感じで球技大会は終わりました。

最終的な結果は『44-51』です。割と健闘した方ではないでしょうか？

クククク……球技大会は友情・努力・汗……そして達成感が含まれている完全行事だ。みんなで団結するから尊いんだ、絆が深まるんだ。

男子の方は原作通りです。特筆することはありません。皆と一緒に適当に応援しておきましょう。ケンちゃんまだ一回表、試合は始まったばかりよ！

……。

はい、男子の方も終わりました。かなり小賢しい手段での勝利でしたが……まあ勝ち  
は勝ちなんですね。

俺らの勝ち！ 何で負けたか、明日まで考えといてください。そしたら何かが見えてくるはずですよ。ほな、いただきます（本田△）  
球技大会が終わってもイベントは続きます。

▽「俺の名前は鷹岡明！ 今日から烏間を補佐してここで働く！ よろしくな！」

次はクソDV教師こと鷹岡の登場です。

一見ではTDN気のいい兄ちゃんにしか見えませんが、その本性は極めて残忍。E組の皆を一刻も早く頃し屋に仕立て上げるため、平気で暴力を振るってきます。

……まあ、個人的に飴と鞭と言うやり方は悪くないと思います。ただこいつの場合は

それがイキスギイ!

まだ体の形成が未熟な中学生に暴力を振るうのは控えめに言ってもヤバイです。しかもその根底にあるのは烏間先生へのコンプレックスと言う……。

軍人のくせして公私混同する人間の屑。烏間先生をもっと見習って、どうぞ。

少しでもイベントを省略するべく情報収集に励みます。

烏間先生や園川さんに鷹岡に関する話を聞きましょう。

▽「鷹岡について聞きたい? 教官としては俺よりも優秀だったと聞くが……」

▽「……極めて危険な異常者です。家族のように近い距離で接する一方、暴力的な父親のような独裁体制で、短期間で忠実な精鋭を育てることができたとか。……くれぐれも気をつけて下さい」

……ヨシ! 断片的ではありますが、これで鷹岡の本性が段々と分かってきました。このままやつが正体を表す瞬間を待ちます。

▽「さて、訓練内容の一新に伴ってE組の時間割も変更になった」

▽そう言って鷹岡はプリントを皆に回し始めた。そこに書かれていたのは……E組

の生徒たちからすれば余りにも常軌を逸した内容だった。

▽「……は？」

▽「何だよこれ……」

▽「時間割のほとんどが『訓練』で埋まっている。それも何と夜の九時まで続くものばかりだ。

▽「この時間割についてこれればお前らの能力は飛躍的に上がる。では早速——」

異議あり！（成歩堂龍一）

原作では前原君が腹に膝蹴りをくらってましたが、時間短縮のためここはホモちゃんに発言させます。

発言する内容もこの後の展開を先取りしたものです。

鳥間先生に教えられているE組の生徒の内、もし誰かが決闘でナイフを鷹岡に当てることができたなら、体育の担当教師は元の鳥間先生に戻る……と言った感じですね。

▽「はっはー！ お前、随分と面白いことを言うな！」

▽「貴女の言葉に鷹岡は声を上げて笑った。笑って、笑って、笑って——」

▽「——生意気なガキが」

▽突然何の前触れもなく貴女の顔に向かってパンチを放ってきた！ 貴女の頬に鈍い痛みが走る！

ホモちゃんが代わりに殴られました。が、無事鷹岡を勝負の舞台に引きずり出すことができたので問題ありません。

この後は烏間先生や渚君ちゃん、浅野理事長によりそのプライドをはずたはずたにされて去っていきました。くうく疲れましたw これにて鷹岡篇も完結です！

直近のイベントですが、次はシロやイトナ君たちによる寺坂君と共謀した暗殺で――

今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## 「深まる謎」

柵ヶ丘中学校三年E組は暗殺教室。表向きは至って普通の生徒である僕らだけど、その正体は担任の教師の殺害を目論んでいる暗殺者なのだ。……まだ殺せてないけど。

そんな僕らに、どうやらまた新たな仲間が加わることになったらしい。昨日烏間先生からメールがあつた。

文面から察するに、その人物も暗殺者なのだろう。

何せこんな変な時期での転校生だ。ただの生徒ではないことくらい僕らでも分かる。

まあ、仮に殺し屋じゃなかったとしてもどのような人物か気になるのは確かだ。わくわくと期待を胸中に、僕らは教室の扉を開いて――

『おはようございます。〃自律思考固定砲台〃と申します。今日から転校してきまして。よろしくお願ひします』

全員が全員、自身の目を疑った。

なぜならその転校生は、紛う方なく機械そのものだったのだから。ほんの申し訳程度にモニターに顔が映っている部分を除けば、彼女は黒い鉄の塊に過ぎなかった。

「ふわあく、皆おはよー……え、何これ？ 棺桶？」

『棺桶ではありません。〃自律思考固定砲台』と申します。今日から転校してきまして』

「うわつ、喋った！ えつと、自律神経固形包帯さん？ 今日からよろしくね！」

『〃自律思考固定砲台』です。よろしくお願いします』

「あー、ごめんごめん。自律思考固定砲台さんね。うん、覚えた！ ……それにしても長い名前だね。どういう風と呼ぶのがいい？ 省略したりしても大丈夫？」

『構いません。私につけられたマイクはありとあらゆる音を識別し、またその内容に關しても波長から——』

「ありがとう！ じゃあ、これから貴女のごことは台ちゃんだいって呼ぶね！」

——いや、何でそこから取った!？」

『えつと、それは……』

——しかも機械が難色を示すレベル!？」

機械の転校生と天然の穂波さんによって繰り広げられる愉快な漫才を眺めながら、とりあえず僕は詳しい事情を知るのであろう烏間先生の到着を待つのだった。



「皆既に知つてると思うが転校生を紹介する。ノルウエーから来た自律思考固定砲台さんだ。……こんななりだが、彼女は顔と思考能力<sup>A</sup>をもつれっきとした生徒だ」

彼女……と言つていいのか。とにかく自律思考固定砲台さんはノルウエーから来日したらしい。

現状、期限は刻一刻と迫りつつある。世界政府もかなり追い詰められているのだろう。殺せんせーの契約を逆手に取つて機械を生徒に仕立て上げるなんて、もはやなりふり構つてはいられない状況なのだ。

今日から新しくE組に加わつた機械の生徒。

そんな彼女の暗殺者としての真価<sup>進化</sup>は、早くも一時間目の授業から発揮されることとなる。

『右指先破壊。増設した副砲の効果を確認しました』

『弾道再計算、射角修正。続けて攻撃に移ります』

『二発の至近弾を確認。見越し予測値計測のため、主砲を四門増設。続けて攻撃に移ります』

暗殺対象<sup>ターゲット</sup>の防御パターンを学習し、武装とプログラムに改良を繰り返し、少しずつ逃げ道をなくしていく。

機械の転校生は既に殺せんせーにダメージを与えることに成功していた。彼女なら

ば、もしかしたら本当に殺れるかも知れない。卒業までに、殺せんせーを。

……ただ、彼女の暗殺方法には少し問題があった。

「……なあ、これって誰が片づけんだ？」

「そりゃあ俺らしいないだろ……」

彼女の暗殺はとにかく後片づけが大変だ。それだけならまだよかつたんだけど、問題はそれを無関係な筈の僕らがやらなければならないということ。

弾をばら撒きまくった張本人である彼女は節電モードに入っており、僕らの呼びかけに一切反応を示さない。

彼女が殺せんせーに攻撃する度いちいち授業は止まり、おまけにその後片づけもやられる羽目になる。二時間目が終わった時点で僕らはもうへとへとだった。

まさかこれから毎日こんなことが続くのか……。憂鬱な気持ちを隠しきれず、何人かが大きな溜め息をつく。

「はーい、皆どいてどいてー」

彼女——穂波さんが何かを持って教室に戻ってきたのはちようどその時だった。

彼女の手握られていたのはそこそこ太めの縄だ。

一体何をするつもりなのか疑問に思う僕らだったが、そんな僕らの視線をよそに彼女は縄を自律思考某さんの金属のボディにぐるぐると巻きつけていく。

「これでよし！」

「……大丈夫なのかな？ 勝手にこんなことしちゃって」

「どうだろうね。でも、これで授業中に邪魔が入ることはなくなつたよ。皆もその方がいいでしょ？」

あつけらかんと穂波さんは言い放つ。

確かに彼女の言う通りだ。自律思考某さんにはちよつと申し訳ないけど、僕らだって今後の成績がかかっている。いちいち授業が止まるのは避けたい。

……以前の中間テストの時もそうだったけど、穂波さんは集中を乱されるような妨害を割と嫌っている。今だって仮にも殺せんせーにダメージを与えた暗殺だというのに、それを単なる邪魔扱いだ。相変わらず随分と直球な物言いだし、行動に起こすのも早い。

何にせよ、これで僕らは普段と同じように授業を受けることができるようになったのだった。

〈穂波さんメモ その7〉

ドストレートな物言い

◇ ◆ ◇  
〈穂波さんメモ その8〉  
即断即決即実行

私の名前は『自律思考固定砲台』、数多くの技術者により作られた最新の人工知能をもつ機械で、与えられた指令は三月までに暗殺対象を殺すこと。

ですが、計画は初日にして頓挫しました。

その原因となったのは同じクラスメイトのとある人物、穂波水雲という方が取った行動です。あろうことか彼女は縄で私の動きを封じてきました。解放するように言っても『授業中は皆の邪魔になるから』の一点張りです。

休み時間に限り縄は解かれましたが、その時間になると殺せんせーは教室を出ていてしまいます。おかげで満足のいく暗殺を行えず、データも集まりません。

「駄目ですよ。保護者に頼つては」

この状況がこのまま続くようでは三月までに暗殺できる可能性が極めて下がる恐れがあります。私自身の力で解決を図るのは難しく、私は開発者にメッセージを送ることで対策を講じようと思いました。

それをやんわりと止めたのは殺せんせーでした。

彼は論すように言います。私の開発者が考える戦術は、この教室の現状に合っているとは言い難い。

「なぜ先生ではなく生徒に暗殺を邪魔されたのか……その理由が分かりますか？ 彼らからすれば君の射撃で授業が妨害されるうえ、君が撒き散らした弾の始末に労力を使うことになります。それに仮に君が先生を殺せたとしても、賞金は多分君の保護者に渡るでしょう」

……なるほど、確かに彼の言う通りです。

私の暗殺でメリットがあるのは開発者だけで、私以外の生徒たちからすればそれは損でしかない。クラスメイトの利害までは考慮していませんでした。

他者と「協調」することの大切さを殺せんせーはこんこんと説きます。おかげで理解はできました。しかし、私には肝心のその方法が分かりません。

「お任せあれ。既に準備をしてきました」

『……それは何でしょう?』

「協調に必要なソフト一式と追加メモリです」

自身の命を縮めるような行為と分かっているながら、彼は私に改造を施していきます。……生徒の才能を伸ばすのは先生である私の仕事だと。

そこからは私も殺せんせーも、特に話したりすることはありませんでした。放課後の静かな教室にはカチャカチャと彼が作業する音だけが響きます。

そんな折でした。突如として教室の扉が開いたのは。

中へ入ってきたのは、今日転校したばかりだというのに私の記録にはつきりと残った人物です。

「……あれ? 何してるんですか先生?」

「おや、穂波さん。忘れ物ですか?」

金色の髪に碧色の瞳、恐らく北欧辺りの血を引き継いでいると思われる容姿。そして何より、クラスメイトのために率先して私の暗殺を妨害した張本人です。

「体操服を持って帰るのを忘れちゃって……それよりも殺せんせーは何してるんですか? もしかして台ちやんを分解してるんじゃない?」

「おっと、それは誤解です!」

殺せんせーは慌てて今までの経緯を説明します。

「なんだそういうことだったんですね……。本当びっくりしましたよ。思いつきり蓋が開いてましたし」

「危害を加えるのは契約違反ですが、性能をアップさせることは禁止されていませんからねえ。……さあ、忘れ物が見つかったなら貴女も早く帰宅しましょう。お家の方々が心配しますよ?」

「えっと、殺せんせー、そのことなんですけど……。私にも手伝わせて頂けませんか? 台ちやんの改<sup>アップグレード</sup>造」

忘れ物を取りにきた筈の彼女はそのまま帰ろうとせず、なぜか私の改造を手伝いと殺せんせーに申し出ました。

これには私も疑問を覚えずにはいられません。

クラスメイトのために率先して私の暗殺を妨害した彼女のことです。それを踏まえれば、彼女が私に対して好感を抱いているとは到底考えにくい。にも関わらず、彼女が今から取ろうとしているのは、それとは全くの正反対とも取れる行動。これらは矛盾しているように感じます。

「うーん、ですがそれは——」

「もちろん家にはちゃんと連絡を入れます! それに簡単なプログラミングくらいなら私にもできますから!」

「……分かりました。ただし、夕日が沈みきる前までには必ず家に帰って貰います。いいですね?」

「はい! ありがとうございます!」

諸々の条件つきとはいえこうして私の改造作業に新しく穂波さんが加わりました。

『……穂波さん』

「なあに? どうかしたの? ……あ、そういえば授業中ずっと体を縛っちゃってごめんね!」

『いえ、それに関してはこちらが全面的に悪いので……。それよりなぜ私の改造の手伝いを? 私のはてつきり貴女に嫌われているものかと……。』

「そんなことないよ〜! むしろ、めっちゃ気になってたくらい! 中は一体どんな風になってるんだらうって!」

鼻息を荒くしながら彼女は私に迫ります。

どうやら私の考えは間違っていたようです。彼女は私を嫌うどころか、とても友好的な感情を向けていました。

「誤解させるようなこととしておいて言うのもなんだけど、本当に貴女のこと嫌ってないよ。……ただ、あの調子で暗殺を続けてたとしても殺せんせーは絶対に殺せなかっただらうし、そしたら結局は誰一人として得しないっていう残念な結果になっちゃった



からね」

『……絶対に、ですか？　しかし計算上では単独でも三月までに殺せる確率は九十パーセント以上と——』

「その数字の根拠は？　じゃあ聞くけど、まだ誰も攻略のめどが立ってない殺せんせーの奥の手の液状化……貴女はこれをどうやって攻略するの？」

『それには確か持続時間が——』

「永続的にできるようになったら？　あり得ないとは言いきれないよね？　月一で使える脱皮とか、他にもまだ一つか二つは奥の手があるかも知れない。予想できてる？」

『……もちろんそういったことを踏まえての——』

「環境のことは考えた？　ある日先生が突然、『今日から授業は全て外で行います』なんて言い出したら？　場所が変わっても暗殺に支障はない？　……あるいは、急に先生そのものを辞めちゃうなんてこともあるかも知れない」

『……』

「実際、中間テストの時に先生はこの教室を去ろうとしたからね。生徒に危害を加えない”って契約もそう。本来、契約っていうのは対等な力関係があつてこそ成立するものであつて、先生の場合はそれに当てはまらない。やろうと思えば向こうから一方的に破れる。……今のところは律儀に守ってるみたいだけど」

『……』

「こうやって突き詰めて考えていけば、単独で殺せんせーを殺すことの難しさが理解できるんじゃないかな？ ゼロとは言わないけど、九十パーセントもないと思うよ。精々よくて二割くらい……どう？」

『……はい。異論ありません』

「でしよう？ 先生から既に聞いてるように、だからこそこの暗殺には他の人たちとの協調が必要なんだよ」

“協調”——彼女の口から飛び出したのは、殺せんせーが発したものと全く同じです。しかし、その言葉に至るまでの過程には両者で少しばかり違いがありました。

前者は主に心情的な部分を中心に、後者は主に合理的な考えを中心に協調の大切さを語ります。どちらも興味深い解説でしたが、私は穂波さんの方により惹かれました。

効率を重視する面もそうですが、ありとあらゆる可能性を想定しているところまでも含めて、彼女のあり方は私に近いものがあります。……何だか不思議な心地です。最新の思考能力を搭載された機械である筈の私が、生身の彼女からより合理的な思考方法について教わるなんて。

そんな私の内面を見透かしたのか、突然穂波さんは私の体に抱きつくつくと、その端正な顔を近づけてきました。彼女の額と私の額が液晶越しにこつんとぶつかります。

「……大丈夫、貴女はまだ生まれたばかりなの。これからゆつくりとたくさんのことを学んでいけばいいわ。きつと皆ともすぐに仲よくなれる……」

至近距離で囁かれる言葉とその度にこぼれる息が画面に映る私の顔を撫でます。固い感触以外感じられない筈が、彼女は実に気持ちよさそうに目を細めながら私に向かって柔らかく微笑みかけられます。

……気のせいでしょうか。今一瞬だけ、私の体内にある一部のパーツが熱をもったように感じられました。

『……とここで、これらのアプリは協調に必要ですか？ 〈世界スイーツ店ナビ機能〉、〈スケジュール 〳未来を整理整頓する〵〉——』

「え、えつとですね、先生もちよいと助けて貰おうかなんて思ってみたり……」

「はあ……私欲だだ漏れじゃないですか……。台ちゃん、先生が入れたのは消していいよ。私のだけ残しといて」

『かしこまりました』

「にゅやッ!!? そんな殺生な!」

私の改造はまだまだ続きそうです。

これが終わった時、私はどう変化しているのでしょうか。無事にクラスメイトと協調することができるようになっていのでしょうか？

二人の手によって次々と追加されていくシステムを吟味しながら、私はその時を待つのでした。

『そういえば穂波さん、貴女がつけた私の呼び方に関して少し言いたいことが——』  
「ん？ 私がつけた呼び方？」

『……他の選択肢はありませんか？ いえ、その呼び方が嫌という訳ではないのですが、何というか私の中で違和感が拭えなくて……』

「えっと、台ちゃんが駄目なら……自ちじちゃんとか？」

『それもちよっと……』

「……」

『……』

「……宿題にさせて下さい」

『……分かりました』



「さようなら殺せんせー！ ……足元にはくれぐれも気をつけて下さいね」  
「穂波さんも気をつけて帰って下さい」

穂波さんを見送った後、私は考え事をしながら教室へと続く廊下を歩いていった。

穂波水雲——三年E組の生徒が一人。

現在、個人的に思うところがあつて彼女に纏わる情報を色々と集めている。彼女の元クラスメイト、所属していた部活動の同期や後輩、教えていた先生たち……様々な人物に話を聞いた結果、判明したのは彼女が能力・人格ともに本当に優れた人物だったということである。

『穂波さんのこと、ですか？ そんなに詳しい訳じゃないですけど……確か、早くに両親を亡くされているって話は聞いたことがあります』

『めつちや努力家な人です！ それから美人でおっぱいも大きい！ 私の憧れの人です！ 昔、髪を伸ばしてた時期があつたそうで、写真も見せて貰いました！ 昔の先輩もお人形さんみたいでかわいかったな』

『なんだっけ……同じクラスの男子生徒と付き合つて、その後別れたのに、でも未だにその別れた男子から縊りを戻したがる……みたいな噂を耳にしたような。嘘か

本当かは知らないけど』

一番驚いたのは、E組に落とされた筈の彼女に嫌悪感を示す生徒が一人もいなかったことだ。例えどのような生徒であろうとE組に落とされた時点で差別の対象となる——それがこの学校の方針であり、現実である。

にも関わらず、彼女だけは明らかに違っていた。

無論一向に本校舎へ戻ろうとしない彼女に対して何人か疑念を抱く生徒はいたものの、しかしそのことを悪く言う生徒は誰一人としていなかった。きつと何か事情があるのだろうか誰かが納得していた様子であった。

これも彼女の人徳のなせる業に違いない。

また上記のことに加えて、本日新たにやって来た転校生暗殺者——自立思考固定砲台さんへの態度。

穂波さんは損得という合理的な観点から彼女の身を縄で封じたと言っていたが、恐らくそれだけではない。一番はクラスメイトのために、そして次いでは今後の彼女自身の立場を守るために。つまり、彼女は自立思考固定砲台さんにヘイトが積もり過ぎないよう気遣ったのだ。

休み時間の度にわざわざ縄を解いていたところにも彼女のささやかな優しさが表れている。縄で縛ったままずっと放置することもできたのに。

では、当初私が彼女に対して感じた危機感は、果たして気のせいだったのか？  
……否、それはあり得ない。

間違いなく私は重大な何かを見落としている。その何かに気づけない限りは、彼女が抱える問題にも決して気づくことはないだろう。

実際、彼女にはまだまだ謎が多い。

未だにE組に留まり続けていることといい、殺意が一切感じられない攻撃といい……けれども、これ以上の詮索はプライバシーの侵害となる。私が手を出せる範囲としてはかなり際どいラインだ。

さて、どうしたものか——

「……ま、考えるのは後にしましょうかねえ」

考え事に集中するあまり足を止めてしまっていた。

忘れかけていたが、今は自律思考固定砲台さんの改造の途中である。穂波さんとの共同作業のおかげで大分進んだもののまだ終わってはいない。

とりあえず先にそれを終わらせてしまおう方が優先か。

私はそう一步を踏み出して——突如として足元に走った感覚に背筋を凍らせた。

「——っ！　これは……」

床の一部に重点的に撒かれていた粉のような何か。私の足を一本破壊したことから

対先生BB弾をすり潰したものと見て間違いない……一体誰が？ いつの間に？

『……足元にはくれぐれも気をつけて下さいね』

「……やれやれ、そういうことでしたか」

帰り際の台詞にしてはやや不自然だった。内容も初対面の時を意識してのものだろうか。あれ以降、彼女の方から暗殺してくることがなかったため完全に油断していた。

ああ、全く……本当に手強い生徒である。



## 「球技大会」

夏——じめじめとした梅雨が明けた後に訪れる季節。

雲一つない空からは太陽がきらきらと照りつけ、空気中の水分はからからに乾ききつている。その暑さから熱中症で倒れる人も少なくなき、世間では既にこまめな水分補給や身軽な服装が推奨されていた。

ここ、桐ヶ丘中学校でも夏服が解禁され、生徒たちは皆思う存分に肌を露出している。現在、E組の教室では男子と女子でグループに分かれ、それぞれでとある話し合いが行われていた。その内容は、近い内に来る『球技大会』について。

大会の締めに行われるエキシビジョンマッチへの参加を義務づけられているE組は全校生徒が見ている前で、男子は野球部の、女子はバスケットボール部の選抜メンバーと試合をしなければならぬ。当然勝つのは難しい。言わばこれは単なる見世物に過ぎないのだ。

しかし、だからと言って彼らに負ける意思はない。

殺せんせーが新たに赴任してからE組全体の空気はいい方向へ変わりつつある。いつまでも馬鹿にされ続けるのは悔しい、必ずどこかで見返してやりたい。そんな熱い思いを胸に男子は野球経験者の友人が、女子はリーダーシップのあるメグが主に中心となり話し合いを進めていく。

「それにしても、何から話し合えばいいんだろ?」

「そうだね……」

ところが、男子はともかくとして女子の方かというと、実は話があまり進展していなかった。というのも女子にはバスケットボールの経験者がおらず、加えて殺せんせーは今回男子の方を精力的に指導する様子。そのため具体的な作戦などは全て自分たちだけで考えなければならぬ。

「とりあえず軽くルールだけおさらいしとこっか。質問があつたら手挙げてね」

ひとまずはルールの確認から始めることにした。

試合人数や試合時間、ボールの扱い方といった基本的なところから、ファウルやバイオレーションといった細かいところまで。中々に覚えることが多い。

一通りそれを確認し終えた後、次はいよいよ作戦を練る段階に入ったのだが……これがかなり難航していた。

やはり経験者がいないという穴は大きく、作戦を練ろうにも一体何から考えればいいのか誰も分からない。せめて対戦相手の詳細なデータでもあれば――

「皆、どうやらお困りのようね!」

その時、突如として教室の扉が勢いよく開かれた。

姿を見せたのは、今ではもうすっかりとE組に馴染んだA組の元優等生、水雲である。妖精の異名で有名な彼女は片手に分厚いファイルを抱え、そしてなぜか黒縁の眼鏡をかけていた。まるで諜報員のような風貌だ。

「あ、穂波さん。どこ行つてたの?」

「この作戦会議に多分あつた方がいかなつて思うものを持つてきたよ」

「多分あつた方がいいもの?」

そう言つて持参したファイルを机の上に広げる水雲。

何だ何だと周囲に集まつた皆は、そのファイルの中身を確認して驚愕する。果たしてそこに記載されていたのは、今度の球技大会での対戦相手に関するありとあらゆる情報だつたのだ。簡単なプロフィールはもちろん、その人物の癖や趣味、思想傾向といった内面までつぶさに記されている。

いつの間にか行方をくらましていた彼女はこれ程までに貴重なものを用意していたらしい。確かにこれがあるのとないのとは作戦の立て易さも大きく変わってくる。

「すごい……！　これ、どうやって集めたの!？」

「まあ、ちよつとね。他にもバスケットボールに関係する資料を幾つか集めておいたよ。……どう？　これで少しは話し合いも進みそう？」

「ありがとう！　すつごく助かる！」

「さすが過ぎるぞー、この万能少女め。相変わらず格好いいところ見せてくれるじゃん。ちよつと揉ませろー」

「んっ……。ちよつと中村さん、脇腹は駄目だつて……」

「本当にすごいです、穂波さん。……そういえばどうして眼鏡を？　普段はかけてませんでしたよね？」

「ああ、これ伊達だよ。ほら、情報収集といえど何となく眼鏡つて感じしない？　だから試しにかけてみたんだ。奥田さんとおそろだね！」

「ふふっ、とてもよく似合っていますよ」

彼女がもたらした情報により先程まで停滞していた状況が動き出した。資料を参考にしつつ女性陣は様々な意見を出し合う。やがて大体的方針が決まった。

「——よし！　じゃあ皆、試合に勝って全校生徒の気分を盛り下げよう！」

(……女子チームは問題なさそうですね)

負ける気は毛頭ない、むしろ勝つて彼らの鼻を明かしてやろう——そう意気込む彼女

たちを殺せんせーは遠くから穏やかな眼差しで見守る。

彼女たちならこの逆境にも立ち向かえるに違いないと、そう信じて。

「台ちゃ——じゃなくて、律ちゃん！　ちよつとお願ひがあるんだけど……今度の球技大会関連のことで、少しだけ貴女の手を貸して欲しいの」

『……私にですか？　それは構いませんが、私は当日参加できないので穂波さんのお役に立てるかは……』

「もう、そんな寂しいこと言わないで。貴女だけを除け者にはしないよ。……律ちゃんじゃないと駄目なの」

『……分かりました。私は何をすれば？』

「それはね——」



球技大会当日。四つのクラスによって争われた本戦は、順当にA組が勝ち抜き結果となった。司会からA組の優勝が告げられ、体育館内に大きな拍手が響き渡る。

しかし、これで終わりではない。むしろここからが本番だと言わんばかりに何かを待ち望んでいる者もいる。

これから行われるのはエキシビジョンマッチという名の公開処刑、バスケットボール部の選抜メンバーたちによるE組への制裁である。

強者から一方的に負かされる弱者のあり様を全校生徒に知らしめることだけを目的とした試合。当然E組の勝利を願っている生徒など一人もいない。

この会場にいる誰しもが、彼らが無様に敗北する光景を心待ちにしているのだ。

(ま、そもそもE組に勝ち目なんてある訳ないけど)

女子バスケットボール部マネージャー、獅堂鳴子は内心そう呟く。

片や全国に出場経験のあるチーム、片や経験者のいない素人だらけの集団。どちらに勝ちの目があるのか、そんなものは火を見るより明らかだ。

仮にE組を応援する間抜けな生徒がいたところで、この勝敗は決して覆ることはない。いよいよ試合が始まった。

ジャンプボールを易々と制した選抜チームは早速相手の陣地へ攻めにかかる。

(ふーん……ゾーンディフェンスとはね)

ボールが取られるや否やE組はすぐさま自陣のゴール下へと移動し、そこで台形に陣を組んでいた。

ゾーンディフェンス——常に特定の相手選手に一对一で張りつくマンツーマンディフェンスとは対となる戦術。

なるほど。ただで負ける気はないのか、どうやら向こうは色々と考えてきたらしい。相手に一对一でついたところでどうせ抜かれるのだから、それなら最初からゴールの下で守備を固めていた方が効率的ということか。

だが、その戦術にもデメリットはある。

ゾーンディフェンスにおいて最も重要なのは連携能力。マークの受け渡ししの判断や、それによって起こる能力差のミスマッチにどう対応していくのかなど課題も多い。

そしてその連携能力に関しても、現状選抜チームの方が圧倒的に上だ。  
(地力が違うのよ、地力が)

固めていた守備をあつさり突破され、E組はシュートを決められた。周囲から歓声が上がる。

(素人の小細工が私たちに通用する訳ない。E組の士気は下がる一方ね。……これで心も折れたでしょ)

ちつぽけな蟻が巨大な象に敵う筈もない。

加えて、あちらからすればこの空間はアウエー過ぎる。点を取る度にいちいちブーイングが巻き起こり、逆に点を取られればその都度大歓声。……こちら側が思わず同情を覚えてしまう程の不遇っぷりである。

まもなく第一ピリオドが終了する。今のところそこまで点差は開いていないが、彼らの精神状況によつてはこの先もつと広がるだろう。

少なくともここから逆転することは絶対にはあり得ない。冷静に分析を済ませた鳴子は心底退屈そうな表情で試合の成り行きを傍観するのだった。

ところが、第二ピリオドから彼女の想定を遥かに上回る事態が起き始める。

今まで温存してきた主戦力を一気に投下しE組が怒濤の追い上げを見せ始めたのだ。開いていた点差がじわじわと縮まりだし、選抜チームも焦りを隠せずにいる。

中でも特に目覚ましい動きをしていたのは、キャプテンとポイントガードの選手。この二人を中心に向こうは猛攻を加えてくる。……いや、二人だけではない。かの妖精、金髪碧眼の彼女もまた地味に見事な働きをしている。

(へえ、E組にもあんなに動ける子がいるんだ)

彼らがここまで渡り合えるとは思ひもしなかった。逆境を物ともしない姿勢はまさしく称賛に値する。



(でも……あーあ、おかげで皆を本気にさせちゃったね)

僅かに残っていた慢心が完全に抜けたことで選抜チームの目の色が変わった。彼らの頑張りが、皮肉にも彼女たちに本気を出させる結果となってしまったのだ。

間違いなく今度こそE組は終わりだ。

全力を出した選抜チームを前に、もはや対抗する術などありはしない——

「……………え？」

一瞬目の前で何が起こったのか分からず、鳴子は呆けた声を出した。



第二ピリオドが終わり、E組はあの選抜チームを相手になんと六点差まで詰め寄っていた。メグとひなたの著しい活躍、水雲が事前に集めた対戦相手の情報、暗殺によって培われた基礎体力と協調性……この中からどれか一つでも欠けていればこうも健闘することはできなかった。

この試合、このままいけば本当に勝てるかも知れない。

思わずそんな淡い幻想を抱いてしまう程に今のE組には勢いがあつた。

しかし、現実はその甘くない。

インターバルを挟んでの最後のピリオド、相手の動きが明らかに変化したのだ。今まで以上に速く、鋭く、統率の取れた動きで攻めてくる。

そのうえ守備の方法まで変えてきた。E組と同様の戦術——ゾーンディフェンス。ただし、練度では天と地の差が存在する。手本を見せてやるとも言わんばかりだ。

あえて同様の戦術を取ることとこちら側の心を徹底的に折るつもりなのだろう。

もはや選抜チームはE組を弱者と認識していなかった。

弱者以前にこの連中は、あろうことか強者に逆らうことをよしとする身の程を弁えない愚者である。思い上がりも甚だしい。弱者は弱者らしくふるまっている。お前たちは敗北者なのだ。地面に這いつくばうのがお似合いだ。

「いよいよ向こうも本気か……」

「リーダー、どうする？」

「どうするも何もこつちにはもう作戦がないからね……。とにかく全力で殺るしかない……」

だが、当然ながらあちらの守りはこちら以上に堅固だ。

これを突破するのは正直かなり厳しい。到底一筋縄ではいかないだろう。

先程とは打って変わってE組内に暗雲が漂い始める。

「大丈夫だよ！ 何とかなるって！」

そんな危機的状況の中でも笑みを崩さない人物が一人、彼女——水雲だけは平時と同じような面持ちでいた。

「とりあえず、まずは相手を引きずり出そうか。あのまま籠られてたらいつまで経っても攻め込めないもんね」

「引きずり出すって……一体どうするの？」

メグからボールを受け取った彼女はそのままコート上のセンターラインまで進んでいき、そこで何を思ったのか、なんと突然シュートモーションに入った。

——はあ？ そんなところで何を……。

相手チームや会場にいる観客、試合の審判、そして彼女のチームメイトですらその意図を理解することができずに首を傾げる。そんな場所からシュートを放ったところで、ゴールに入るどころか擦りもしないだろう。そもそも筋力が足りない。水雲が男性だったならば、あるいははゴールに入れられたのかも知れないが——

「嘘でしょ!?!」

「そんな馬鹿な！ あり得ない！」

だからこそ全員が次の光景に驚嘆した。

彼女から直上に打ち上げられたボール、それは体育館の天井付近まで到達するとゴールへ向かって落下していき、やがてそのままリングやボードに当たることなく綺麗にネットの中をすり抜けていったのだ。

まさに異常としか言いようがなかった。

そのシユート方法も、精度も。

「ふふふ……一応言っておくと、私はコート上のどこからでもゴールを決めることができるよ」

——ブラフだ。

選抜チームのキャプテンは直感でそう断じる。

実際、それは虚偽であった。距離が遠過ぎればさしもの彼女もゴールを決められない。センターラインまでが限界だった。加えて律と編み出したこのシユート方法は体力をかなり消費する。積極的に放つことはできない。

——けれども、万が一それが事実だったら？ こちらもスリーポイントを決め返さない限り、少なくとも一点ずつ差を詰められることになる。

そのうえ周囲からの印象の問題もある。

このまま彼女を放置してシユートを決め続けられたら、当然チームとしての実力を疑われてしまう。実はそんなに大した集団じゃなかった、なんて噂が流れた日には怒りの

あまり発狂するだろう。

これ以上E組を調子づかせてはならない。

数ある選手たちの中から選抜されたというプライドにかけて、この劣等どもを叩き潰す。真正正銘、ここからがお互いに小細工なしの本気でのぶつかり合いである。

「……穂波さん」

「ん？ なあに？」

「……相手をこつちと同じ土俵まで引つ張つてこれたのはいいんだけどさ、なんか迫力が増してない？ これ本当に大丈夫なのかな……。何か策はあるの？」

「……。大丈夫だよ！ 何とかなるって！」

（あ、特に何も考えてなかったんだ）

（何も考えてなかったんですね）

（なんだろう……さつきから割と結構とんでもないことをやつてる筈なのに、漂うポンコツ臭もすさまじい……）

「とにかくここからが正念場だよ！ こつちも負けてらんないね！ さあ張りきつてい

こう、野郎どもー！」

(……私たち女なんだけど)

(狙って言ってるのか素で間違えてんのか分からん)

(なんか色々締まらないなあ……。穂波さんらしいっちゃらしいけど)



エキシビジョンマッチの興奮を語る

女子バスケット部マネージャー 獅堂鳴子さんにインタビュー！ (聞き手：3 | A 放送部  
和泉仙太郎)

——球技大会ではお疲れ様でした。

獅堂 ありがとうございます。まさかE組があそこまで健闘するとは意外でしたけどね。

——非常に接戦だったと聞いています。E組の中で特に手強かった選手はいました

か？

獅堂 そうですね。あのキャプテンはともいい動きをしていました。E組にしておくのが惜しいくらいに。後はポイントガードのショートカットの子。とにかく運動量が多くて、ボールを持たせるのが怖かったですね。それからパワーフォワードのぽっちゃりの子。彼女のゴール下での威圧感と包容力には苦しめられました……。でも、個人的に一番印象に残ったのは……。

——印象に残ったのは？

獅堂 やはり「妖精」の彼女でしょう。彼女が試合終盤で見せたセンターラインからの超ロングシュート、あれには本当に度肝を抜かれました。思わず笑っちゃいましたよ。あんなに離れた場所から、あんなに綺麗にゴールが決まるなんて普通想像できません。漫画かよ、って（笑）

——試合の流れを変えかねない得点だったと。

獅堂 はい。ですから、チームの皆はよく戦ってくれたと思います。特に最後の最後までE組にゲームの主導権を握らせなかったところはさすがでしたね。

——それでは最後に一言お願いします。

獅堂 当バスケット部ではまだまだ部員を募集しています。もちろん未経験者の方でも構いません。この球技大会でバスケットに興味をもたれた方は私や部員、顧問の先生に一声

かけて頂けると嬉しいです。一緒に頑張りましょう！

——本日はありがとうございます。

獅堂 ありがとうございます。



## 「教員二人の所見」

イリーナ・イェラビッチ——通称ビッチ先生。

ここ、三年E組では僕たちに対して主に実践的な英語の会話方法を教えている彼女は、実は殺せんせーを殺すために国が雇った暗殺者だ。

美貌に加えて様々な言語を操る対話能力をもち、それを活かしてどんな暗殺対象であつても本人や部下を魅了して接近し容易く殺す。まさしくプロ中のプロ。

当初はそんな彼女と少し蟠りがあつた僕らだけど、今はもうそれもすつかり解けつつある。

「“L”と“R”は発音の区別できるようになつておきなさい。これからはその辺りも授業でチェックするわよ」

さて、これまで幾度となく潜入と暗殺を繰り返してきた暗殺者が行う授業は、その経験に裏打ちされていることもあつて非常に面白いものだった。

授業では海外ドラマを教材として用いつつ、時々実演を交えながら自身の経験談なんかも聞かせてくれる。本校舎の授業ではこういった話はあまり聞くことができなかつたため、とても新鮮に感じられた。

……ただ、彼女の授業には少し問題が。

授業で出題される問題に正解できた場合、あるいは正解できなかった場合、男女問わず皆の前で公開クイズの刑に処されるのだ。ビッチ先生は将来役に立つからつて一向にやめようとしなけれど、正直かなり精神が擦り減るので勘弁して欲しいというのが皆の本音である。

でも、それをすっかり自身の糧にしている生徒も、まあいるにはいた。

「……」

「……」

ビッチ先生と穂波さん——現在、教壇の上で無言のまま互いに面と向かっている両者。ビッチ先生は少し険しげな表情で、穂波さんは楽しそうに笑っている。

こうして見比べてみると、二人の容姿はよく似ている。髪色や瞳の色もさることながらスタイルまで。穂波さんがクォーターなのは有名な話だけど、それでも純正の外国人であるビッチ先生とここまで張り合えるなんて。

明確に違うところと言えば髪の長さや黒子の位置、後は漂わせている雰囲気ぐらいの

もの。二人並んで立っているところを全く知らない人が見れば、多分大多数が彼女たちを親子と勘違いすると思う。それ程までにそっくりだ。

「あー……俺ちよつとトイレに行つてきます」

「俺もちよつと腹の調子が……」

突然、磯貝君と三村君が揃つて教室を出ていった。

その音で僕はふと我に返る。周囲を見渡せば、僕以外の生徒は既に行動を起こしていた。カルマ君はイヤフォンを両耳につけながら目を瞑っているし、真剣な顔の岡島君は机の下でこつそりカメラを構えている。

その他の何人かの生徒たちも、皆それぞれ何かの作業に没頭しようとしていた。共通しているのは、一部を除いてとにかく全員が教壇に立つ二人の方をなるべく見ないようにしているという点だ。

……そうだった。僕も呑気にこの二人を眺めている場合じゃなかった。

さつき言つたように、授業でのビツチ先生は誰彼構わずディープキスをお見舞いしてくる。そんな彼女と好奇心が旺盛な穂波さん。この両者が合わさった時、とんでもない化学反応が起こるのである。

「ふーん……あんた、”詛り”についての知識もあるのね。中々やるじゃない。それじゃあご褒美のチューを……つて言いたいところだけど、あんたに關してはこれも授業

よ。どれだけ上手くなったのか確かめてあげる」

「はい！ よろしくお願いします！」

そう言うと、ビッチ先生は穂波さんの体を片手でぐつと抱き寄せ、もう片方の手を彼女の顎にそつと添えて――

僕も皆と同じようにそつと二人から目を逸らした。視線を下に落とし、机の木目でも観察することにする。

……それにしても気まずい。彼女たちの艶かしい水音と息づかい、時折耳に入ってくるそれらを、果たして僕らはどんな気持ちで聞けばいいのか……。

一応今は授業中のため誰も何も言わず、それがなおさらこの学び舎にあるまじき空間を際立たせていて……本当に何の時間なんだ、これは。

「……ふう。まあ悪くはなかった、とだけ言っておくわ」

「はあ……はあ……。本当ですか?! それじゃあ、ついに免許皆伝つてことで――」

「甘いわよ。こんなのまだまだ及第点レベル、満点からは程遠いわ。満点が欲しいのなら……そうね、最低でも私をその気にさせるレベルの技術スキルを身につけなさい。そしたらあんたに免許皆伝の証として“魅女サキュバス”の称号をあげる」

「おお、なんか格好いい響き！ めっちゃ欲しいです、その称号！」

(……格好いい響き？ どこが?)

(それは称号とは言わねーよ)

「でも、初めての時と比べたら大分上達してるわね。この調子で努力し続けること。いい? 穂波」

「合点です! イエラヴィッチお姉様先生!」

——この二人は一体どこを目指しているんだ……。

クラス全員が心の中で総ツツコミを入れる中、ふふんと満更でもなさそうなビッチ先生。そしてそんな彼女を尊敬の眼差しで見つめる穂波さん。

……いくら好奇心が強いとはいえ、その歳でキスの仕方にまで興味を抱くのはいかがなものだろうか。何だか彼女の将来が心配に思えてくる光景である。

けれどもまあ二人とも合意の上でやっていることだし、外野の僕らがとやかく言えることでは……いや、やっぱり冷静に考えたらおかしい。感覚が麻痺してきている。

「Girls, be attractive.」

「Girls, be attractive!!」

彼女の知識欲は止まる所を知らない。

こうしてE組に誕生したエロチックなコンビは、今日も今日とて人目を憚らず濃密な口づけを交わすのだった。

〈穂波さんメモ その9〉  
羞恥心に欠ける



今でこそ水雲のことをかわいがっているイリーナだが、実のところ当初はかなりの苦  
手意識をもっていた。

『ほえー、それが殺せんせーの暗殺計画書ですかー』

彼女と初めて対面したのは、例の体育倉庫での暗殺計画を実行する直前である。旧校  
舎の薄汚れた職員室、そこに用意されていた安物の椅子に腰かけながら、タブレットで  
計画の最後の見直しを行っていた時であった。

『……盗み見るなんて、いい度胸してるわね』

『えへへへ、ありがとうございます！』

『褒めてないわ！ 皮肉に決まってんでしょ！』

金髪碧眼——太陽のように煌びやかな髪と、星のように澄みきった瞳。北ヨーロッパの辺りだろうか？ 外国の血を引き継いでいるのは間違いない。

そのうえ、よく見ればナチュラルメイクも施している。自分の顔の見せ方魅に十分な理解がある証拠だ。

ハニートラッパーたる者として常に自身の容姿に絶対の自信をもつイリーナだが、その自信が思わずほんの僅かに揺らいでしまう程度には彼女の容姿は美しかった。

『それで、私に何の用でしょうか？』

『渚から聞いたわ。あんたが一番あの暗殺対象を殺すことができる可能性があったって。……どうやったの？』

『ああ、その話ですか』

まあ、容姿に関しては別にどうでもいい。

イリーナが水雲に対して苦手意識をもったのは、彼女のその天然な性格と言動にある。

単独で暗殺対象にダメージを、都合三本もの触手を切り落としてみせたという生徒に興味を抱き、話を聞くためにこうして職員室まで呼び寄せたが、結果は散々であった。

本人曰く、ただ単に相手の不意をついただけ。接近してナイフを振るったらなんかいけた、とのこと。

……はつきり言つて何の参考にもならない。あまりにも適當過ぎる。完全に暗殺を舐めているとしか思えない発言である。というか、そもそも本当にこんなガキが百億円に一番近づいたのか？ もしや渚が嘘をついたのでは？

『はあ……。あんたと話してると頭痛くなつてくる……。話はおしまい、もう行つていいわよ……』

『それじゃあ失礼します——あ、最後に一つだけ。先生のその計画、多分失敗しますよ』  
『……は？ いきなり何を——』

『でも応援してます！ 暗殺、頑張つて下さいね！』

そう去り際に不吉な予言を言い残した水雲。

そしてこの後、企てた暗殺計画は彼女の言葉通りに見事失敗に終わり、おかげでイリーナは彼女に対して苦手意識が芽生えたのだった。

しかし、それも少し前の話。今はもちろん違う。

「——んせい！ 先生！ どうしたんですか？ 話の途中なのに急に黙り込んで……」  
「……何でもないわ。ちよつと考え事をしていただけよ。それよりどこまで話したかしら……ああ、そうそう。確か空港で彼に腕を掴まれたところだったわね——」

この少女のことを、イリーナはまるで自らの娘のように猫かわいがりしている。

そうなった所以は、教員として水雲と接する内に彼女が意外にも努力家であることに



気づいたからである。

類い稀なる容姿と才能に恵まれてもなお、彼女は決してその上であぐらをかこうとしない。むしろ自分自身をより高めるため、ありとあらゆる知識や技術、経験などを貪欲に得ようとする。その直向きな姿に、同じく努力家であるイリーナは共感したのだ。

幼い頃から凄惨で劣悪な環境で育ってきた彼女にとつて努力という行為は極身近なもの。例えばどんなに苦手なことだろうと逃げずに立ち向かい、克服してきた。

自身を心から敬い、親鳥に甘えるひなが如く懐いてくる水雲を見ると、何だか幼少期の頃を思い出す。

かつてロヴロやオリガから様々な教えを受けていた時の自分も恐らくこんな感じだったのだろうな、と。

「へえ、本当にそんなドラマみたいなことが……」

「Truth is stranger than fiction. 現実とは時に想定をはるかに上回る——そう珍しいことでもないわ。あのタコが存在なんか、その最たる例よね」

「あはは、確かに！ ……それにしても、イエラヴィツチお姉様先生の話はやっぱり面白いですね！ 聞いてて全く飽きませんし！」

それからイリーナに苦手意識を抱かせた主な原因である彼女の残念過ぎる性格につ

いて。

これに関しては、初めこそ会話する度に頭を痛めていたものの次第に慣れていき、最終的にはその天然なところも彼女のよきなのだろうという結論に至った。

一見めちやくちやわざとらしく見えるが、信じ難いことにこれが彼女の素なのだ。矯正のしようがない。

『イエラヴィツチお姉様先生』という明らかにイリーナを馬鹿にしているとしか思えない呼び方にしても、彼女が本心からそう言っていると分かった時の衝撃といったら、本当にもう……。

ここまで突き抜けていればいつそ清々しい。

腹が立つどころか、むしろ愛らしく思えてくる。

それに相手の警戒心をいとも容易く解いてしまう彼女のこの性格は、考えようによっては暗殺にも応用できる非常に有益な個性である。これを上手く活かせば、将来きつと優れた暗殺者として大成できるだろう。

そうでなくとも彼女のそれは、ただ普通に暮らしている分にも彼女自身に得をもたらずに違いない。

「そう？　言つとくけど、褒めても何も出ないわよ」

「ええ、ほんとですか？」

「……何が欲しいのよ」

「最近、やけに唇が乾燥するんです。……先生、私の唇をどうか潤して頂けませんか？」  
「……四十五点。捻った誘い方はあんたに合っていないわ。もつと直球でいいのよ、直球で」

「先生！ 私とちゅーして下さい！」

「……二十二点。直球過ぎるのも考えものね……。今度は色気が全く感じられなくなつたわ……」

目を閉じてぐつと唇を突き出す水雲。

そんな彼女の頬を軽く撫でつつ、イリーナは自身の唇をそこへ向かって柔らかく重ね合わせる。

……彼女に対する苦手意識はなくなったものの、代わりに一つ思うようになったことがある。

それは、こうしてキスをしていると特に分かり易い。

確かに彼女の舌づかいはイリーナにされるがまだまだ初期と比べれば随分と上達した。その著しい成長には目を見張るものがある。未恐ろしいのが、それでもなお未だに高みを目指し続けているところか。

だが、それら以外が一切感じられない。彼女のキスには肝心の「情欲」というものが

欠けている。

彼女くらい年の年であれば少しは沸き上がってもおかしくない筈が、それが全くないというのには些か変だ。ましてやキスの相手はあのイリーナだというのに。プロたる彼女のテクニクをしても水雲の色気を引き出せない。

穂波水雲という少女は明るく朗らかな性格とは裏腹に、どこか空虚な雰囲気の内包しているように見えた。

それは単なる思い過ごしの可能性もあるし、そうでない可能性もある。イリーナにとつてはどちらでもよかった。

(ま、人つてそういうもんよね)

人間誰しも心の内に何かしら抱えているものである。

イリーナにもあるよう、彼女にだって触れられたくないことの一つや二つあるだろう。

ただ、とてももつたいたいと思う。見た目で忘れそうになるが、彼女はまだ十代半ばなのだから。

この子がしがらみから解放されて真に心の底から笑顔になれる日は果たして来るのだろうか――

「……………ふはあ。どうでした!?!」

「やつぱり満点はあげられないわね」

「え、ちよつと厳し過ぎませんか？　今、割と結構上手にできていたような気が……」

「はあ……。あのね、はつきり言つて上手いキスができる人間なんてこの世にごまんといるわ。所詮こんなの大した技術でも何でもないのでよ。ある程度経験を積めば誰だつて上手くなれる……。そこからさらにレベルを上げるためには技術以外のものが必要になつてくるの。あんたも何となく気づいてはいるんでしょ？　私の本気を一度味わつたことがあるんだから」

「そりゃあ、まあ……。私のキスはイエラヴィッチお姉様先生みたく相手を骨抜きにできませんし……。それじゃあその技術以外に必要な要素つていうのは——」

「それは自分で考えなさい。宿題よ」

突き放した言い方をするイリーナに水雲は口を尖らせてぶーぶーと不満を露わにする。

そんな二人の光景は、外見が似通っていることもあつてまるで本物の親子のやりとりのようだ。

……もつとも、両者を親子と例えるにしては愛情表現が過激に過ぎるが。

「せめてヒントだけでも——」

「駄目。自力でたどり着きなさい」

「そんなあゝ……」



「さういつた技術つて別になくても生きていけますけど、あつてもいいものでしょう？」  
烏間惟臣から見て、穂波水雲という少女は非常に優秀な生徒だ。明晰な頭脳に端麗な容姿、加えて性格に関して元A組の生徒だというのに選民思想に染まっていない。

誰に対しても対等に接するその姿に、E組の生徒たちも一部を除けば彼女に心を許しつつある。非の打ち所がないとはまさに彼女のような人物を指すのだろう。

また、大層な努力家でもある。

惟臣が彼女と本格的に対話したのは彼が就任して初日のことであつた。

『烏間先生！ 改めまして、穂波水雲と申します！』

挨拶もそこそこに本題へと入る水雲。

その内容は、惟臣がもち得る戦闘技術を可能な限り教授して欲しいというもの。

もちろん拒む理由もなく、その日の放課後から早速彼女への個人的なレッスンは始

まった。授業では教える予定のない内容、格闘技や関節技などの技術を。

彼女の覚えは異様なまでに早い。惟臣が教えたことを、水を吸うスポンジのように次々と吸収していく。

元から才能に恵まれていたこともあるが、彼女の場合はそれに驕らなかつたことも大きい。

……彼女のその努力の根源は一体何なのか？

ある日ふと気になって尋ねてみたところ、水雲の口から返ってきたのが上記の言葉であつた。

知識や技術は、あればある程にいい——なるほど。確かに彼女の言う通りだ。それらには必要最低限のものさえあれば生きるに困らないが、必要以上にあつたとしても困らないものである。あればある程に選択肢が広がり、より豊かな環境に生きることができるようになるのだから。

しかし同時に、彼女の回答は惟臣に違和感を感じさせるきつかけにもなつた。

彼女も暗殺任務を遂行するメンバーが一人。だから彼はつきり『報酬の百億円を獲得するため』といった類いの返事が返ってくるものとばかりに思っていたのだ。

ところが、返ってきたのは一見もつともな理由のように見えて、その実何とも曖昧で具体性に欠けた言葉で。

これだけなら単に考え過ぎの可能性も否定できないが、妙に思われた部分は他にもある。

それは放課後での個別の特訓や体育の授業の際に彼女と組み合えばよく分かることだが、彼女からは殺意はおろか敵意や悪意、害意といった相手を傷つけようとする意思が一切感じられない。

別段そのような意思をもって取り組んで欲しいという訳ではないが、彼女は不自然なまでに希薄過ぎる。

……そういった点では彼女はかの少年、潮田渚と同様に極めて異質な存在と言えるだろう。

攻撃を避け難い程に感情が読めない水雲と、時折背筋が凍る程に鋭い殺気を放つ渚。防衛省の工作員、そしてE組の体育教員として。惟臣は特にこの両者を気にかけていたのだった。



## 「鷹狩り」

「俺の名前は鷹岡明！ よろしくな、E組の皆！」

たくさんのスイーツやジュースが入った大きな袋の束を両手に、ある日突如としてE組へとやって来た男——彼、鷹岡明は惟臣の同僚らしい。何でも防衛省から彼の補佐をするために派遣されたのだとか。

「明日から体育の授業は俺が受けもつ！ 皆、父親の俺を信じて全部任せてくれ！」

だが、両者の性格は正反対であった。

いつも厳しい顔を浮かべている惟臣に対し、明は笑顔でフレンドリーな雰囲気を漂わせている。当人の恰幅のよさも相まって、その姿はまさしく頼りになる父親のよう。

惟臣が不人気という訳ではないが、彼は常に生徒たちと一定の距離を保っている。

そのため向こうからぐいぐいと距離を詰めてくる明は、皆からすれば非常に新鮮だったのだ。

彼の存在は早々に受け入れられつつあった。

きつと授業も楽しいものになるのだろう——誰もがそう思っていた。……実際にその時が来るまでは。

「……は？ 何だこれ？」

「う、嘘でしょ……」

「十時間目……夜九時まで……訓練……？」

訓練内容の一新に伴い変更されたというE組の時間割、全員がそれを見て一斉に驚愕する。

時間割表をびっしりと埋める『訓練』の文字、そのうえそれは十時間目の夜九時まで続いているのだ。釣り合いがおかしいのは一目瞭然である。このようなカリキュラム、到底中学生がこなせるものではない。

ただでさえE組には成績不振の生徒が集うというのに、これではさらに下がってしまう。……明の話では理事長も承諾したそうだが、その理由を察するのは容易い。

何にせよこんなものは絶対に認められない。

陽斗を筆頭に、納得できず不満に思った何人かの生徒が彼に抗議しようとして——  
「鷹岡先生、少しよろしいでしょうか？」

透き通った声が空間に響き渡る。

その声は鈴を転がしたかのように繊細だが、それでいて力強い意思を秘めているようにも感じられた。

声の主が明らかとなり、一瞬騒々しくなりかけた現場はやがて静かに収束する。

修学旅行の誘拐事件では一貫して冷静な態度を失わず、先日の球技大会では驚異の情報収集能力と運動能力を周りに見せつけた。これまで鮮やかな活躍を果たしてきた彼女ならば、もしかしたらこの状況もどうにかしてくれるかも知れないと。皆、無意識にそんな淡い期待を抱いたのだ。

果たしてその思いを察したのかどうか。

普段のように笑顔を浮かべる水雲は、しかし普段よりも少しだけ真剣な様子で明と向かい合ったのだった。

「……何だ？ 一応言つとくが、時間割に関することなら受けつけないぜ。地球の危機なら仕方がないと理事長先生にも承諾して貰つてるからな」

「はい。私は別にこの時間割自体に異議を唱えるつもりはありません。あの浅野理事長がお認めになったということですし、それに何よりも人類の命運がかかっている訳ですから。スケジュールの変更も致し方ないでしょう」

「お？ 物分かりのいい子は父ちゃん好きだぞ——」

「ですが鷹岡先生、貴方は別です。はつきり言って、私は貴方のことがいまひとつ信用で

きません」

再びE組一同は驚愕する。

それは水雲がこのむちやくちやな時間割を是としたこともそうなのだが、それ以上に彼女の明に対する直球過ぎる言動に驚きを隠せなかつたのである。

「……そりやまたどういう意味だ？」

「どうも何も言葉の通りです。貴方が烏間先生より優れた指導者であることは話には聞いていますが、私にはそうは思えません。初日から食べ物を持ち込み、私たちに対して妙に馴れ馴れしい態度で接して……ああ、別にそういつたやり方を否定している訳ではありませんよ？　むしろ相手との距離を詰めるには最良の方法かと。ただ貴方の場合、何か裏があるような気がしてならないんです」

例えばどんな相手だろうと積極的に、友好的に接するのが彼女だ。自身を嫌悪している竜馬にさえ嫌われていることを分かっているとお話しかけにいくのだから、それはもう筋金入りである。

ところが今回に限り、水雲は明に対して露骨に警戒心をあらわにしていた。昨日会ったばかりの相手である。にも関わらず、彼女は疑惑の眼差しを彼に向けている。

とはいえ、彼女が言いたいことも理解できる。

現時点で、E組の生徒たちの内の何人かは密かに彼女と同じような感情を抱いてい

た。微量ながら、彼の態度にはどこか作爲的なものを感じると。

「烏間先生は最初の授業でちよつとしたパフオーマンスを披露して下さいました。磯貝君と前原君がナイフを持って同時に攻撃し、そして先生がそれらを無手で捌くといったものです。貴方のように物を配った訳でも、露骨に距離を詰めてきた訳でもありませんが、それでも彼は私たちから信頼を得ました。……鷹岡先生、貴方はどうでしょう？」

繰り返しますが、私は別に貴方のそういういったやり方を否定している訳ではありません。貴方からは烏間先生のような誠意が感じられない、そこが一番の問題なんです」

——事務作業の方には、鷹岡先生が専念すればよろしいのでは？

非常に、非常に珍しい。

水雲によるきつぱりとした拒絶の言葉。

そんな彼女の言葉を聞いた明はというと——なぜか未だ朗らかな笑みを浮かべたままであった。

平時ならともかく、これから教えようとしている生徒の一人にいきなり冷たく突き放されてのそれはむしろ不気味でしかない。こめかみを人差し指でぽりぽりと掻きつつ、明はより一層その笑みを深める。

「はっは—— お前、随分と面白いことを言うな！」

そして彼は、そのまま水雲の元へと近づいて。

「生意気なガキが。調子に乗るなよ?」

その瞬間、何が起きたのか目視できた者はいない。

辺りに響き渡る破裂音と地面に吹き飛ぶ水雲の姿、その両方を見てようやく何が起こったのかが分かった。

彼女はぶたれたのだ。つい先程までフレンドリーな人物だと思われていた明の手によって。

……ああ、ゆえに彼女は警戒していたのだろう。

時間割変更の時点で嫌な予感があった。しかし、まさか彼の本性がここまで危険なものだったとは。

「お前、親元でぬくぬくと育ってきた口だろう? 俺にはよく分かる。たまにいるんだよ、お前みたいな温室育ちの小娘が。周囲からかわいがられ、甘やかされ、その結果大人をなめるようになる。何でもかんでも自分の思い通りになるってか? 心底呆れるぜ……。だがな、今日からは俺がお前の父親だ。しっかりと一から教育し直してやる。なに、これも父親として当然の務めだからな」

右手をひらひらと振り、完全に本性を現した明は地面に倒れる水雲を狂氣的な目で見下ろした。

次いで、彼はその視線を残りの生徒たちに向ける。

「お前たちも父親の俺に逆らおうだなんて考えるなよ？　俺たちは家族なんだ。父親の言うことを聞かない家族が、世の中のどこにある？」

確かに穂波水雲という少女は優秀だ。

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能と三つの要素を兼ね備えた彼女に敵などない。

しかし忘れてはならないのが、彼女がまだ中学生であることと、加えて力の弱い女性であること。理不尽な暴力の前には、さしもの彼女ですらどうしようもなくて。

その事実是谁もが知っていた筈であった。

特に、この間の修学旅行で彼女と同じ班であった渚たちなんかはなおさら。

「ああ、抜きたいやつは抜けてもいいぞ？　その時は俺の権限で新しい生徒を補充する。……けどな、できれば俺はそんなことしたくない。父親として一人でも欠けて欲しくないんだ。なっ！　家族皆で地球の危機を救おうぜ！」

あまりにも極端な「親愛」と「恐怖」。

子ども相手に平気で暴力を振るう異常者。

またしても新たなるモンスターが三年E組に襲来したのだった。

「穂波さん、大丈夫!？」

「怪我は!? ちょっと顔見せて!」

「——っ! ほ、穂波さん! 血が! 血が出てます! こ、これ使つて下さい!」



明が同期の惟臣に対して抱く感情——それは強い対抗心である。現役時代、兵士の資質では彼に劣り、それゆえに見出した活路が教官への道であった。

家族のように近い距離で接する一方、暴力的な独裁体制を築くことにより短期間で忠実な精鋭を生み出す。

効率面のみを重視するなら問題はない。……もつとも、教えられる側からすればたまったものではないが。常日頃から暴力を振るわれる彼らは強烈なストレスを感じ続け、中には心身ともに潰れてしまった者もいる。

これと同様のことを明はE組でも行おうとしていた。

相手が子どもだろうが関係ない。強引にでも精鋭として仕立てあげ、そしてあの超生物を殺せた暁には……もはや惟臣など取るに足らない。英雄を育てた英雄だ。さぞか



し素晴らしい心地だろう、と。

「やめろ、鷹岡！」

だが、惟臣がそんな蛮行を易々と見逃す筈もなく。

異変に気づいた彼はすぐさま現場へと駆けつけてきた。

「どういうつもりだ？ 言つた筈だ、彼らは職業軍人ではないと。手荒なまねはよせ！」

「ちゃんと手加減はしてるさ、烏間。大事な俺の家族なんだからな。ほんのちよつとばかりしつめただけだ。まあ、いわゆる『愛の鞭』つてやつだな！」

一切悪びれる様子もなくいけしやあしやあとそう言つてのける明に、惟臣の表情も陰しくなる。

この男は本気だ。生徒たちの体など気にもせず、本気でこんなむちゃな訓練を強行しようとしている。

そんなことを成長期の学生にやらせればどうなるのか。まさかそれが分からないなんてことはないだろう。彼らの体を考えるなら、ある程度の加減というものが必要だ。

明を説得するには一体何を言えばいいのか。

惟臣が言葉を探す最中、続いてその場に現れたのはE組の担任教師であつた。

「——いいえ。彼らは貴方の家族ではありませんよ。私の生徒です」

二メートルをゆうに超える巨大な体に、そこから生える何本もの触手。極めつけは、

人間には視認できないマツハ二十という驚異的なスピード。

そんな超生物が今、明の眼前に立ち、彼に向けて怒気を発している。

しかし、彼は全く臆さない。むしろそれどころか、その超生物相手に堂々と食つてかかる始末である。

「何だ？ 何か文句があるのか？ 体育は教科担任の俺に一任されている筈だぜ。今の罰も立派に教育の範囲内だ。短時間でお前を殺す暗殺者を育てるんだぞ？ 厳しくするのは当たり前だろう？ それとも……多少教育論が異なるだけで、お前に危害も加えない男を攻撃するのか？」

そこには確かに、彼自身が信奉とする確固たる教育理念が存在した。

……彼の言うことにも一理ある。

時間に余裕があるならともかく、ない以上はそれ相応に厳しくいくしかない。こうしている間にも、地球の危機は刻一刻と迫っている。悠長にしている暇などない。

加えて、殺せんせーは暗殺対象殺される側である。

そんな彼が何を言おうと、明が聞く耳を持つ訳がない。彼の教育理念を否定することができるのは、彼と同じ立場にいる惟臣だけであろう——本来ならば。

「……なるほど。貴方の言うことにも一理あります」

「理解できたか？ なら、部外者どもはさっさとどこかへ消えろ——」

「ただし。それは貴方の言う罰が、きちんと罰の範囲内に収まっていればの話です」  
にゆつと伸ばされた一本の触手の先。促されるがままにその先を見た明は、初めて顔色を変化させた。

そこにいたのは、数名のクラスメイトに介抱されている金髪の少女。つい今し方、明がぶつた相手である。

その彼女が——口から夥しい量の血を流していた。

「——っ！」

「これが罰ですか？ 生徒に血を流させることが、貴方にとつての罰だと？ ……ならば、もはや貴方の教育論など知ったことではない。私には生徒たちを守る義務がある。大事な生徒を傷つけた貴方を排除することに、私は微塵も抵抗を感じませんよ？」

大きく見開かれた目が彼の動揺の具合を表している。

力の加減には細心の注意を払った筈だ。少なくとも今のこの段階でガキどもに流血させるつもりはなかった。

彼の教育方法は暴力を主体としているが、始まって早々いきなり暴力ばかりを振るえばあつという間に生徒たちが潰れてしまう。明としてそこまで考えなしではない。無論、将来的には大半が潰れる見通しではあるが、何も今無理にその時期を早める必要はないだろう。

振るうにしても、最初は生徒が自分に従わなかった場合のみに限定し、力も大分弱め  
にしている。そこから徐々に振るう機会と力を増やしていくことで自身に対する恐怖  
心を育てていくのだ。そしてある程度の時が過ぎれば、彼の意思に極めて忠実な兵士た  
ちの完成である。

ところが、文字通り最初の一手から彼は失敗した。

初手から相手に出血させる程の強過ぎる暴力を振るってしまい、結果彼がE組の生徒  
たちの心に植えつけたのは、恐怖心ではなく反抗心だった。

「クソツ……力加減をミスったか？ あー、分かった分かった。そんなに睨まれるのは  
父ちゃんとしても不本意だ。その金髪に傷をつけたことは謝る」

惟臣は言わずもがな、生徒たち全員からも鋭い目つきで睨まれる明。特に彼にとって  
手痛かったのは超生物の怒りを買ってしまったことであつた。

体色を漆黒に染めた殺せんせー、その姿は見ているだけでも身の毛がよだつ。それ程  
までに恐ろしい。

完全に四面楚歌な状況に焦りを覚えたのか、とりあえず謝罪の言葉を口にする。

だが、決して自らの過ちを認めた訳ではない。

彼はタイミングを見計らっていた。当初に想定していた展開とは異なるが、あの手を  
使うなら今しかない。自身がこの場で決定的に主導権を握るために――

「でもな、俺だって仕事でここに来てるんだ。少しは俺の顔も立てて欲しい。それに、仮に俺の教育が間違っていたとして、烏間の教育が正しいとも限らんだろう？」

だからこうしよう。そう言っただけで明が提案したのは一種のゲームのようなものであった。

これから惟臣が一人の生徒を選び、その生徒がナイフを持って明と闘う。そして一度でも彼にそのナイフを当てることができれば。その時は惟臣の教育が自分のものよりも優れていたと認め、明はこのE組を立ち去る。

「要は烏間がやったことと同じだ。お前らに示してやる、俺の誠意ってやつをな」  
……そこまで悪くない提案ではある。

惟臣による暗殺の訓練を受け始めてしばらく、最初の頃と比べれば体力も随分と増えてきた。先日の球技大会でも男女ともに好成績を残せたのがその証左だ。彼らは着実に成長している。

今なら一度ナイフを当てるくらい訳ないだろう。

それにこれは、ここで好き放題暴れ回った明へ合法的に仕返しできるチャンスでもある。

「受けようぜ、烏間先生！」

「俺たちが先生の授業の正しさを証明します！」

やる気満々の生徒たち。そんな彼らの表情を見て、明は一度大きく頷く。

「よし！ 皆、やる気十分のようだな！ それじゃあ早速始めるか——と、その前に。この勝負で俺が勝った場合の話をしておこう」

——もし俺が勝った場合、お前らは今後俺の言うことに絶対服従。外野にも一切口を出させない。

「それと……使用するナイフはこれだ」

不意に彼が鞆の中から取り出した物、それは——刀身が銀色に輝くナイフであった。見慣れたゴム製の対先生ナイフではない。

彼の手に握られていたのは、あろうことか金属でできた本物のナイフである。

衝撃のあまり、その場の空気が凍りつく。

この男は本気で言っているのか？ 生徒にこんな危険な物を使わせようなどと、本気で？ ……とても正気の沙汰とは思えない。

「——待て、鷹岡！ 正気か!? 生徒たちは人間を殺す訓練も用意もしていない！ 本物を持ってても体がすくんで刺せはしないぞ！」

「安心しな、寸止めでも当たったことにしてやる。さて、そろそろ誰を選ぶか決まったか？ 鳥間。なんなら諦めて降伏してくれてもいいんだぜ！」

ざくりと地面にナイフを刺し、高らかに下卑た笑い声を上げる明は既に自身の勝利を

確信している。

当たつても危害がない対先生ナイフと違い、これは人に当てれば確実に怪我をさせてしまう代物。このガキどもがそんな物を扱える筈がない。下手をすれば、本当に相手を殺してしまうなんてこともあり得るのだ。

よしんば扱うことができたとして、実際にそれをかつて精鋭部隊に所属していた彼に当てられるかどうかとなるとまた別の問題になってくるであろう。

「……」

一方で、惟臣は判断に迷っていた。

誰を選ぶべきかで悩んでいるのではない。それならもう既に決まっている。

まず、候補として考えられたのは二人。その二人の内の一人在——水雲である。しかし現在の彼女は闘えるような状態ではなく、よって候補からは外さざるを得ない。

そのため選択肢は必然的に一つに絞られる。彼女の対のもう一人を選ぶより他ない。……惟臣が迷っていたのは、自身の指導者としてのあり方であった。

その生徒を危険にさらしてしまつていいのか。

その選択が教員として本当に正しいものなのか。

これを託す前に、せめて本人の意思を確認しなければ。

地面に刺さるナイフを引き抜いた彼は、その足でとある生徒の元へと向かおうとして

「——鳥間先生、僕に殺<sup>や</sup>らせて貰えませんか？」

その生徒の方から申し出られたことに酷く驚いたのだ。



潮田渚という少年は穏やかな性格をしている。

その華奢な見た目からも分かるように、彼は争いごとに好き好んで参加するような人物ではない。

だから渚が自ら進んでそのようなことを言い出した時、周囲は酷く困惑した。実は、この場で一番困惑していたのは当人であった。

明に対して腹が立っていたのは事実だ。生徒へ理不尽な弾圧を行おうとしたり、惟臣に対してやたら挑発的な態度を取ったり、それらは到底看過できるものではない。

何より許せなかったのは、水雲に傷をつけておきながら少しも反省の色を見せなかったこと。いくら温厚な彼とて親しい友人を害されれば気分も悪くなる。



……とはいえ、まさか自分でもあんなことを口走るとは思いもしなかったが。しかし、不思議と後悔の感情はない。

ちらりと一瞬だけ水雲の方を見た後、改めて渚は惟臣と向かい合う。その瞳には彼の覚悟が表れていた。

「……分かった。君にこのナイフを託そう」

対先生ナイフとはまた異なる、ずっしりと重量感のあるナイフを惟臣は渚に託す。

元より彼を選ぶつもりではあつたのだ。

運動能力は平凡、体格と力も決して大きくはないが……だからこそ可能性がある。明が決めたルール下で行われるこの勝負において、彼ならばあるいはと。

そして——見事渚はこの勝負を制した。

「渚、お前すげーじゃん！」

「めっちゃスカツとしたわ！」

自然と近づく体運びのセンス、急所を狙える思いきりのよさ、元来持ち合わせている貧弱な見た目。

それらがうまくかみ合い、彼はこの闘いで暗殺の才能を開花させたのだ。その場にした皆の予想をはるかに上回る結果である。

歓喜に沸くクラスメイトたちからもみくちやにされて、渚は思わず笑みをこぼしてし

まう。彼の心にも少なからず喜びの感情があつた。

その一方で、惨めな敗北を喫した明はというと。

『経営者として様子を見にきました。新任の先生の手腕に興味があつたのでね』

『でもね、鷹岡先生。貴方の授業はつまらなかつた』

『教育に恐怖は必要です。……しかし、暴力でしか恐怖を与えられないのなら、その教師は三流——』

『そしてその恐怖すらも与えられなかつた貴方は、まさにそれ以下の存在だ』

——この学校には必要ありません。

突如として現場に現れた浅野理事長によつて直接解雇を通達され、その後怒りと悔しさに顔を歪めつつどこかへと去つてしまつた。

この学校の支配者からの直々の追放処分である。二度とここへは戻つてこられないだろう。

およそ全てが丸く収まり、改めて渚は彼女の方を見た。

「はい、口開けてー……。うわ、やっぱ結構痛そうだね。ざっくり切れてるわ、ざっくり」

「ご飯の時とか、しばらくは大変だね……」

「……ひえはひつひほへーははへんへいほ、ひふへひはふはつはつは」

「えつと、『イエエラヴィツチお姉様先生と、キスできなくなつちやつた』……え？ 悲し

むとこ、そこ？」

「つていうか、その呼び方まだ続けてたんだ……。それが一番びつくりだわ」

仲のいい女友だちに囲まれながら談笑している。

……あの様子なら、体の調子も問題なさそうだ。ほっと胸を撫で下ろした渚は校舎の中へ戻ろうとして――

「――潮田君！」

その声に、背後を振り返った。

振り返れば、そこにはおとぎ話の妖精が。妖艶な笑みをたたえており。その笑みに目を奪われた途端。彼女の姿は見えなくなっていて。全身を包む温もりと香りに、自分は今抱きしめられていると。理解した時には耳元で。

騎士に祝福を与える姫が如く。

甘美なる声で、彼が望む言葉を贈るのだ。

「さっきの貴方、とっても格好よかったよ♪」

……。

ふと気づけば、彼女は既にいなくなっていた。温もりと香りも消えつつある。果たして今のは夢だったのか、それとも現実か。

まるで狐にでも化かされたかのような心境で、渚はただその場に立ちつくすしかなかった。

「——渚？ 何でこんなところで突っ立ってんの？」

「……へ？ あ、えつと、その、ちよつとぼうつとしてただけ。別に何でもないよ！ あはは……」



生徒たちの様子を外から眺めながら、二人の大人たちは静かに語り合っていた。

その内容は、暗殺の才能を開花させた渚について。

もし彼が将来暗殺者になることを望めば、その時お前はどのようなのか。そんな惟臣の問いかけに対し、殺せんせーは答えに悩むだろうと返す。

けれども、それがいいのだと。

教師という存在は迷って当然のものだと。

「なら、彼女のことはどう考えている？」

「……。穂波さんのことですね？」

「ああ、そうだ。今回の件で彼女が取った行動について。お前も一応気づいてはいるんだらう？」

二人の視線の先では、金色の少女が友人たちと楽しそうに会話している。

俺も気づいたのは今になってからだ——そう前置きをした後、惟臣は自身の考えを語り出した。

「彼女が怪我を負った時、『手加減はしている』と鷹岡は言っていた。決してあいつを擁護する訳ではないが、俺はその言葉に嘘はなかったと思う。なんせあの段階で彼女に傷

をつけるのはどう考えても悪手だからだ。生徒たちから反抗心をもたれ、お前からも怒りを買うといふどこまでも不利な状況を、あいつが望む筈がない」

「……」

「では、彼女があれ程までに出血するような怪我を負ったのはなぜか？ 順当に考えれば、鷹岡が力加減を失敗したと考えるのが自然だ。……だが、本当にそうか？ 仮にも軍では優秀な教官として評価されていた男だ。そんな男がそんな失敗をすと思うか？」

つまり、水雲が怪我をしたのは水雲自身にあると。

「もつとも、これは鷹岡にミスがなかったという前提での話だ。あいつも人間である以上はミスの一つや二つしてもおかしくない」

「……しかし、貴方は確信しているのでしょうか？ 彼女のあの傷が、彼女自身の意思によるものだと」

「根拠はないがな……。まあ、勘のようなものだ」

「勘、ですか？ ヌルフフフ、勘というものもあながち馬鹿にはできませんからねえ」

そう言つて触手を唸らせる殺せんせー。

ひとしきりにゆらゆらと動かしした後、突然彼はぴたりとその動きを止めて。

「では、私の見解を述べましょう。結論から言えば、私も鳥間先生と同じ意見です。彼女はまず鷹岡先生に向かつてわざと煽るような発言をし、自身に暴力を振るわせるよう誘導した。それからぶたれた瞬間に自ら口内を噛みきり、深刻な怪我を負わされたと周囲に勘違いさせ、彼にとつて不利な状況をつくり上げた。間違いありません」

惟臣の意見に同意した。

「私が違和感を感じたのは、やはり彼女の口の中を実際に見た時でした。最初は外部からの衝撃によつてできたものと疑わなかったのですが、それにしても傷口がやけに深いような気がしましてねえ。出血の量も多かったですし。あれ程までに深い傷、本人がよほどの力を入れて噛みでもない限りは発生しないでしょう」

不自然だったのはそれだけではない。

例えば、明に対する態度と言動。会つたばかりの彼に、彼女は随分と失礼な物言いをしていた。

……今思えば、あれも彼女の策略だったのだろう。

明が特に嫌つてそんな性質の生徒を装い、自らに暴力を振るわせるよう仕向けた。

「なるほど。……ただ、一つ分からないことがある。彼女は一体いつ鷹岡の本性を見抜いたんだ？ あいつが着任してからまだ二日も経っていないから」

「それは簡単な話です。鳥間先生、鷹岡先生がこのE組へやって来た時、彼女から何か質

問されませんでしたか？」

「ああ……そういえばされたな。あいつがどんなやつか、かなり細かく聞かれた記憶がある」

「恐らく彼女は他の防衛省の方々にも質問をしています。彼がどのような人物か、とね。そして得られた情報から、彼女は彼を危険な人物だと判断し——」

「ここから追い出す計画を立てた。それもあの短時間で、か……」

恐ろしい少女だと心の底から思う。

情報収集、分析、立案、実行。これらをたった一人で、短時間で行えるだけでも異常なのに、必要とあらば自傷もいとわないという……。

中でも恐ろしいのは、目的を達するためなら国を脅かす超生物すらも躊躇なく利用できるところであろう。

彼女は殺せんせーをたきつけることで明をこのE組から追い出そうとした。

なぜなら、それが一番手っ取り早いからだ。

非常に合理的な手段と言えるだろう。そう、まるであの理事長のような——

「穂波さんとあの人は全然違いますよ」

帷臣の思考を遮るように殺せんせーは口を開いた。

「彼女は非情になれない人間です。目的のためなら本当に手段を選ばない彼とは違い、



合理性を優先しつつも手段はよく吟味するタイプ。機械のように冷たく見える時があるかも知れませんが、それは表面上の話です。彼女の内にもちゃんと情はありますよ。今回取った行動だって、全てはクラスメイトたちを守るためですからね」

「……利用されたことについては何も思わないのか？」

「ええ。利用と言えば聞こえは悪いですが、逆に考えれば彼女がそれ程までに私のことを信頼してくれていたという証明にもなります」

ただ前向きに捉えている訳ではない。

確信があつて、彼はそう言っている。

……ああ、つまりそういうことか。

どうやらこの超生物は大体の見当がついているらしい。惟臣にさえ分かかっていない穂波水雲という少女の本質を、その根幹にあるものを、抱えている何かを。

それでもなお動こうとしないのは、今がそのタイミングではないということか。察するにかなりデリケートな問題なのだろう。数多くの知識と技術を有する彼がこんなにも迷い、悩んでいるのだから。

「いずれにせよ、渚君同様にお前に任せていいんだな？ 彼女のことは」

「もちろん！ 彼女も私の大事な生徒です。担任教師として、しっかりと導いてみせますよ。……まあ、彼女の場合はそう易々とはいかないでしょうが。必ずや苦悩することに

なるでしょう。しかし、それでいい——」

——よい教師とは迷うものですから。

にやにやとしたいつもの笑みを浮かべつつ、彼は最後にそう締めくくったのであった。

「ところで烏間先生、さつき貴方が生徒たちと話していた今回の報酬の件ですが……」

「ん？ それがどうした？」

「お願いします……！ どうか、どうか私にもそのお恵みを……！ お願いします……」

「！」

「……はあ。色々と台なしだな」

## Part 5 鷹岡襲来 〵 沖縄離島リゾート

いよいよ物語も中盤なRTAはあじまあるよー！

前回、突如E組へとやってきたベコちゃん<sup>鷹岡</sup>を追い返すところで終わりました。今回はその続きからプレイしていきたいと思います。

前回の最後の方でも言っていました、次のイベントはシロとイトナ君によるプール爆破事件です。ラジコンと化した寺坂君がシロにいいように扱われるやつですね。

シロ「やれ」

寺坂「はい」

みたいな感じで。……ん、このニュアンスはちよつと違いますかね？

シロ「十万円はどうっすか？（ゲス顔）」

寺坂「いいねえ〜（したり顔）」

こっちの方がそれっぽいか。

何にせようまく乗せられたことに変わりはありません。寺坂君も中学生だからね、しようがないね。十万ドル、ポンとくれたならしゃーない。やっぱ金の力は偉大です。金は命より重い……！（中間管理職おじさん）

しかし、流石にシロのことを疑わなさ過ぎじゃないですかね……。まあ確かにあんな危険なことするなんて思いもしないでしょうけど……。

▽「おいタコ、そろそろ本気でぶっ殺してやるよ。放課後プールへ来い」

▽「てめーらも全員手伝え！俺がこいつを水の中へ叩き落としてやる！」

▽そう言うって彼は教室を出て行ってしまった……。

（行く訳）ないです。行ったら最後、シロの計画に巻き込まれて氏にかける羽目になります。……でも、皆ちゃんと彼に着いていくんですね。本当E組の子たちって優しい子ばっかで涙が出、出ますよ……。

ホモちゃんを向かわせるつもりはありませんが、かと言ってこのまま放置するつもりもありません。確かにこのまま放置してもカルマ君が機転を利かせることで生徒たちは見事窮地を脱します。

ですが、実はこのイベント、走者にとって非常にうま味あじのあるイベントなのです。

どういふことなのかは説明するより見て貰った方が早いと思うので、取り敢えず実際にプールが爆破されるまで待ちます。では倍速く（いつもの）

▽貴女はプールへと向かう彼らを見送る。……しかし、漠然とした不安を感じてならない。

▽見送ってからしばらく経った後、不意に貴女の耳に爆音のようなものが聞こえた。異変に気づいた貴女はすぐさま音がした方へと向かう。

爆発音……ニコニコ本社かな？

という訳で、現場の裏山のプールにホモちゃんもイキますよ……イキますよ……イクツ……ヌツ！（迫真）

道中でカルマ君とも合流し、プールがある場所へとたどり着くと——なんとということでしょう（劇的ビフォーアフター感）そこには匠寺坂君の手によつて、完全に破壊されてしまったプールのあわれな姿が。全部流れきつて何もかもがまつさらな状態に。

そして、そこにいたのは殺せんせーに助けられた数名の生徒たちと……騙されて実行犯にされた寺坂ア！ テメー！ 何してんだあ！

ま、いちいち糾弾する必要もないです。そこはカルマ君が平野店長並のガチピンタをくらわせることで彼を立ち直らせてくれますから。今はとにかく殺せんせーの元へ急ぎましょう。いざ鎌倉！（KBT）

▽貴女は急いで険しい岩場を駆けていく。ひゅんひゅんと、風を切るような音がする方へ。

▽そこでは殺せんせーと、かつて一度E組にやってきた少年——堀部イトナの姿があった。対峙している両者の間には張り詰めた空気が漂っている。

……ヨシ！ 間に合ったな（犬八）

二人の近くにはまだ三人ばかりの生徒が残っています。では早速、彼らを助けに——なんてことはしません。

確かにホモちゃんらの身体能力なら助けることも不可能ではないですが、そんなことよりもよっぽど優先すべきことがあります。……と、そうこうしている内に二人の闘いが始まってしまいました。

▽「さあ兄さん、どっちが強いか改めて決めよう」

▽その言葉を機に両者の鬭いが始まった。攻める堀部に対し、殺せんせーは防戦する一方。全身が水に濡れているうえ、鬭いの射程圏内にまだ生徒が残っている。あれではとても鬭いに集中できないだろう。

で、ここから一体何をするのかというと――

何やってんだお前ら、俺も仲間に入れてくれよう（マジキチスマイル）

▽タイミングを見計らって、貴女は高台から両者の間に飛び降りた！

▽「――!?」

▽「――にゆやッ！ えっ、ちよっ、穂波さん!？」

▽突如として割って入った貴女に驚いたのか、その場にいた全員が驚いている。

お前らばつか二人でいい思いしてんなよう（戦鬭狂）

という訳で、ホモちゃん参戦!!（スマブラ並感）

ここからはホモちゃんがイトナ君の相手をします。

勿論丸腰ではありません。ホモちゃんには既に例の改造済みの対先生ナイフを二本装備させています。

ちよつと待って！ ナイフが一本増えてるやん！

そうだよ（肯定） こちら前回園川さんに話しかけた時に、ついでに再び作って貰ったものになります。本当だったら前のパートで説明を入れなければならなかったのですが、抜けていたためここで補足させて頂きました。お前の動画ガバガバじゃねえかよ（自虐）

ともあれ、これでホモちゃんバイセクシュアルは両刀つかい！

まるで宮本武蔵みたいだあ……（直諭） ……ん？ 宮本武蔵はバイだった……？

▽「ハハハ、面白い。……その子を黙らせる、イトナ」

▽こくりと頷くと、彼は貴女に向かって触手による一撃を放った！

こうして男女両構刀わず食つかちまいう少女となったホモちゃんですが、まあ当然ながらイトナ君を倒すのは無理です。

鍛えているとはいえ、しよせんホモちゃんはTDN一般人に過ぎません。対するイトナ君は触チ手ト持使ち。ナイフが一本増えた程度で埋まる差など微々たるものです。こんな  
のねえほんと無理無理無理無理！（ひで）

ではなぜわざわざ彼に闘いを挑むのかと言うと、それは先程にも言ったように、この



闘いがRTA的に非常にうま味あじのあるイベントだからです。

もう既にお気づきの方もいると思いますが、つまりここでは彼を倒すことを目的としていません。

目的としているのはスキルポイントの入手です。

▽迫りくる触手を、貴女は紙一重でかわす！　そしてかわすと同時に、貴女は彼の触手の一部をナイフで切り取ることに成功した！

▽貴女は3のスキルポイントを得た！

ホモちゃんがもつ戦闘系のスキルと私の操作が合わされば、このようにイトナ君を倒すことは無理でもちよつとした回避と反撃くらいなら可能です。

走者の腕の見せ所さん!?　このゲームを周回しまくったのが伊達じゃないことをお見せしましょう。オラ、舐めてんじやねーぞ（超覚醒KMR）

稼ぎにくいスキルポイントを大量に稼ぐことができる絶好の機会、それがこのイベントという訳です。そのためRTA界限ではイトナ君はスキルポイントの神として崇め奉られています。ありがとうイトナ神……！

▽貴女は3のスキルポイントを得た！

▽貴女は3のスキルポイントを得た！

▽貴女は3のスキルポイントを得た！

▽貴女は3のスキルポイントを得た！

ああいい、ああいいいいいいいいよー。ホラホラホラホラ。ちよつと刃当たんですよ。

この闘い、時間が経過する程に被弾がキツくなってきましたがそこはモーマンタイ（死語）ヤバそうな攻撃は背後から殺せんせーが弾いてくれます。

生徒を傷つけまいとする教師の鑑。あのクソDＶ野郎とは大違いですね。殺せんせーありがとう！ フラーツシュ！（ガンギマリ）……ついでにちよつとばかり先生のも貰つときますか。

▽貴女は殺せんせーの触手の一部をナイフで切り取ることに成功した！

▽貴女は3のスキルポイントを得た！

▽「穂波さん！ それは私の触手です！」

あーごめん。間違えてなんか押しちゃった（kousei）

▽「……うーん、どうやらこちらの方が些か分が悪いらしい。丁寧に積み上げた戦術が台無しだ」

▽「帰るよ、イトナ」

ホモちゃんと殺せんせーでイトナ君を引きつけている間、逃げきれなかった三人は他の生徒たちが何とか救出してくれました。

いやー、本当良いこと尽くしですね！ スキルポイントは大量に手に入ったし、シロたちも追い返せし、皆からの好感度もこれでまた上昇したし、まさに一石三鳥！

入手したスキルポイントは『未来予測』に全部振つてと……はい。これで最大限強化できました。

でも、まだなんかちよつと余ってますね……。ああ、律ちゃんの時のガバか。まあ別に余分にあつて困るものでもないですし、取り敢えず残りはこのまま置いときます。

何にせよ必要なスキルの強化が終わったため、これでいちいち殺せんせーを暗札する必要もなくなりました。

後はE組の生徒たちと交流を深めるだけですな。

……そういえば、ホモちゃんの乱入のせいでカルマ君と寺坂君の見せ場が減ってしまっております。本来ならこの場面では頭脳プレイを見せるカルマ君や、触手の一撃を受け止めるという寺坂君のタフなシーンが――

「えっ」「なにっ」「しゃあっ」「な……なんだあつ」「う あ あ あ あ あ（PC書き文字）」

……タフという言葉は寺坂君のためにある。

まあ、彼らの見せ場はまだ他にもあるんでこんくらい別にいいでしょう。忌憚のない意見つてやつつス。

さて、次のイベントへと参りましょう！

次のイベントは……期末テストですね。生徒にやる気を出させるために、殺せんせーが『総合と五教科で一位を取れば、その分だけ触手を破壊する権利を与える』と言い出すやつです。その数、最大で六本！ ……まあ、このE組にはホモちゃんがいるんで最大数で確定なんです。

後、五英傑（おわらい）の馬鹿どもが調子に乗って賭けをしたせいで、A組はE組に沖縄旅行

を取られてしまいます。というか、そもそもE組にはホモちゃん（ry

……システムの都合上仕方ないとは言え、ちよつと滑稽で笑つちやうんすよね（肉体派おじやる丸）

それから余談ですがこのイベント、原作とは異なり副教科の順位はカウントされません。なので破壊できる触手が六本以上増えるということはございません。

ま、例えばどれだけ本数が増えようと、あの完全防御形態を何とかできない限りは無理です。いくら何でも手数が多スギイ！ 殺せんせーがすごいのかそれを可能にする反物質がすごいのか、これもう分かんねえな。

とにかくテストの結果が出るまで倍速します。おう、あくしろよ（ホモはせっかち）

……。

はい。無事に五教科と総合で一位を取れました。

そろそろ知力ステータスが200後半いきそうなホモちゃんに五英傑（笑）如きが勝てる筈ないんだよなあ……。また俺何かやっちゃいました？（クソ煽り）

▽「素晴らしい！ 皆さん、今回のテストでは思う存分に第二の刃を振るえたようで

すねえ。約束通り七本の触手を破壊する権利を差し上げましょう」

ありがとナス！ でもその権利は沖縄旅行の時に使うんで……ってあれ？ 七本？

六本じゃなくて？ 何で一本増えてるんですかね？

……。

ああ！ 中村さんが英語でホモちゃんと同率一位だから七本になるのか！ すっかり忘れてました！

こんな単純な計算も解説もまともにできないとかやべえよやべえよ……。RTA走者の姿か？ これが……。

け、結局本数は原作と同じでしたね……（震え声）

そして、えー、夏休みです！ それと次の暗札の舞台となる沖縄離島リゾートへ向けての特訓ですね！

▽殺せんせーの触手を七本破壊する権利、そして棚ヶ丘特別夏期講習沖縄リゾート二泊三日。努力の末にこの二つを見事獲得した貴女たちは、これらを次の暗殺へと活かすことに決めたのだった。

▽クラスのリーダーの磯貝が主に中心となって話し合いを進めていく。

▽「やっぱり水だよ。殺せんせーの弱点だし、うまく使いたいな」

▽「精神攻撃も結構いいかもよ？」

計画の方は原作とそう変わりありません。

要約すれば、水とB B弾による檻で身動きを封じ、それから千葉君と速水さんが遠距離からの狙撃で最後にとどめを刺すって感じ。……普通だな！（KYN）

これと言った穴もない計画だと思います。中学生が考えたには上出来でしょう。

▽「穂波さんにもお願いしていいかな？」

▽最後のとどめの射撃役として選ばれた千葉と速水、その二人に加えて貴女の名前もあがった。

▽Q. 引き受けますか？      A. はい／いいえ

お？      まさかの射撃役ですか。ナイフばつか使ってるんで忘れがちですが、一応ホモちゃんも遠距離もいけますからね。こんなの全然問題ないです。はい一択ですね。俺は、その言葉に、応える（マジメ君）

……というか、どうせ失敗することは分かり切ってるんで正直何でもいってのが本

音です。

ここからはただ訓練を繰り返すだけです。

頃し屋としての視点から助言するためにロヴロさんが来たりもしますが、まあ関係ないですね。しばらくクツソつまんねえ場面が続くので、またいつもみたく本番までガンガン飛ばしていききたいと――

……ん？　なんで等速に戻す必要があるんですか？

▽「俺が知る中で一番優れた殺し屋、か。確かにそれは存在する」

▽「この業界ではよくあることだが……彼の本名は誰も知らない。ただ一言のあだ名で呼ばれている――」

▽曰く、『死神』と。どこか遠くを見つめながら、しみじみとロヴロはそう呟いた。

……は？（困惑）　なんでこの子はロヴロさんと普通に喋ってるの？　ちよつと目を離した隙にいつの間に、しかもなんか割と仲よくなってるっぽい……。『話術』のスキルもちとは言えこんな怖そうなおじさんと会話できるとか、ホモちゃんは頭ハッピーセツトか？



……。

一番最初のパートでも言っていたことですが、前の律ちゃんの時もそうですけど、これって明らかに『好奇心旺盛』と『知識欲』の悪いところが出てますよね……。

▽「少女よ、君は殺し屋に興味はあるか？ もし興味があるのなら、友好の証として一つ必殺技を授けてやっても構わんぞ」

(別にいら)ないです。ロヴロさんが教えてくれる『猫だまし』は強化すれば『クラツプスタナー』という超ぶっ壊れ最強スキルに進化するんですが、その強化に必要なスキルポイントの量がめちゃくちゃ多いです。RTAにおいては実用的ではありません。

うーん、それにしてもここのとこ細やかなロスが微妙に続いているような……もしかして『好奇心旺盛』のスキルを組み込んだのは間違いでしたかね……。

……。

いや、これも誤差の範囲内です！ まだまだ全然余裕ですとも！ 俺のチャートは完璧なんだ……誰が何と言おうと完璧なんだ……。

という訳でガンガン進めていきます。

では沖縄リゾートでの暗札決行の時まで——え？ せつかくの旅行なのに水着スチルはないのか？ あるなら特に女子全員の水着が見たい？

見せる訳ねーだろバーカ！ 見たけりや今すぐこのゲームを買え！ 定価で5600円、語呂は殺せんせー！ 買ってプレイして、ついでにRTAも走れ！ この苦行を皆も味わうがいい！ 動画だけで満足するな！ これは命令だ！ いいな!? (ダイヤモンド)

……あ、そうだ(唐突) ホテルへ到着したら向こうで出される飲料を飲んではいけません。中にはホモコロリが入っています。自前の物を飲むようにしましょう。

▽とうとうその時がやってきた。全員で練りに練った計画を実行するその時が。今度こそ殺せんせーを殺すために、貴女たちはいつも以上に気合を入れる。

▽とどめの射撃役を任された貴女は、千葉や速水同様に水中での待機となる。

さて、いよいよ始まりましたが、とはいえ失敗すると既に分かっている以上は特に何もしくなくていいです。放置で構いません。今の内にトイレにいくなり間食するなり、リアルの方の時間を使いましょう。

こんだけの数の生徒が活動している訳だし、一人くらいサボってもバレへんか（ビジネスいなり男並感）

……（倍速中）

……はい、終わりました。えー今回の暗札は残念ながら、こういう完全防御形態で完封されるという悲しい結果で終わりですね。ふざけんな！（声だけ迫真）

しかし、イベントはまだ終わっていません。

この直後、E組はまたしても災難に巻き込まれてしまいます。こいつらいつも旅先で不幸な目に遭ってんな。

▽「穂波ちゃん……ちょろつと体支えてくんない？ なくんか怠くてさ……」

▽会話の途中、突如としてもたれかかってきた中村を貴女は受け止めた。……酷い熱だ。

▽いや、彼女だけではない。辺りを見渡せば、他にも何人もの生徒たちが同じように倒れている。

何なのだ、これは！ どうすればいいのだ?!

くそう！ くそう！（折部やすな）一体誰がこんな酷いことを……！

まあ、黒幕は鷹岡なんですからね。初見さん。

飲み物に一切口をつけていないホモちゃんはピンピンしてるので、これから他の動ける生徒たちと一緒にホテルへ治療薬を奪いに侵入します。

……とはいえ、イベントが連続するのは流石にキツイですね。こんなん続いたら辞めたくなりますよ。なんかRTAうー。ふわああああ疲れたもおおおん——

しかし、ご安心を！ このイベント、実はちよつとした工夫で大幅に省略することが可能です！

取り敢えずもう少しストーリーを進めます。

ホテルの3階の中広間、鳥間先生が寺坂君と吉田君をかばってガスに倒れるところで。フワちゃんの推理が炸裂するところでもありますね。

……かばう？ ま、まさか……（MRKM）

▽「寺坂君！ そいつ危ない！」

▽突如として辺りに響く声。誰が発したものが判断する前に貴女は動いていた。前を歩いている寺坂と吉田の首根を掴み、思いきり後ろへ引き倒す。

▽貴女の顔に何かが吹きつけられたのはそれと同時にだった。途端、意識が朦朧とする。……貴女は目の前が真っ暗になった。

うつ……！（昏睡） ばたんきゆく（ARL）

はい。多分皆さんが想像した通りです。

0.1mgでクジラとか動けなくする薬ではありませんが、一瞬でも吸えば象すら気絶させる麻酔ガスをホモちゃんに代わりに浴びさせます。こうすることで画面は暗転、次の瞬間にはホモちゃんが回復した状態、要は鷹岡関連の事件が大体終わった頃まで飛ばせるんですね。

Foo→ショートカット気持ちいい。

これで沖縄離島リゾートのイベントは大体終わりです。後は……肝試しとかビッチ

先生の誰得恋愛イベントとか、そういう小さいやつだけですね。

沖縄から戻った後は二学期が始まりますが、その間殺せんせーの賞金が三百億になったり、竹林君がA組に移ったりとまだまだ波乱は続きます——

今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## 「寺坂竜馬の悔恨」

シロの暗殺計画はほぼ完璧であった。

あらかじめ薬剤を散布することで粘液を出し尽くさせ、水を防ぐ手段を奪っておく。それからプールの堰を壊して生徒ごと放流。殺せんせーが彼らを助けざるを得ない状況をつくり、彼の触手にこれまた薬剤入りの水を吸収させることに成功した。

殺せんせーを確実に殺すための、徹底的な弱体化。

対して、糸成の方は大幅に性能が強化されている。

「さあ、兄さん。どっちが強いかわめて決めよう」

そう言つて糸成は触手を勢いよく振り下ろした。

前回よりもはるかにスピードとパワーが増したその一撃を殺せんせーは何とか受け止める。だが、そこからは防戦一方であった。彼がここまで押されている要因は通常より弱っていることもそうだが、触手の射程圏内にまだ三人の生徒が取り残されているこ

とも大きい。……無論、これもシロの計算通りである。

マスクの下、彼はにんまりと笑みを浮かべる。

数々の計算を積み重ねて練った計画だ。穴などある訳がない。もはや、やつの敗北は時間の問題だろう。

しかし、往々にして不測イレギュラーの事態とは起こるものなのだ。

「——とう！ 助っ人参上！」

たつた一匹の妖精が場を掻き乱す。

この日、シロはとある一人の生徒の存在を知覚した。

穂波水雲——その少女は、後に再び彼の計画を狂わせる大きな障害となる。

「助太刀いたす、殺せんせー。悪党どもに咲く徒花は血桜のみぞ。……なくんてね♪」

いやー、一回言ってみたかったんだよね！ こんな感じの格好いい決め台詞！

対峙する両者の間に突如として降り立った彼女は、そう声高らかに宣言したのだった。





その二人は久しぶりに僕らの前に現れた。

律と同じ転校生暗殺者であるイトナ君と、そしてそんな彼の保護者を務める白装束の人物——シロ。

前回の時にも様々な策を弄して殺せんせーを追い詰めた彼らだけど……今回はその比じゃない。実際、僕も含めて何人かの生徒は殺されかけた。シロは殺せんせーが僕らを助けると分かかっていて実行したみたいだけど……それでも危険な目に遭ったことに変わりはない。

とはいえ、その計画がよく練られていることも確かだ。

今、殺せんせーはかつてない程に追い詰められている。

あの闘いに普通の人間が介入することは不可能だろう。高速で繰り返される触手の応酬、その残像を目で追うのが精いっぱいだ。悔しい気持ちはあるけれど、僕らには傍観する以外の選択肢が——

「ん……かなりまずいことになってるね」

だから、この場に駆けつけてきた穂波さんがあの二人の間に一切の躊躇もなく飛び込んでいった時、僕らは彼女の正気を疑わざるを得なかったのだ。

いや、僕らだけじゃない。唐突な彼女の乱入は、闘いの真ただ中だった殺せんせー

とイトナ君、そしてシロをも驚かせた。……それも当然だ。こんな展開、果たして誰が予想できただろうか。

時折とんでもない行動を取ることがある彼女だけれど、今回は特にぶっ飛んでいる。多分何かしら考えがあつての行動だとは思うけど……。

「……これはこれは、随分とまあおてんばな子だね」

自ら鬨いの舞台に降り立ち、周囲に殺せんせーへの助勢を表明した穂波さん。そんな彼女にまず声をかけたのは、この暗殺計画の立案者であるシロだった。

愚かな生徒だ、とでも思つたのかも知れない。その声色には嘲笑の感情が少なからず含まれていた。

「助っ人、と言つたのかな？ 面白い冗談だね。君如き、イトナの触手の前では時間稼ぎにすらならないよ。怪我をしたくなければおとなしくそこを——」

「シロさん、でしたっけ？ 正直、殺せんせーをここまで追い詰めたのはすごいと思います。綿密に練られた計画、さぞたくさんのシミュレーションを重ねたことでしょう。その完成度の高さには感服しました。……クラスメイトの皆を危険にさらさなければ、の話ですが」

——私、こう見えても今結構頭にきてるんですよ。

顔は笑っていても目が笑っていない。

いつぞやの誘拐の事件の時よりも彼女が怒っているのは明白だった。

「やれやれ、仕方ない。……イトナ、その子を黙らせろ」

その場をどうとしない穂波さんに業を煮やしたのか、ついにシロはイトナ君に命令を下す。

「——よつと。渚君、今どんな状況？」

「……」

時を同じくして、カルマ君と寺坂君も駆けつけてきた。これでE組の生徒全員が揃ったことになる。

そんな中、彼女を攻撃するよう命令を受けたイトナ君は一本の触手をゆっくり動かすと、それを勢いよく横払いに放ったのだった。

恐らく加減されているとはいえ、それでも十分な速さと力を伴った攻撃である。この場の誰もが彼女があっけなく吹き飛ばされていく様を幻視した。

ところが、その触手による一撃は——

「——!?!」

空を切った。

状況を説明するのなら何ということはない、イトナ君の攻撃を穂波さんがかわしただけだ。……それだけならまだ驚きも少なかつたかも知れない。だが彼女の場合、それに

加えて反撃も同時に行っていたのだ。

まさか避けられるどころか逆に攻撃されるなんて思いもしていなかったのだろう。触手の一本を僅かに溶かされたイトナ君の表情は驚愕の色に染まっている。

地面と平行になるまで膝を曲げて後方に体を倒していた彼女は、その後腹筋を使いなからゆっくりと上体を起こすと目の前のイトナ君を見て鼻で笑った。お前なんか大したことない、とでも言わんばかりの態度である。

完全になめられている——彼女の得意げな様子に憤りを覚えたらしい彼は、続けて第二、第三と触手による攻撃を放った。連続で、そのうえ先程のものよりもさらに速さと力が増している。

しかし、当たらない。彼の攻撃は空振るばかり。

まるで未来でも見通しているかのように彼女は避ける、避ける、避ける。時折反撃も加えつつ、その妖精は水面で軽やかに舞い踊り続けた。

「あく、そういうこと……」

「カルマ君？」

「今の内に原さんたちを助けろ、つてことですよ。さつきこつちに向かって目配せしてたし」

闘いが再開してしばらく、カルマ君が何かに気づいた。

未だイトナ君の猛攻を対処し続けている穂波さんだが、どうやらそれだけではない。触手の射程圏内に入っている三人から引き離そうとさりげなく彼を誘導している。

シロは気づいているっばいけれど、頭に血が上っているイトナ君は気づいていない。これはチャンスだ。

触手もちの相手に恐れず立ち向かえる彼女がすごいのは当然として、彼女のアイコンタクトとその意図に気づいたカルマ君もさすがである。

「俺らもぼうつとしてる場合じゃねえわな」

「とりあえず、あの三人を何とかしないと……」

……そうだ、こうして傍観している場合じゃない。

蚊帳の外に置かれた僕らにもまだできることがある。

我に戻った僕たちは取り残された三人を助けるべく各々動き始めたのだった。



堀部糸成には己が強者だという自負があった。

実際、その認識は正しいものである。触手という強大な力を手に入れた彼に敵などなく、しかし唯一の懸念として同じ触手もちの殺せんせーがいるが、それもはや杞憂となった。シロの策略によって弱体化し水風船のように体を膨らませつつある姿は無様でしかない。

俺は勝つ。これで兄さんより強いことが証明される。

沸き上がるのは勝利への絶対的な確信、そしてさらなる力を得たいという飽くなき渴望のみ。

ゆえにその少女が自身の前に立ちふさがった時も、彼は別段何も思わなかったのだ。こんな女、赤子の手をねじるよりも簡単に鎮圧できる。

そもそも査定は既に終わっている。

初めてE組の教室を訪れた時分、この女からは特に何も感じられなかった。リーチはそれなりにあるが、その他で印象に残るものはない。強いて言うなら髪色くらいか。

これならまだあの赤髪の方が手強いだろう。

それでも単純な力比べならば間違いない系成に軍配が上がるが。

……いずれにせよ、こんなやつ俺の敵じゃない。

そう判断した彼は道端に転がる小石を蹴り飛ばすような感覚で触手の一本を振るって——あつさりと水雲にそれを回避されたのだった。今から数分前の出来事である。

(——なぜだっ！ なぜ当たらない!?)

それから今に至るまでに攻撃を続けているものの、未だ一度として彼女に直撃は与えられていない。それどころか逆にこちら側がダメージを負う始末で。回避すると同時に放たれるカウンター、これが厄介なことこの上ない。

かつて、この女からは霧<sup>オミ</sup>囲<sup>ラ</sup>気を感じなかった。

今もそうだ。相変わらずこの女からは何も感じない。

……いや、それこそ一番おかしいのではないか？

こうして闘っているというのに、なぜ相手からは敵意や害意が感じられない？ ……

不気味だ。あまりにも不気味過ぎる。得体が知れない。ただただ薄気味悪い。

(これはまずいな……)

一方でシロは糸成とはまた違った分析を行っていた。

あの生徒に関して、その驚異的な動体視力と反射神経にまずはどうしても目がいつてしまうが、そこばかりに気を取られてはならない。他にも注目すべき部分はある。

例えば、回避の仕方。先程から水面で舞い踊るかの如く糸成の攻撃を避けているが、あれはわざとだ。恐らくはあえて水しぶきを立てることで彼の触手に少しでも水を吸わせようとしている。でなければわざわざあんな非効率な避け方をする必要がない。

間合いにしてもそうだ。まずあの三人から引き離すことを目的とした距離の取り方で、その誘導のさりげなさと言えばシロですら気づくのに遅れた程である。

(完全にしてやられたよ。計画は台なしだ。まさかあんな生徒がいたとはね……)

触手の数を減らしたことも不利に働いている。

元々は対殺せんせーのためだが、防御より避けることを意識している彼女相手ではその効果も薄い。増幅した力も結局は当たらなければ意味がないのだから。

すつかり彼女の術中に陥っている系成。

もはやシロが声をかけたところでどうにもならない。

ところが、そんな彼に大きな好機が到来した。

今の今まで回避行動を取り続けていた水雲がついに足を滑らせたのだ。いや、むしろ足場の悪い中でよくここまでもったものだろう。

一瞬だけ動きを止めた彼女に、しめたと系成はその隙を逃すことなく仕掛ける。

「全く……貴女はいつも突飛な行動に出ますねえ」

しかし、その攻撃は別の触手によって防がれた。

存在を忘却していた訳ではないが、知らず知らずの内に頭の片隅へと追いやっていたのは事実で。

「危なかつた……。サンキューです、殺せんせー！」



「貴女にも色々と言いたいことはありますが、とりあえず今は彼をどうにかしなくては——」

「んじや、防御は任せました!」

「——あつ! むやみに突っ込むのは危険ですよ!」

あまり認めたくはないが、たった一人の少女にさえ手を焼かされている現状。

そこに、弱体化しているとはいえ自身と同じ触手もちの超生物が加わった。

「——にゅやツ! 穂波さん、それは私の触手です!」

「あれ? もしかして見間違えたのかな? ……ああ! 言われてみれば確かにそんな

気もしたような——」

「絶対わざとですよね!」

……沸々といらだちが募る。

一度とならず二度も負けるのか、俺は。力を手に入れたのは何のためなのか。勝つためじやなかったのか。勝って勝って勝ち続ける、そのために俺はこの力を——

「イトナ、そこまでだ」

シロの一言で彼はびたりと停止する。

糸成の触手がある程度のダメージを受けただけでなく人質にしていた生徒たちも救出されたとなれば、ここから逆転するのは些か厳しいものがある。

これ以上の続行は時間の無駄でしかない。そう判断しての撤退命令であった。

諦めて去っていく両者。シロはともかく、糸成の方はやや不服そうではあったが……。

とはいえ、あの二人は必ずまた現れることだろう。

殺せんせーを殺すために、次はもつと巧妙で強かな策を用意したうえで。

彼らがいなくなったことでようやく緊張が解けた。

大きく息を吐きながら、E組の生徒たちは互いの無事を喜び合う。プールから放流された時は焦ったが、最終的に何とかこうして助かることができた。

安堵感を得た全員が次に思ったのは二つ。

一つはもちろん、この騒動の解決の立役者となった水雲への感謝の気持ちで、そしてもう一つは。

——早く帰ってシャワー浴びてえ……。

もつともな願望であった。



『お前の目にはビジョンがない』

そう言つて糸成はこちらの顔を覗き込んできた。

自然と彼の瞳の奥が明らかになる。そこに渦巻いていたものを見て、竜馬は固まつた。

そこにあつたのは強い意思だ。あるいは信念とも言う。

つまるところそれは彼が心の底から正しいと信ずるものであり——今の竜馬がもつていないものでもある。

その目には見覚えがあつた。

いや、見覚えがあるどころか今でも毎日見ている。

穂波水雲——A組からE組に移ってきた生徒。

竜馬にとつては大嫌いなエリートであり、加えていつも何かと絡んでくるうざつたい存在である。……確か彼女もこのような目をしていたように思う。

これをビジョンと糸成は言つていた。いわゆる先見性の有無、強者なら誰もが備えているものなのだろう。

彼には、竜馬にはそれがない。その日その日をただ楽に暮らせればいいと、そう考えていた。

その結果がこの様である。

シロに都合のいいように扱われ、そしてクラスメイトを殺しかけた。無計画な愚者は操られる運命にある。そんな当たり前のことを今更ながらに理解したのだ。

「寺坂君」

不意に自身の名を呼ばれ、彼は顔を上げた。

そこに立っていたのは例の人物だ。今回大活躍を見せた彼女は相変わらず力強い目をしている。

だから、竜馬はこの少女が苦手なのだ。

このどこまでも先を見通しているかのような目、彼には決してまねできないもので。

しかし、彼女に自身の尻拭いをさせたことは事実。

その恩を無視できる程の常識知らずという訳でもない。

「……何だよ」

「今回の件、貸し一つね」

返済期限は無期限だから。にこやかに笑みを浮かべつつそれだけを告げると水雲は行ってしまった。

……先見性の有無どころか器の大きさまで違うとは。

少しは認識を改めてもいいのかも知れない。少なくともこちらを見下すばかりの本

校舎のやつらよりは断然ましな人物である。

あんな風には絶対になれねえだろうが、せめて操られる相手くらいは選べるようになりてえ——今日初めて竜馬はそうに思い立ったのだった。

## 「当人不在」

「さて、皆さん……いよいよ決戦の時が迫りつつありますー！」

朝のホームルームでの出席確認が終わった後、いきなり殺せんせーはそんなことを言い出した。

決戦——言葉の響きだけだとちよつと仰々しく聞こえるけど、言いたいことはまあ分かる。要は期末テストのことを言っているのだろう。一学期で学んだ数々の知識、それらがきちんと定着しているかどうかを確認するためのイベントである。

……昔なら少し憂鬱な気分になっていたかも知れない。

成績の悪い僕らにとつて、テストとは拷問のようなものだった。足りない試験時間に埋まらない解答欄、そのため点数はいつも酷いあり様で。自身が不出来だという現実と嫌でも向き合わなければならなかった。

でも、今は違う。僕たちは変わりつつある。

殺せんせーの分かり易い教えのおかげで固まった基礎、後はそれを本番に向けて発展させていくだけだ。今度こそ自信をもてる第二の刃を示すために。

ただ一つ心配なのは中間の時のような妨害だろうか。

僕らの知らぬ間に突如として行われた出題範囲の大幅な変更、もしまた同じことをさ  
れでもしたら……。

「皆の心配も分かるが、その点に関しては俺たちに任せて欲しい。生徒が勉強に集中できる環境をつくるのは教師の仕事だ」

だから、君たちは勉強に専念してくれ。

皆の不安を少しでも和らげるためか、至極真剣な面持ちで烏間先生はそう言った。相  
変わらずまっすぐな目をする人だ。その瞳からは彼の強い意思が感じられる。

こうも真摯な態度を取られた以上、僕たちは彼ら教師陣を信じるより他ないだろう。  
後は期末テストに向けての勉強にひたすら取り組むのみである。

エンドのE組と馬鹿にされ続けるのもうこりごりだ。

今度こそは、と奮起する僕ら。そして、次に殺せんせーが投下した爆弾発言は、そん  
な僕らのやる気をさらに引き出すものだった。

「前回は総合点で評価しましたが、今回は皆さんの最も得意な教科も評価に入れます。  
各教科ごとに学年一位をとった生徒には——答案の返却時、触手を一本破壊する権利を

あげましょう」

——!?

「先生、しつもん」

「なんでしよう？ 中村さん」

「それってさ、もし一位の人が二人いたらどうなの？ 貰える権利は一本のまま？」

「それとも二本？」

「いい質問ですねえ。もちろん、その場合は二本になります。先生、そこまでみみつちい

まねはしません」

「じゃあ、俺からも一つ。各教科ごとっていうのは主教科の五つのことでいいんでしょ

うか？」

「ええ。ですが、だからと言って副教科の方も手を抜いてはいけませんよ？」

……これはチャンスだ。生徒であると同時に暗殺者でもある僕らにとつて、とても大きな。

本当にこの先生は生徒を殺るやる気にさせるのがうまい。

おかげで教室中の空気がより一層引き締まった。非常にいい雰囲気だと言えるだろう。

しかしそれにしても、殺せんせーもまた随分と思いい切った提案をしたものだと思う。



何せ今この教室には——入学以来、その学年一位の称号をずっと獲得し続けている彼女がいるのだから。

「くああ〜……。……。え、何？ 何で皆また私のこと見てるの？ 何で？」

「あはは……。穂波さん、話はちゃんと聞いておこうね？」

とはいえ、僕らも負けていられない。中村さんの質問で分かったように、一位をとる生徒が複数いれば、その分破壊できる触手の本数も増えるのだ。そしてそれに伴って、殺せんせーの運動能力も低下していく。

地球の存亡のためにも、暗殺を成功させるためにも、この機会は絶対に逃してはならない。

こうして僕らはいずれ来たる決戦の時に向けての準備を始めたのである。

それが、どうしてこうなってしまったのか。

「——勝負といこうじゃないか！ “彼女の所有権”をもつにふさわしいクラスがどちらか決するため！」

……。本当にどうしてこうなってしまったんだろう。

びしっと突きつけられた人差し指を見て、僕たちはただただ溜め息をつくしかなかっ

た。



人並外れた頭脳に高いカリスマ性、そして実の父親から受け継いだ支配者としての遺伝子。彼、浅野学秀という生徒のことを知らない人間はこの学園には存在しない。生徒会長にして三年A組を統率するリーダーでもある彼は、まさしく櫛ヶ丘中学校の傑物である。

おおよそ欠点らしい欠点もない。強いて言うなら、その優秀さから非常にプライドが高く、自身以外の者を当たり前のように見下す癖があるという傲慢なところがそうかも知れないが、それを補ってあまりある程の超人的な資質が彼にはあったのだ。

そんな彼が唯一自身と対等な立場に立つことを許した人物こそ、あの妖精の異名をもつ少女である。

穂波水雲——金髪碧眼という日本では中々お目にかかれない容姿をした彼女は、その珍しさと美しさから入学当初の時点で周囲からの注目を集めていた。

そして、それだけではない。水雲がその名を馳せるに至ったもう一つの理由、それは……彼女がああ極めて優秀な学秀以上の頭脳をもつ人物だったからである。

入学して以来、校内の中間・期末テストでは全教科で満点。全校模試の方でも全て満点。さらに言えば、彼女は授業中に度々行われる小テストですら一点も落としたことがない。つまり、こと成績面において、水雲は学秀よりも上をいつているのであった。

無論彼とて満点を取ったことは何度もあるが、それでも一点や二点取りこぼすことの方が多し。学秀ですらなし得ないことを、彼女はずっと達成し続けている。

——この女は、自分と同格かも知れない。

紛う方なき天才である彼が、同じ天才である彼女に対して興味を抱かない筈がなかった。まさか自分と同レベルの人間がこんなにも身近にしようとは。ゆえに彼は、彼女が自身に對等な視線を向けることを許したのである。

水雲としても彼との交流を拒むことはなかった。元来、彼女は社交的で明るい人柄である。やけに積極的に絡んでくる彼に、彼女は快く応対した。

実際、彼らの相性はこの上なくよかった。

学秀の唯一の欠点である傲慢な部分は心優しい水雲がカバーし、逆に水雲に足りないリーダーシップは学秀の方がそれを遺憾なく發揮する。こうしてA組は二人の天才によつて率いられる運びとなつたのだ。

そして、いつしか二人は最上級にお似合いの組み合わせだともてはやされるようになっていったのである。

学秀にとっては間違いなくこの頃が黄金期であった。

互いに競い合える友人に加え、それなりに優秀な四人の仲間もでき、名声もさらに高まった。充実した毎日を送りながら、彼が目標とする実の父親への下剋上を虎視眈々と狙っていたのである。

もつとも、その黄金期も四月の一学期開始時点で終わりを迎えたのだが。

『穂波さんが……E組行き……?』

水雲がE組行きとなった知らせ、それは学秀に少なからず衝撃を与えた。当然納得などできる筈もない。あの彼女がまさか、何かの間違いではないかと理事長室にまで直談判しに行ったものの、結果が変わることはなかった。

彼女が消えたのはA組にとって多大な損失である。鳥が翼の片方を失ってしまったようなものだ。

しかしながら、彼の立ち直りは早かった。

E組の生徒には救済措置が用意されている。中間または期末の試験で学年五十位以内に入り、なおかつ元の担任がクラス復帰を許可するという内容だが、彼女の実力なら両方とも簡単に達成できる内容である。

懸念を抱く必要がどこにあるか。次の中間テストが終われば彼女は必ず戻ってくる。

今はもつと他のことに取り組むべきだ。そう思った彼が行ったのは、彼女がE組行きとなつて動揺するクラス連中を落ち着かせることと——言論統制であつた。

前者はともかくとして、後者の方は完全に彼の私情によるものである。

この学校のシステムではどんな生徒であろうとE組行きとなつた時点で差別の対象となる。それは水雲とて例外ではない。次の中間テストが終わるまでの短い間とはいえ、自らが認めた彼女がそこの有象無象によつて馬鹿にされるのは許し難かつたのだ。

ゆえに、現在校舎内で彼女を嘲笑する者は教師も含めて一人としていない。

こんなわがままが通るのもひとえに彼の影響力が凄まじいためであつた。

ところが、ここで誤算が発生した。

『クツ……！　なぜ彼女は戻つて来ないんだ……！』

条件を満たしているにも関わらず、待てども待てども彼女は一向に戻つて来る気配を見せない。もしや担任が許可しなかつたのかと思つたがそうでもないらしい。

だとするなら考えられるパターンは二つ。彼女自身がそれを望んでいないのか、あるいは彼女の周囲がそれを妨害しているのかのどちらかである。彼個人としてはE組に

よる妨害説を推したかった。何せやつらは大半がろくでなしの連中だ。彼らが彼女のよるなエリートを敵視して嫌がらせを行っている可能性は十分にあった。

なお、こうしている間にも言論統制は続いており、そのせいで学校中には段々とこんな噂が流れるようになってしまう。『かつては付き合っていた両者だが、やたら重い学秀に嫌気が差した水雲は彼と別れようとした。しかし彼にそれを拒絶され、彼女は彼から離れるために仕方なくE組に落ちた』というものである。本来ならすぐにも戻つて来られる筈の彼女が一向に戻つて来ないのも、この噂の信憑性を高めるのに一役買つていた。

そもそも二人が男女の関係だったという前提自体が間違っているのだが、噂とは得てしていい加減なもので。こうなったのも彼が彼女に肩入れし過ぎた結果である。

いつまで経つても彼女が戻つて来ないどころか別れた恋人と必死に縊りを戻したがっている男という不名誉な評判まで広まり、彼の鬱憤は溜まるばかりだった。

まあ、噂に関してはどうせいつか自然消滅するだろうからそこまで気にしてはいない。一番の問題はやはり彼女が戻つて来ないこと。これに尽きる。

『……図書室にE組の連中が?』

そんな時であった。何人かのE組の生徒たちが図書室で勉強していると聞きつけたのは。

……この機会は絶対に逃せない。彼らと直接話をするのが彼女を取り戻す近道となる。

四人の手勢を引き連れ、彼は図書室へと向かう。

その様子は、さながら魔王に囚われた姫を助けに向かう勇者のようで。

A組とE組——両クラスの戦いが今まさに幕を開こうとしていた。



「いい加減、君たちには彼女を返して貰いたい」

彼らは、突如として僕たちの前に現れた。

“五英傑”——その名の通り五人の天才たちによって構成されたグループで、校内でも有名な集団である。

そんな彼らがなぜ急に僕らの元へ押しかけてきたのだろうか？ 驚きで戸惑う僕らに  
対し、あちら側のリーダー格である浅野君は開口一番そう言ったのだった。

……はつきり言って意味が分からない。

というか、そもそも真面に会話するのもこれが初めてなのだ。それなのにいきなりそんな意味不明な言葉から入られても……。

「あー……浅野？　いきなり押しかけられてそんなこと言われても、俺らも何をどうしたらいいか分からないって言うか……。できればもつと具体的に——」

「とぼける気か？　磯貝君」

穏便な話し合いを望む磯貝君の声を彼はたちどころに切つて捨てた。

「君たちE組がいると聞いたから、こつちはわざわざ貴重な時間を割いてまでここへ来たんだ。……もう一度だけ言おうか。いい加減、君たちには彼女を返して貰いたい」

どうやら五英傑の筆頭はかなり機嫌が悪い様子。

これ以上彼の機嫌を損ねないためにも、ここから先は慎重に言葉を選んだ方がいいだろう。

しかしそれにしても、さつきから浅野君は一体誰のことを言っているのか。

彼と関わりのある人物、彼女ということは多分女子生徒なんだろうけど……。

(……あれ？　もしかして……)

よくよく考えてみれば、E組の生徒の中でその条件が当てはまるのはたった一人しかない。

「それって……穂波さんのこと？」



浅野君の動きが一瞬だけびたりと止まる。

「……。まさか、本当に分からなかったのかい？」

「えっと、まあ、その……うん」

「そうか……。実に見事な蒙昧っぷりだね。思わず尊敬の念を抱いてしまったよ、この僕が……」

意図せず彼の氣勢をそぐ結果となつてしまった。

まあ、何はともあれ彼が穂波さんのことを言っているのは分かった。かつてA組にいた彼女のことだ。きっと彼とも交流があつたのだろう。

けれども、まだ根本的な解決には至っていない。

「浅野君が穂波ちゃんのことを言つてるのは分かったけどさあ……じゃあその穂波ちゃんを返して欲しいっていうのは何なの？　そこがよく分からないんだけど」

参考書を枕にしていた中村さんが気怠げに言う。

僕たちは心の中で彼女の発言に同意した。彼女と全く同じことを疑問に思っていたのだ。

それを聞いていよいよ我慢の限界に達したのか、浅野君はその秀眉をつり上げると、ここが閑静な図書室であるにも関わらず声を荒らげるのだった。

「まだとぼける気か？　君たちの仕業だろう！　彼女がA組に戻つて来ないのは！」

……は？

今度はこちらが動きを止める番だった。

「いやいやいや、ちよつと待つて——」

「どんな弱みを握ったのか知らないが、随分となめたまねをしてくれるな……！ 何を企んでいる？ このまま彼女を捕らえ続けて、一体どうするつもりだ!?!」

「私たちがそんなことする訳ないでしょ!」

「そうですよ!」

「どうやら彼は、穂波さんがE組に留まつているのは僕たちのせいだと思つていらしい。」

……なるほど。確かに彼がそう考えるのも無理はない。

彼からしてみればE組とは落ちこぼれた生徒が集まるだけのクラスで、そのうえ勉強に集中できる環境でもない。どう考えてもそんなところに長居するメリットなどなく、ところがなぜか彼女は一向にA組に戻ろうとしないのだ。いつでもそこから抜け出せる実力はあるというのに。

これはさすがにおかしい。それなら原因は彼女自身ではなく彼女の周囲にあると考えるべきだ——大体こんな感じの流れだと思う。

残念ながら浅野君のその推測は外れだ。

彼には信じ難いかも知れないけど、彼女がE組に留まっているのは完全に彼女自身の意思によるものである。

とはいえ、そのことを説明するのも難しい。

少し前に彼女が言っていたことだ。

『ああー、私が元のクラスに戻るのかどうかって話か！ それなら戻る気はないよ。E組の皆とも、殺せんせーとも会えなくなっちゃうし』

彼女が未だE組に留まったままなのは、多分一番の要因として殺せんせーがいるから。好奇心旺盛な彼女にとって先生はドストライクな存在だ。実際まだまだ謎が多いし、僕もよくその談義で彼女と盛り上がっている。

とすると、このことは彼には話せない。話そうとすれば必然的に殺せんせーのことに ついても話さなければならなくなってしまう。それは禁則事項だ。逆に殺せんせーのことを抜きに話そうものなら、内容が曖昧過ぎて絶対に彼は納得しないだろう。

——この状況、一体どうすれば……。

完全に手詰まりになってしまった僕たちは沈黙するしかなかった。……せめてこの場に穂波さん本人がいればまだどうにかなったものを。よりにもよって彼女が不在の時に来るなんて。

そんな時である。彼がとある提案をしてきたのは。

「そういうえば、確か君たちはテストで上位を狙っていると聞いたがそれは本当なのかな？ ……よし、それならこうしよう。次の期末テスト、A組対E組で勝負といこうじゃないか！ “彼女の所有権”をもつにふさわしいクラスがどちらか決するため！」

僕たちにびしっと人差し指を突きつけながら、浅野君は高らかにそう言ったのだ。

「……………どうする？」

「どうするも何も……………受けるしかない？」

「こつちが何言つても納得しないだろうし……………」

「というかこの勝負、あちら側にも私たち側にもメリットがないんですけど……………」

「やっぱりそうだよね。……………気づいてないのかな？」

彼が提案してきたこの勝負、元々穂波さんがいる僕らは勝つても意味がないし、向こうが勝つたとしても結局戻るかどうかは本人の意思であるためやはり意味がない。

こんな無意味な勝負、本来ならわざわざ受ける必要もないのだけれど……………彼の態度を見るに断つたらもつと面倒なことになりそうな気がするのだ。

正直、さつさと話を終わらせて勉強に戻りたいというのが僕らの本音だった。

クーラーが効いたこの快適な空間は旧校舎では決して味わえないものだ。せつかく磯貝君が予約してくれていたのだから心ゆくまで堪能したい。

それに学年一位を目指している以上、彼らとの対決は避けようのないものである。殺せんせーを暗殺するためにも最終的に僕は勝たなければならぬ。訳で。

「まあ、いいよ別に」

「言つとくけど、今回俺たちは結構本気だからな？」

「……言質は取った。証人は必要ないか。僕たち以外にもこれだけの生徒がいる訳だからね。この際ついでにルールの制定もしておこう」

どこからかノートパソコンを取り出した彼は素早いキー操作であつという間に契約書を完成させる。

その概略は以下の通りだ。

- ・ 勝敗は次の期末テストの成績によって決まる
- ・ 基本的には『国・英・数・社・理』の各五教科とそれらの総合点のみを対象とする
- ・ 万が一引き分けた場合は副教科も対象とする
- ・ 副教科を含めてもなお決着がつかなかった場合、クラス内の上位者人数によって優劣をつける

・ 勝利したクラスには「穂波水雲の所有権」と「敗北したクラスへの命令権一つ」が与えられる（穂波水雲個人は賞品としてみなされる。そのため彼女の成績はこの勝

負において一切の効力を有しない)

……勝敗のつけ方に文句はない。引き分けになった時の場合までしつかりと詳細に書かれている。

ただ、最後の部分だけが少し気になった。

「……ん？ 負けたクラスへの命令権？」

「何これ？」

「浅野、これは一体どういう……」

唐突にそんなものをつけ足した意図が分からず困惑する僕らに対し、浅野君は薄ら笑いを浮かべながら答えた。

「そんなに驚くことかい？ 君たちが言ったことじゃないか、彼女自身がE組に留まることを望んでいると。もしそれが事実ならそもそも勝負が成立しない。命令権はそうはならないようにするための保険さ」

さらに彼は重ねて言う。

「ああ、それとちなみに。僕らが勝った場合、君たちにはこんな命令をするつもりだ——『どんな手を使ってでも必ず穂波さんをクラスから追い出せ』とね」



契約書のコピーは後日届けるよ——最後にそれだけを言い残して五英傑は去っていった。

後に残された渚たちはもはや勉強どころではなく。

成り行きでとんでもない契約を結んでしまった。いや、契約自体に問題はない。問題は、この勝負に水雲の所在がかかっているという点である。

まさか彼があんなにも彼女に執着しているとは。

他の生徒にも見られていた以上、今更全てなかったことにはできない。

「あー、もう！ 何なのあのキザで傲慢ちきなストーカー野郎！ めっちゃムカつく！」

「とりあえず、A組と勝負することになったのはまた今度クラスの皆にも伝えるとして

……問題は穂波さんか」

「何て言えばいいんだろう……」

「……少なくともいい気分にはならないと思う。自分の知らないところでそんな勝手な扱いを受けてたなんて、後から聞いたら僕だって嫌になるし」

「でも、隠し通すのもしんどいよね〜……」

「穂波さんには所有権云々に関するところだけを伏せておいて、先生と皆さんには全てをお伝えしておくというのはどうでしょうか？」

「それが無難かな……」

「どんよりとした空気が漂う中、それを振り払うかのように明るい声を上げたのは有希子だった。

「色々あったけど、私たちの目標は変わってないよね。次のテストでは皆で学年一位を目指す……そうでしょ？」

確かに彼女の言う通りだ。テストで学年一位を取るというE組の指針は当初よりぶれていない。

「殺せんせー暗殺のためだったのが、今回新しくそこに水雲をA組の魔の手から守るためという理由が加わった……それだけのことである。」

「そうだよな。もつと単純に考えればいいか」

「ま、英語なら任せてよ。百点くらい楽勝楽勝、That's a piece of cake! つてね」

「私も頑張ります! 理科なら自信があるので!」

「う〜……あんなやつには絶対に穂波さんは渡さん……。よし、私も頑張る」



決戦を前に一致団結する渚たち。

同時刻、彼らの方でも話し合いが行われていた。

学秀を中心に、この勝負の目的を改めて確認していく。

「実に鮮やかな手際だったよ、浅野君。勉強になった」

「でもさ……この勝負、負けた時のリスクが大き過ぎやしないかい？ 一回きりとはい

え何でも命令できるってのはさすがに……」

「百パーセント確実に彼女を取り戻すための必要経費さ。この程度のリスク、元より承知の上だよ」

今回、彼にとって一番悩ましかったのがE組の連中と彼女との関係性である。彼女がE組に留まるのは彼女自身が原因なのか、それとも彼女の周囲が原因なのか。こればかりは彼の視点では分からないものだった。

ゆえに命令権などというとんでもないものを賭ける必要があったのだ。リターンを得るためにはそれ相応のリスクを冒さなければならなかった……それだけのことである。無論E組への嫌がらせも兼ねているが。

「まあ、要は勝てばいいだけの話。彼らにはぜひ教授して差し上げようじゃないか！

この名門櫛ヶ丘中の太陽である僕らの真の実力というものを！ ……理事長からもう直々に言われてることだしね」

「ギシシシシ！ 俺たちが負ける訳ないな！」

「あんな雑魚ども蹴散らしてやる。……そうか、いよいよ彼女が戻って来るのか」

彼以外の四人も水雲が戻って来ることを望んでいた。

あの学秀を唯一的確にサポートできる他、生徒たちの頂点に個としても君臨する人物である。彼らにとっては学秀同様憧れの存在であった。

この二人が揃う限り、我々に敵はいない。そう確信した黄金の日々が今では懐かしい。

それに彼女に対しては各々恩義があつた。

例えば冴えないガリ勉に過ぎなかつた夏彦が五英傑まで上り詰めたのは彼女に声をかけられたことがきっかけで、また智也は自身が得意とする英語の発音に関して過去に彼女から助言を受けたことがある。このようにそれぞれが彼女との親交を機に大きな糧を得ているのだ。

「まずはそうだな……会議室を貸しきってクラス全員強制参加の勉強会でも開こうか」

決戦を前に余裕綽々の学秀たち。

A組とE組、果たして軍配が上がるのはどちらなのか。その結末はまだ誰にも分からない。



「——で、結果この様と。まあ、一応言い訳くらいは聞いておこうか。何か弁明は？ 浅

野君」

「……」

「私が耳にした話では、とある女子生徒を奪還するために君自ら率先してE組に勝負を仕掛けたとか……これは事実なのかな？ だとしたら驚きだよ。いつの間に君は学生から勇者へ転ジョブチェンジ職したんだい？ 囚われた姫を助けに魔王城へと乗り込んだ勇者浅野君は、しかし残念なことに練度レベルが足りず逆にこてんぱんにされてしまったという訳だ」

「……」

「実に恥ずかしいね。下らないごっこ遊びに現を抜かしているから足を掬われるんだ。取るに足らないと思っていた連中に君は負けたんだよ——今どんな気持ちなんだい？

私にもぜひ教授して差し上げてくれないかな？ 別れた恋人と必死に縊りを戻したがつているらしい浅野君？」

「……っ、っ、っ！」

(クソツ、E組め……！ この屈辱はいつか必ず倍にして返してやる……！)

## 「準備期間」

「穂波ちゃん！」

「中村さん！」

イエーイとハイタッチをする二人。

その光景を温かい目で見守る殺せんせー。

現在、E組の教室は歓喜に包まれていた。

今回のテストで事前に言っていた通り英語で満点を取った中村さんと、またいつものように全教科で満点を取った穂波さん。彼女たちの活躍で僕らは殺せんせーの七本目の触手を破壊できる権利を得たのだ。

そして、それだけではなく。色々あつてA組と勝負する羽目になった僕らだけど、その彼らに対しても無事勝利を収めることができたのである。

僕らがA組に勝つことができたのは意外にも寺坂君たちのおかげだった。実は主教

科である五つとそれらの総合点を競い合った段階ではまだ三対三と引き分けの状態、勝負はそこから規定通り副教科へともつれこんだのだ。

副教科のテストは比較的重要度が低いためか教科担任の好みでかなり自由に出題される傾向にある。だから高得点を取るのはかなり難しかったりする。

けれども、彼ら四人はそこで非常に高い成績を残した。家庭科に至っては何と全員が満点である。

「……あん？ 何だよ渚？」

「いや、ちよつと意外だったなつて。まさか寺坂君がそんなにやる気を出すなんて思わなかったからさ」

「……はっ！ 言つとくけどな、俺はただあいつに借りを返したかっただけだ！ いつでもでも貸しつけられたままなのは気分わりいからな！」

「相変わらず素直じゃないなあ……」

「男のツンデレとか誰得だよ」

「おい誰だ今俺のことツンデレつつったの！ 喧嘩売つてんのか！」

この結果はクラス全員の頑張りによって得たもの。

まさにE組の集大成と言っても過言ではない。

……でも、ここで終わりじゃない。むしろここからがいよいよ本番だ。

「先生、クラスの皆でも話し合っただんですが……この暗殺に今回の勝負で得た〃戦利品〃を使いたいと思います」

相手のクラスに何でも一つ命令できる権利を行使してA組から分捕った〃柵ヶ丘中学校特別夏期講習の参加権〃——二泊三日の沖繩離島リゾート。

京都への修学旅行以来、場所を移しての大規模な暗殺計画がまたしても実行されようとしていた。

「そういえば渚、A組との勝負で勝手に賭けにされてた件のこと、穂波さんにちゃんと言っただけ？」

「……まだ言っていない」

「だよね……。あいつら、本当余計なことしてくれたわ！」

「でも、そのおかげで沖繩に行けることになった訳だし……。そう考えるとなんか複雑かな……」

「まあ、それはそうだけどさ……。とにかく、どこかでいい感じのタイミングを見つけなさい。それから皆で言いに行こっか」

「うん。磯貝君たちにも伝えておくよ」



その男がE組を訪れるのは二度目だった。

彼の名前はロヴロ。かつては腕スキの暗殺者として名を知らしめ、そして引退した現在では後進の暗殺者を育てる傍らその斡旋で財を成している人物である。

そんな彼が再びここへやって来たのは今回彼らが練った作戦にプロとして助言を授けるためだ。

(ふむ……。これといって言うべきこともないな)

暗殺計画の概要を聞いた彼はそのように判断した。

人生の大半を暗殺に費やした彼からしても今回の計画は中々に練られたものであった。加えて彼らをもつ技術にも目を見張るものがある。これなら合格点を与えても構わないだろう、そう思ってもいい程に彼らからは十分な可能性が感じられたのだ。

数ある生徒たちの中でも特に印象に残った者が二人。

一人は潮田渚という一見おとなしそうに見えるがその実暗殺者としての才能を秘め



た少年で、それからもう一人の方は——彼の前に大きな紙袋を持って現れた。

『ロヴロさん……いえ、ロヴロ大先生！　いつもお世話になってます！　こちらささやかなものですがどうぞお受け取り下さい！』

そう言つてロヴロにその大きな紙袋を差し出した少女、彼女は自らを穂波水雲と名乗つた。

『……これは？』

『水ようかんです。このままでもおいしいんですけど、冷やすともっとおいしくなりますよ』

『いや、そういう意味ではなく……なぜ俺に？　俺と君に接点はなかったと思うが……』  
こうしてE組を訪れたのはあくまでも仕事のためだ。

その報酬も既に日本政府から受け取っている。

疑問に思う彼に水雲は語り出した。曰く、普段からよくイリーナに主にハニートラップ関連のことで世話になっていると。彼女の師はロヴロであり、つまりそれはロヴロにも世話になっていることと同義だと。

ゆえに本日は菓子折りを持参したそうだ。言わばこれは彼女の善意によるお礼であつた。

『イエラヴィツチお姉様先生にはいつもお世話になっていきますし、だからロヴロ大先生

にもー!』

『……そうか。まあ、君がそこまで言うなら受け取らないのは逆に失礼か。ありがたく頂いておくとしよう』

(というより、あの馬鹿弟子は一体何を考えている! まさか教え子にこんな呼び方をさせていようとは……調子に乗り過ぎだ! ……また一から叩き直さねばならんか)

……色々と思うことはあるがそれはさておき。

改めてロヴロは彼女を見た。

まず目につくのはその美しい容姿。太陽光に反射して輝く金色の髪、整った目鼻立ち、肉感と細さの両方を成立させた体型……右目の下にある泣き黒子も魅力的だ。

なるほど、イリーナが目をかける訳である。これ程までに美しければさぞ仕込み甲斐もあることだろう。少し色気が不足しているとところだけが残念だが、そればかりは年齢的にも仕方のない話だ。恐らく後三年もすればイリーナにも匹敵する美女へと完成するに違いない。

それから内面においても。

驚くべきことに、彼女はとてつもない才能をその身に宿していたのだ——暗殺者の才能である。……それもあの少年を上回る程に破格のものを。

職業柄様々な人物を見てきたロヴロだが、ここまで突き抜けた才覚をもつ者に出会う

のは初めてだった。渚の時も驚嘆したが、彼女の場合はそれ以上の衝撃であった。

『後それと、実はベテランの殺し屋である貴方に少しだけお聞きしたいことがあって——』

そしてさらに、殺し屋自体にも興味があるのか彼女は彼にこのような質問をしてきたのだ。

『貴方が知る中で一番優れた殺し屋とはどのような人物なのでしょうか?』

『……一番優れた殺し屋、か。この業界ではよくあることだが、その者の本名は誰も知らない。ただ一言のあだ名で呼ばれている——“死神”と』

『……死神、ですか?』

『神出鬼没にして冷酷無比。夥しい数の屍を積み上げ、死そのものと呼ばれるに至った者。君たちがこのまま標的を殺しあぐねているのなら、やつは必ず姿を現すだろう』

『必ず姿を現すんですね。……もしその死神さんがE組に来たらどんな手を使うと思います? その方法によっては私たちにも被害があったりするんですかね?』

『どうだろうな……。そればかりは何とも言えん』

そのまま話の流れで彼女にも渚と同じように必殺技の伝授を提案してみたものの、ただでさえ忙しそうな貴方からこれ以上貴重な時間を奪ってしまうのは恐れ多いと丁重に断られてしまった。

色々と教えて頂いてありがとうございました——ぺこりと頭を下げて去っていく水雲の後ろ姿を眺めつつ、ロヴロは心の中で葛藤する。

このまま行かせてしまったていいのか？ 彼女を暗殺者として教育すれば間違いなく大成するだろう。ともすれば、あの死神にも並ぶかも知れない。この機会を逃すのはあまりにも惜しい、そう思えてしまう程の逸材である。まさにダイヤの原石なのだ。

せめて一言だけでも声をかけておこうかと彼はその背中に手を伸ばして——

『……』

やがて静かに下ろした。

彼が彼女の勧誘を諦めたのは直感によるものだった。

確かにあの少女にはとてつもない才能が宿っている。しかし、同時に彼女には暗殺者にとつて必要不可欠な何か欠けているような気もしたのだ。

その何かはどういったものなのかは分からない。それを見定めるには彼女との関係性をもっと深める必要がある。

……それに、一番優れた殺し屋について尋ねてきたのも恐らく殺し屋に興味があつてのことではない。彼女からは何か別の目的があるように感じられた。

(全く……世界とは広いものだな……)

何となしに彼は空を見上げる。そこには青々とした空間がどこまでも広がっていた。

殺し屋屋ロヴロが注目した二人の少年少女——潮田渚と穂波水雲。

この二人は、後にその彼からも認められた才能を活かして様々な活躍を見せることになる。



「ね、穂波。ちよつと言いたいことがあるんだけど……」

「何ですか？ イエラヴィツチお姉様先生」

「それよそれ！ その呼び方！ 私たち、もうそこそこの付き合いになるでしょ？ だからね、ちよつと踏み込んだ呼び方に変えてみない？ 何なら気軽にファーストネームで呼んでくれてもいいのよ？」

「え？ でも、先生って確か最初に会った時にそう呼ばれるのは嫌って言ってたような……」

「そんな前のことももう気にしなくていいわ。私がいいって言うてるんだからいいのよ」  
「分かりました。じゃあ、先生のごことは次から『イリーナ先生』って呼びますね！ ……」

それにしてもえらく急じゃありません？ 何かあったんですか？」

「え……べ、別に何も無いわよ！ ほら、日本のことわざでも言うじゃない！ 思い立つたが吉日せんせいって！」

（師匠せんせいにどやされたからなんて恥はずかしくて口が裂けても言えないわ……）

## 「急転する事態」

滞りなく着々と進行する暗殺計画。

現在、その準備の一環としてE組の生徒たちの何人かが訪れていたのが殺せんせーの食事場所となる船上レストランである。その中でも水雲とカエデの二人は主にテーブル周りの装飾を担当としていた。

「……よし、できた。こんな感じでどうかな？」

「おお、すつごく綺麗だよ！」

ごとりと机の上に置かれた花瓶、そこに生けられている花々を見てカエデは思わず感嘆の声を上げる。

紫や緑、橙に黄。様々な色彩を巧みに組み合わせで作られたそれはきつと見る者全員に癒しを与えることだろう。実に見事なものだ。水雲がもつフラワーアレンジメントの技術、そのレベルの高さには彼女も舌を巻かざるを得なかったのである。

……改めて思う。この友人はあまりにも万能だと。

勉強や運動のみならず、メイクや料理、さらには生け花まで。私服のセンスも中々に悪くなかった。恐らくはまだ周囲に見せていない技術もたくさんあるに違いない。

なるほど、道理であの男がやたらと執着する訳だ。今ならその気持ちも少し分かる。かと言って、彼がしでかそうとした所行についてを許すつもりは一切ないが。

「これで一応私たちの仕事は終わりだね」

「……そうだねー」

「ん？ どうしたの茅野さん？ なんか元気がないみたいだけど、もしかして船酔いした？」

「いや、まあ、少し思い出しちゃったと言いますか……。この間の期末テストの時、穂波さんには本当申し訳ないことをしたなと……」

「え、まだ気にしてくれてたの!? そんなのもういいのに……。皆私のことを思って黙っててくれたんでしょ？ 謝る必要なんか無いって！」

「でも、もしあの時負けてたらと思うとき……」

「たればの話にしても仕方ないよ。結局は全部丸く収まって解決したんだから。ね？」

そう言ってカエデの手を取った水雲はそのままにぎにぎと揉み始める。その感触が



ちよつとくすぐつたくて、彼女はつい笑みをこぼしてしまった。

ちよつどその時であった。

生徒の内の誰かが雰囲気づくりのためにかけたのか、突如として会場内に音楽が流れ出したのである。

「この曲は……」

カエデには聞き覚えがあった。いや、彼女どころか会場内にいるほとんどの人間がこの曲を知っていた。

アヤ・エイジア。かつては神秘の歌姫とも謳われていた日本出身の歌手。彼女が歌う歌は全てが日本語であるにも関わらず世界中に広まり、発売されたアルバム三枚の総売り上げは三億枚を超えた。他にも『彼女の歌を直接耳にした者は感動のあまりその場で意識を失ってしまう』などといった信じ難い話もあったりする。

そんな世界的にも非常に有名だった人物の歌である。ゆえにその曲が流れ出した途端、誰もが一瞬びたりと動きを止めてしまったのだ。

「アヤの歌だね」

「アヤ？ ……ああ、これがそうなんだ」

そしてそれは二人も例外ではなかった。

仲よく揃って天井を見上げ、じつと音楽に聞き入る。

「穂波さんのその反応、ひよつとして聞くのは初めてだったりする？」

「ううん、聞いたことはあるよ。ただ、こうやって落ち着きながらちゃんと聞くのは初めてかな……」

「私もちゃんと聞くのは久しぶりかも。少し前までは耳にする機会も多かったけど、今はね……」

それは心地よい時間だった。アヤの美しい歌声が美しいメロディーとともに辺りに響き渡る。

しばらくして、ふと水雲はあることに気づいた。

「……あ。茅野さん、目から涙が出てるよ」

「え……嘘、本当に？」

指摘を受けたカエデは慌てて目を袖で拭う。

すると、そこは確かに濡れていた。自分でも知らず知らずの内に涙を流していたのだろうか。

その事実には驚くと同時に、今度は彼女の方があることに気づいた——水雲の目からも一筋の涙が流れている。

彼女もまた不思議そうに首を傾げながら目を拭った。

単に音楽を聞いていただけなのになぜ突然涙が流れ出たのか、彼女にもその理由がよ

く分からなかったのだ。

「私、何で泣いちゃったんだろう……。目にゴミでも入ったのかな？」

「うーん、私も前に聞いた時はこんなことなかったと思うんだけど……。まあ、それだけアヤの歌が感動的だったってことでいいんじゃない？　というかそれ以外で思い当たる節がない訳だし……」

「……それもそっか。いい曲だったもんね！」

やがてアヤの曲が静かに終わりを迎える。

次に流れ始めたのは聞く者のテンションを上げんとするアップテンポの曲であった。がらりと変わった会場内の雰囲気、それに合わせるように二人も気分を一新する。

本番の時はゆっくりと、しかし着実に迫りつつある。

今回の作戦はかなり綿密に練られたものである。そこにはこれまで以上に皆の殺る気が込められており、何としても成功させたいという強い意思があった。

「じゃあ、そろそろ行くね」

「殺せんせーの最後のとどめ役か……。すごい大役だとは思うけど、穂波さんならきつと大丈夫！　がんばってね」

「もち！　そつちも怪我には気をつけてよ？」

その言葉を最後に両者は別れた。

全ては地球の存続のため、E組の少年少女たちは全力でこの暗殺任務を遂行する。



僕たちの暗殺は結論から言えば失敗した。

殺せんせーの周囲を水でドーム状に覆った後、そこからさらに弾幕を張ることで完全に身動きを封じ、そして最後は水中に潜んでいた三人のスナイパーによる三方向からの同時射撃でとどめを刺す。これが僕らの作戦だったけど、実は先生にはまだとんでもない技があったのだ。

その名も——“完全防御形態”。

この状態になった殺せんせーは、何と対先生物質すらもはね返してしまらしい。

代償として二十四時間一切動けなくなってしまうというデメリットが存在するけれど、そのことを差し引いても十分過ぎる程に強力な技である。

……正直、かなりショックだった。

今回の作戦は今まで以上に皆の時間と労力をかけたものだったのに、結果それが通用

しなかったからだ。すっかり意気消沈してしまった僕たちの耳には残念ながらも  
の殺せんせーの褒め言葉も届かない。

「まさかまだあんな奥の手があるなんてね……」

「本当、易々と殺させてくんねえよな」

ホテルに戻った後も重苦しい雰囲気は続いていた。

まだ気持ちの切り替えができていないのか、誰も彼もが疲れた様子を見せている。  
するとその時、事件は起こった。

何人かの生徒が急にばたばたと倒れ出したのだ！

『やあ、先生。かわいいい生徒たちが随分と苦しそうにしているじゃないか』

そして、鳥間先生の携帯にかかってきた電話。

相手の正体は分からない。ただその人物が言うに倒れた生徒には人工的に作られた  
とあるウイルスが感染しているらしい。それは全身の細胞を徐々に破壊していき、最後  
は死に至らしめるといふ非常に危険なもの。

電話の主はその治療薬と引き換えに、完全防御形態となつて動けなくなつた殺せん  
せーを山頂にある『普久間殿上ホテル』の最上階まで持つて来るよう命じてきた。

交渉に応じるべきか、それとも応じないべきか。

もしこのウイルスが本当に人工的に作られたものなら、対応できる抗ウイルス薬はど

んな大病院にも置いていないということ。皆の命は助からないだろう。

……でも、だからと言ってこのまま命令に従うのも腑に落ちない。相手は平気で人の命を脅かす人間、そんな人物が言うことをなせわざわざ聞かなければならないのか。

「二ついい方法がありますよ」

どうすればいいか悩む僕たちに道を示したのはやっぱり殺せんせーだった。

先生が言う方法とは実にシンプルなものだ。こちらから敵の本拠地に乗り込んで治療薬を奪う、それだけである。単純ながらも成功すれば問題の全てが解決するのだから、確かにこれを狙わない手はないだろう。

こうして僕らは烏間先生の指揮の下、標的から治療薬を奪い取るために行動を起こした。

「何だよ、結構楽勝じゃねーか」

「さっさと終わらせて帰ろうぜ」

順調な道のりだった。侵入の際の険しい崖登りも日々の訓練を思えばそれ程苦ではなく、難所だと思われたロビーでもピッチ先生のおかげで無事にやり過ごせた。

戦闘に関してなら烏間先生もいることだし、これなら早々に目的を達成できそうである。皆の士気はこの上なく高かった。

だからこそ、既に現れていた敵に気づけなかった。

ありていに言えばこの時の僕らは浮かれていたのだ。

「寺坂君！ そいつ危ない！」

鳥間先生を抜いてずんずんと先を進む寺坂君と吉田君。二人の背中に向かつて不破さんがそう叫んだのと、誰かが瞬時に彼らの背後に迫ったのはほぼ同時だった。その黒い影は二人のえり首を掴んで後ろに引き倒した後、直後に霧のようなものを全身に浴びて倒れる。それを発射したと思われるのは付近にいた帽子を被っている男で、その男はただちに鳥間先生の一撃によつて昏倒させられた。

……本当に一瞬の出来事であつた。

ほんの数秒にも満たない内に、今の短くも激しい攻防が行われたのだ。

「いって……」

「な、何だ……？」

ようやく我に返つた僕たちが確認したのは、首を押さえて床に座り込む寺坂君たちの姿と——弱々しい息づかいで床に横たわる穂波さんの姿だった。



「ねえ、寺坂君。本当にここに残ってよかったの？」

膝の上にある水雲の頭をそつと優しく撫でながら優月はそう竜馬に問いかけた。今現在、この中広間には彼女たち三人と烏間先生に昏倒させられた男しかいない。他のメンバーは既に先へと進んでしまった。

優月がこの場に残ったのは水雲のためである。麻酔のガスらしきものを吸って意識を失った彼女をこれ以上連れて行くことはできず、かと言ってこのまま一人放置して行く訳にもいかない。ゆえに居残り役を買って出たのだ。

一方で、竜馬が残ったのは二人のボディガード兼この毒物使いの男の見張りのため。ここが敵の本拠地である以上、また先程のように戦闘が必要な状況に陥ってしまうという可能性は否定できず、そのため万が一の際の護衛役として彼が残ったのである。その役割に対して疑問に思うことはない。

クラスの中でもかなり大柄な彼が近くに来てくれるのはそれだけで安心感が違う。大いに助かっている。

彼女が疑問に思ったのは最終的に彼がここに残る判断をしたことだった。彼の性格を考えれば、本来なら絶対こんなところに留まろうとはしない筈なのだから。

例え何があってもそれを一切気にせずがんがんと進んで行くのが寺坂竜馬という男



だ。

「ああ？ ……そんなの納得してねえに決まってんだろ。つたく、こいつマジで余計なことしやがって……」

「余計なことつて、そんな言い方……」

「十分余計なことだろうが。俺ならあんなガスくらつても全然平気だったのによ」

……何だかんだ言いつつも、一応自身をかばった水雲のことを気にかけてはいるらしい。

妙な言い回しなのは確かだが、恐らくはこれも彼なりの感謝の言葉ということなのだろう。

あの竜馬が婉曲的な表現を使っているという事実が少しおかしく感じられて、優月は思わず笑ってしまった。

「何笑ってんだよ」

「ううん、別に。……それにしても、皆大丈夫かな？ 怪我とかしてないといいんだけど……」

「……あいつらなら問題ねえよ。カルマがいるし、強力な武器だってある」

「強力な武器？ 何それ？」

「スタンガン」

「スタンガン!? 何でそんなの買ったの……というよりよく買えたね。結構高かったんじゃないの?」

「最近臨時収入があつたからな。買った理由はあのタコに試すためだ」

「退屈しのぎにとりとめのない会話をする二人。」

そんな最中、ふと優月は持ち前の洞察力によつて竜馬の顔に赤みが増していることに気がついた。

「——寺坂君、貴方なんかさつきよりも顔が赤くなつてない? まさかとは思うけど

……」

「……。はつ、別にこんなの大したことねえよ」

「……やっぱり飲んでたんだ、昼間の毒入りジュース。全くもう……無理しないで大人しく横になりなよ」

「いらねえ。何のためのボディガードだと思つてんだ。俺まで寝たら、いざつて時に誰がお前らを守るんだよ」

「はあ……。本当、貴方つて意地つ張りなんだから……」

つまり水雲が取つた行動はファインプレーだった訳だ。

いかに体の頑丈さに自信をもつ彼とはいえ、弱体化に弱体化を重ねるのはさすがにま  
ずかつたに違いはない。

……きっと彼も本心ではよく分かっているのだろう。

だから彼はこの場に残ることを選んだのかとようやく得心がいった優月であった。

「……あ……う……」

「よしよし。もう少しの辛抱だからね、穂波さん。後ちよつとすれば皆戻つて来るから

……」

願わくば全員が無事でありますように。

心の中でそう祈りながら、三人はその場で彼らの帰還をじつと待ち続けた。

## 「赤羽業の述懐」

「体の調子はどうだ？ 穂波さん」

「んん、まだちよつとだけ倦怠感が残ってますけど……これくらいなら全然問題ないです」

またしてもトラブルに巻き込まれてしまったE組。

今回の事件の首謀者は——なんとあの鷹岡明であった。少し前に新任の体育教師としてE組を訪れ、そしてそこで悶着を起こし、最終的には浅野理事長から直々に解雇を言い渡された人物その人である。

E組を去った後は防衛省の機密費を盗み出して姿をくらましたようだが、どうやら虎視眈々と復讐の機会をうかがっていたらしい。数ある生徒の中でも明は特に渚に対して強い憎悪を抱いていた。

しかし、結局のところ彼はその渚に打ちのめされた。

自身が一番恨んでいた生徒にまたしても敗北する……その結末はまさに皮肉と言えよう。

「そうか、それは何よりだ。……改めて言わせて欲しい、君には本当に申し訳ないことをした」

両手を閉じたり開いたりすることで感覚を確かめる水雲に、惟臣は深く頭を下げ、謝罪する。

明によって企てられたこの騒動、それは生徒たちにくつか被害をもたらした。彼女の場合は暗殺者から強力な麻酔のガスを吸わされてしまい、そこからほぼ一日近く意識を失ったままであった。

これが不幸中の幸いだったのは言うまでもない。もし暗殺者が用いたガスがより毒性の強いものだったら今頃彼女の身はどうなっていたことか。本来、あの場面は惟臣がかばわなければならなかった。生徒を危険な目から守るのは教員にとって当然の務めである。

「頭を上げて下さい、鳥間先生。こうなったのは別に貴方のせいじゃありませんよ」

「いや、俺の責任だ。あの時、俺がもつと周囲を警戒していればこんなことにはならなかっただろう。敵の存在を見落とし、あまつさえ生徒を危険にさらすなど……」

「それを言うなら私の行動だって褒められたものではない筈です。少しばかり無茶をし

てしまいました。あの時、もっとうまく立ち回れていれば……」

唐突に始まる反省会、自らの行動を省みる二人。

両者ともに真面目で責任感が強い性格であるため自然と雰囲気が重くなってしまうのだ。

……いずれにせよ一番の悪は既に捕らえられている。

このまま気が滅入る話をずるずると続けるのもどうかと思った水雲は話題を変えることにした。

「そういえば殺せんせーはどうなりましたか？」

「やつならば今暗殺肝試しの準備とやらで辺りを忙しく動き回っている最中だ。情けない話だが、結局あの完全防御形態を突破することはかなわなかった」

「でしようねえ。……え？ 暗殺肝試し？」

「ああ、これからクラス総出で行うらしい。後、そのことに関してやつから伝言があるんだが、『もしまだ体調が優れないようならこのまま休んでも構わない』と——」

「参加します！」

「……まあ、君ならそう言うだろうと思っていたよ。くれぐれも無理のないようにな」

沖繩離島リゾート最後の特別企画——『納涼！ ヌルヌル暗殺肝試し』がまもなく始まる。



「怖くないのが、怖い？」

「そ。普通さ、強いところを見せた人間つてちよつとは警戒されるじゃん？ ……でも、鷹岡を倒して帰ってきた渚君は、その後何事もなく皆の中に戻つてった」

だからこそ怖いのだと、彼——赤羽業は胸の内を語る。

単なる力比べなら彼は渚に勝てるだろう。だが、そんなものに一体何の意味があるというのか。

殺し屋にとって最も重要なのは腕力ではない。いかに標的を殺せるか、である。

つまり、相手に警戒されない技術——いや、この場合は素質と言うべきか——をもつ渚は、暗殺という一点において業のはるか先を行っているのだ。

「なるほど。 ……それにしても、こうしてカルマ君が自分のことを話してくれるのは珍しいですね」

「あ、ごめん。迷惑だった？ 奥田さんかなり聞き上手だし、つい口が軽くなっちゃうん

だよな」

「いえ、迷惑だなんてことは。むしろ嬉しいくらいです。カルマ君の内面を知ることができて」

「そう？ んー、じゃあそのお言葉に甘えてもう一つだけ聞いて貰おうかな……」  
肝試しの道のりはまだまだ長い。

手元の懐中電灯をもてあそびつつ業は言葉を続けた。

「俺さ、あの人のことも怖いんだよな」

「あの人、ですか？ 一体誰の——」

「穂波さん」

え、と思わず愛美はその場で足を止めてしまった。

まさか彼の口から彼女の名前が飛び出そうとは思っても寄らなかつたからである。

彼が彼女——水雲のことを苦手に思うのは分かる。

真面目で心優しい性格だが、同時にちよつとあれな一面もある彼女。決して仲が悪いという訳ではない。ただ、彼女と業は相性があまりよろしくないのだ。

「怖い以前に苦手つてのは、まあその通りなんだけど。ちよつと前にドツキリでからし入りのシュークリームを食べさせたことがあるんだけどさ」

「ええ……。何でそんなことしたんですか？」



「やー、だつてき、気になるじゃん？　いつもにこにこしてる穂波さんがドツキリに引つかかったらどんな反応するんだろう、って。奥田さんは気にならない？」

「いや、まあ、気にならないと言えは嘘になりますが」

「でしょ？　甘い物が好きって話は事前に聞いてたから、やるならこれだつて思つてね。で、準備したそれを渡して早速その場で食べて貰った訳なんだけど……。あの人さ、どんな反応したと思う？」

『……。辛いね、これ』

「いやー、いくら何でもあれは駄目でしょ。ほぼノーリアクションだし、しかも最終的に全部完食するしさー」

「あはは……。とても穂波さんらしい反応ですね」

きつと彼女は真顔で淡々とそのからし入りのシュークリームを食べ進めていったのだろう。

当時の場面を脳裏で容易に想像することができた愛美は苦笑いを浮かべた。確かにこれはやるせないな、と。

「感想もたつたの一言だけって。もつと他に何かあつたでしょ。……ま、その話はさて置いて。俺が穂波さんを怖いと思う理由、本題はこつちの方ね」

そう言つて少し真面目な顔つきになる業。

声のトーンも一段と低くなった。

「何考えてんのか分からないんだよね」

「……どういう意味ですか？」

「頭よくて運動もできて性格もいい、それは分かるよ。ただ肝心の中身が一切見えてこないよねって話。さつき奥田さんも言ってたことだけど、相手の内面って一緒に喋ったり遊んだりすれば自然とある程度は見えてくるものでしょ？ ああ、こいつはこんな感じの人間なんだ、って」

「それはそうですけど……。すみません、カルマ君が何を言いたいのかわかりません……」

「んー、なら磯貝を引き合いに出せば分かるかな。あいつって系統的には穂波さんとはぼ同じじゃん？ でも、あいつからは特に裏っぽいもんは感じないでしょ？」

「……」

「どう？ 俺が言いたいこと、何となく分かってきたんじゃない？ ……勘だけど、磯貝と違ってあの人は根っからの善人って訳じゃない。多分まだ何か隠してる」

最後に、と彼は一言つけ足した。

「だから、さ。あの人はあんま関わらない方がいいと思うよ？ まあ、余計なお世話かも知れないけどさ」

それは彼の善意による忠告であつた。

(私、は……)

愛美は考える。修学旅行を機に水雲と接するようになった彼女だが、仮に業の見立てが正しければその選択は間違ひだつたということになる。

いや、今からでも遅くはないのか。今の内に彼女と距離を取つてしまえばいいだけの話なのだから。

そして彼女は――

「はい、余計なお世話です」

業からの忠告を一蹴したのだった。

「ふうん。……理由聞いてもいい？」

「友達だからです。私にとつては大切な。それに例えどんな思惑があろうと、これまで彼女が皆を助けてきたことに変わりはありませんから」

頭脳明晰でかつ人一倍警戒心が強い彼が出した結論だ。可能性としては十分にあり得る。

しかし、愛美は友人の方を信じることに決めた。

彼女自身がそうするべきだと思つたから。

「だから私はカルマ君の言葉よりも穂波さんを取ります」

「……。奥田さんつてさ、実は結構図太いよね」

「え？ いえ、そんなことは……」

「あくあ、なんかすげえ負けた気分。俺やつばあの人のこと苦手だわ。後怖い。渚君以上」

……肝試しの道のりはまだまだ長い。

懐中電灯の明かりを頼りに二人は海底洞窟の奥へと進んでいくのであった。



『穂波さん、体の調子は問題ありませんか？』

「うん、すっかり元気だよ！ ……って、それ聞かれるの今日でもう五回目だよ」

『それはそうでしょう。皆さん、貴女のことをとても心配していましたから。もちろん私もその内の一人ですよ』

現在、私は穂波さんとともに薄暗い海底洞窟を歩いていました。……いえ、この言い方は正確ではありませんね。厳密には彼女の携帯電話の中に入って、です。

「律ちゃん、ちよつと写真撮ってくれない？　もしかしたら何か写り込むかも知れないしー。」

『分かりました。はい、チーズ』

「ありがと。どう？　何か写った？」

『いえ、特には』

「そりゃ残念。写ってたら倉橋さんたちに見せにいったのにな」

『穂波さんは幽霊肯定派なのでしょうか？』

「……難しい質問だね。どちらかと言えば否定派だけど、いてもいいとは思ってるよ」

『……それは矛盾しているのでは？』

「律ちゃん、人間は矛盾する生き物だよ。私が幽霊に対して否定的なのは、もし本当に幽霊が実在しているのならこの世が幽霊だらけになってると思うからだね。何の未練もなく死ぬる人間なんている訳ないし。で、いてもいいって思う理由は文字通りそのまんま。例え死んでいたとしてもそこにずっと存在していて欲しい、なんて人が自然と抱くごくありふれた願いに過ぎないんだから」

『……なるほど。何と言うか、難しいですね』

「そうだね。人間はとても難しい。だから律ちゃんも焦らずゆっくりと学んでいけばいいんだよ？」

『はい。一朝一夕で身につくものではなさそうです』

殺せんせーが企画した肝試し、それ程参加する意義を感じられなかった私は最初辞退しようとしていたのですが、彼女から熱心に誘いをかけられたためにこうして参加することになりました。曰く、もったいないと。

その言葉の意味は当然知っていましたが、感覚的にはいまいち理解できていませんでした。しかしそれも穂波さんと行動をともしている内に掴めてきました。

ただ歩きながら会話しているだけなのに……なぜか楽しい。心地よい。快い。

確かに彼女が言った通りでした。この感覚を得られる機会を逃してしまうのは惜しいです。意義に重きを置き過ぎるのも考えもの、ということですね。

『そういえば、穂波さんに一つお聞きしたいことが』

道中、ふと私はとある疑問を思い出しました。

クラス総出で行った初日の暗殺に関することです。

『惜しいところまではいったものの、結局殺せんせーを殺すことはできませんでした。最後のとどめとして放たれた弾丸が当たる直前、完全防御形態に移行されたからです』  
「かなり惜しかったよね。……でもまあ、正直あれは仕方なかったと思うよ？ あんなのどうしようもないし」

『ええ、それには私も同感です。殺せんせーの方が私たちよりも上手だった、ただそれだ

けのことに過ぎません』

「うんうん。それで？」

『……私が疑問に思つたのは、最後のとどめとして放たれた弾丸についてです。あの暗殺の一部始終をハイスピードカメラで撮影し記録メモリーに残してあるのですが——何度それを見返しても放たれた弾丸は二つだけなんです』

そう、何度確認しても弾丸は二つだけでした。

これは少し変です。なぜならその役目を担っていた人物は三人いたのですから。

千葉君と速水さんと、それからもう一人——

『あの時、どうして穂波さんは撃たなかったのですか？ あるいは何か撃てない理由があつたのでしょうか？』

私は彼女にそう問いかけました。

ずっと気にはなっていたのです。ちょうどいいタイミングが見つからなかったため聞けずじまいでしたが。

……まず一番に考えられるのは弾詰まりですね。

これなら彼女が撃てなかったことにも納得が行きます。例えばどれだけ事前に準備をしていようと、いざという時に限ってアクシデントとは起こるものです。

それとも、他の二人と同様に緊張して引き金を引けなかったのでしょうか？ こちら

も十分に考えられます。彼女として人、感情に左右されることも——

「当てられないって分かってたからだよ」

『……………え?』

今、彼女は何を……………?

というより、何だか様子が……………。

『穂波さん……………?』

「ああ……………本当ままならないよね、人生って……………。いつまで経っても囚われたまま……………。  
やっぱり私は変えることができないんだ……………」

……………影のせいで彼女の表情は見えません。

ですが、声色から明らかに様子が変だと察せられます。

『穂波さん、あの、どうされ——』

私がとりあえず呼びかけようとしたその時でした。

「ひーッ! 西洋人形!」



突如として殺せんせーがこの場に現れ、そして穂波さんを目視するなりそう叫んだ後、またすぐにマツハはどこかへと消えてしまったのです。

あまりにも突然の出来事だったため、一瞬とはいえ思わず全ての動作を停止してしまいました。

いや、本当に急でした……。

彼の身に一体何が起こったのでしょうか？

「何だったんだろうね、今の……」

『全くです——って、え？ えっと、穂波さん？ もう大丈夫なのでしょうか？』

「え、何が？ 体の調子なら別に全然平気だよ？」

『そう、ですか……。いえ、何でもありません』

殺せんせーのことだから、きつと皆を驚かすつもりが逆に自分が驚く羽目になって、それで完全にパニックになっちゃってるんだよ——そう言ってくすくすと笑う彼女から先程までの異常な雰囲気は一切感じられません。いつもの、普通の、普段通りの彼女です。

……私の勘違いだったのでしょうか？ 後でシステムに不調がないか確かめなくては。は。

「でも、冷静さを失ってるってことはつまり——」

『絶好のチャンス、という訳ですね?』

何の、なのかは言うまでもありませんね。

懐中電灯を片手に私たちは海底洞窟の中を進みます。穂波さんの様子がおかしかったことなど、会話していた内容も含めて私はもはや気にしていませんでした。

ああ、その判断が大きな間違いだったのだ。

私はこのことを誰かに伝えなければならなかった。

そうすれば、あんな事態は防げたかも知れないのに。

# Part 6 沖繩離島リゾート 死神襲来

終盤まで一気に駆け抜けていくRTAはあじまるよー！

前回、何だかんだありつつも沖繩旅行が終わりを迎えたところまで話が進みました。今回はその続きからプレイしていきたいと思います。

さて、まだまだ豊富なイベントが待ち受けているこの『暗殺教室RPG』ですが……冒頭でも申し上げた通り、ここからはこれまでに以上にガンガン進めていきます！ それはもう殺せんせーのようにマツハで！ サラマンダーより、ずっとはやく！

というのも、ここからのイベントは都合上省略することが難しいからですね。これまでは色々スキップする機会もあつたのですが……。

……え？ とか言いつつお前ここまで要所要所でガバってきたらどうって？

チツ、うつせーよ。反省してまゝす（KKB）

まあ、要はTDNほんへ垂れ流しになつちやうからどんどん倍速かけていくよって話です。

それでは早速プレイしていきましょか。ついてこれる奴だけついてこいッ!

次のイベントは竹林君の一時的なE組離脱です。

代々病院を経営しているというエリート一家に生まれた竹林君、その中で落ちこぼれ扱いを受けていた彼は家族に認めて貰うため、理事長からの誘いを受けてA組に移る運びとなりました。まあ、当然つちや当然ですよね。

とはいえ、割と結構すぐE組に戻ってくるんですが。

プチ家出みたいなものですかね? 思春期の若者みてえなことしてんな、お前な。

……そういや思春期の若者だったわ、この子。

ちなみに、彼との友好度が70%以上あればこのイベントを丸々スキップすることができます。

ですが、本RTAでは彼以外の生徒たちの友好度も上げていかなければならないのでどう頑張っても40%くらいまでしか稼げないんですよ。なので飛ばせません(絶望)

▽「これで僕もE組行きですね」

……はい、竹林君がE組に戻ってきました。理事長の表彰の盾を破壊しながら。

いや、やっぱりこれ普通にやばいですね……。なんかめっちゃ爽やかな顔してる竹林君ですが、彼がやったことって要はただの犯罪ですしおすし……。浅野理事長の寿命がストレスでマツハ、こんなものいつ憤死してもおかしくありません。かわいそかわいそなのです（古手梨花並感）

まま、ええわ。ちやつちやと次にいきましよう。

次のイベントはシロとイトナ君による殺せんせーへの襲撃ですね。三回（目）だよ、三回（目）。

ここでも特にできることはありません（絶望）

原作通り彼らの暗殺は失敗に終わり、シロはイトナ君を見限り、そして何だかんだでイトナ君がE組の仲間になります。早速友好度稼がなきや……。 （使命感）

▽「気分はどうですか？ イトナ君」

▽「最悪だ。力を失ったんだからな。……でも、弱くなった気はしない」

イトナ君よろしくね！（ヤダ、結構イケメン、…）

なお、シロと一緒に下着泥棒をしていた模様。

……あれ？ もしかしてE組って犯罪者だらけ？ 実はとんでもないアウトロー集

団だったりする？

……。

まま、ええわ。さくさく進めていきましよう。

次のイベントは体育祭です。磯貝君の退学をかけてA組と棒倒しで競うことになるのですが……ここでも特にできることはありません（絶望）

まあ、性別が違うので仕方ないね。ここは素直に外から男子たちを応援していきましょう。おっほっほっほ〜元気だ（ωω）ええぞ！ ええぞ！

とはいえこのままむさ苦しい男たちの戦いを流し続けるのもあれですし、せつかくなのでちよつと女子の方も映しておきますか。……え？ ノンケに走るな？ 俺はジエリダーレスだぜ。男も女も平等に扱ってやるのよ。

という訳で、ペタペタペタあ！（画像を貼り付ける音）

おー、ええやん。気に入ったわ。ホモちゃんも含めて大体の子が髪型をポニーテールにしていますね。チラチラと見えるうなじがセクシー……エロい！

こういったイメチェンが見れる機会は貴重です。気が高まる……溢れるう……！（BR L）ヌツ！

……はい、無事A組に勝ったところで次いきましよう。

この次は保育施設『わかばパーク』の子どもたちを二週間お世話するイベントです。

▽「今日からテスト当日までちょうど二週間、クラス全員のテスト勉強を禁止します」  
▽テスト勉強ができなくなってしまうた！

クラスの中でもやんちゃな生徒たちが街中で好き勝手パルクールしやがったせいで園長先生が怪我をしてしまい、その穴埋めのために殺せんせーから施設で二週間働くよう命じられます。あー面倒くせえ、マジで。

このイベントをスキップするためにはクラスの生徒全員との友好度が65%以上必要になってきます。なのでこれも飛ばすことができないんですね（絶望）

クラスの頼れるリーダーである磯貝君ですら止められないのに、外様のホモちゃんに止められる訳ないです。

ま、ぐだぐだ言っても仕方ないですね。

見ますか、子どもたちの面倒。グへへへ、いっぱいお世話して性癖を歪めてやる！

将来お前たちは金髪碧眼巨乳の女の子でないと又けない体になるのだ！

▽「ありがとう、お兄ちゃんお姉ちゃん！」

▽「ま、またね……」

ああ、くろリシヨタたちかわええんじや、く。

何だかんだで結構癒されましたね。シヨタどもの性癖もしつかりと壊すことができ  
たのでヨシ！

さあ、次だ次！ じゃんじゃん進んでいくぞ！

……と言いたいところですが、さすがにちよつと飛ばし過ぎですね。視聴者の方々も  
お疲れでしょうしこころで一旦小休止を挟みたいと思います。

という訳で――

みなさまのために

このような動画を用意しました。以前Part 2の動画で行ったミニゲーム紹介、そ  
れの続きです。今回のミニゲームは街の商店街に行くとプレイすることができます。  
あ、例によってデータは本編とは別のものです。

ゲーム名は――『食せ！ フードファイト！』。



タイトル通りどれだけ出された料理を食べられるか競うゲームで操作も簡単、指定されたボタンやレバーをただひたすら押ししたり倒したりしていくだけです。

カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャ……（少女レバガチャ中）

▽「坊主、中々やるじゃねえか！」

▽「おめでとさん！」

▽「貴方は優勝した！」

まあ、こんな感じですね。

『は？ 別に大したことなくね？』『何でこんなつまらなさそうなゲーム紹介したの？』とお思いのそのあなた、そう思うのはまだ早いです。

このミニゲーム、優秀を重ねていくとどんどん敵が強くなっていき、そして最終的にはマジでとんでもない強敵が出現するんですよ……。

……ん？ 大食い大会で出現するとしてもない強敵？ ま、まさか……（畏怖）

▽「ここなら好き放題食事ができるって本当!？」

▽!WARNING!WARNING!WARNING!WARNING!WARNING!WAR



▽「ふう……。ごちそうさまでした！」

▽「何だあいつ……。胃袋どうなってるんだよ……」

▽「化け物じゃん……」

負けました（白目） これ無理ゾ。

……ただまあ、絶対に勝てないという訳ではないです。一応ちゃんと入念に準備すれば勝てる可能性が出てくるようになってます（必ず勝てるとは言っていない）

必要なスキルは『大食い』や『早食い』を始めとする食に関わる全てのスキルとそこから派生する『大食漢』などといったスキル、それから『燃費が悪い』といったデバフ類のものもです。こういった食に関するスキルのほとんどは原さんとの交流で取れるため、彼女とは積極的に仲よくしていきましよう。

で、ここまで揃えてようやく彼女に勝てる可能性が出てきます。繰り返しますが、あくまで可能性です。

そうですね……。体感的には1（%）か2（%）くらいですね。まあ、ここからはシンプルな技量の勝負になるので感じ方は人によると思います。

そして見事弥子ちゃんに勝てた場合、『異次元の胃袋』というプラチナトロフィーが取得できます。

取得率は驚異の0.1%以下！ 数ある実績の中でも最難関です。私はこのトロフィーを取るためにコントローラーを六個駄目にしました（全ギレ）

ま、何だかんだ言いましたが、弥子ちゃんの元気そうな姿を見ることができたのは素直に嬉しかったです。トロコンの難易度が爆上がりしたのはあれですが。製作陣の粋な計らいってやつですかね？ ありがとナス！

……にしても、暗殺教室がアニメ化されているのにネウロの方がアニメ化されないのは何でなんでしょうね？（すつとぼけ） 漫画すごく面白いのになー（棒） いつか動いてるネウロや弥子ちゃんを見てみたいなー（棒）

ではでは、休憩もここまで。そろそろ放置していた本編の方へと戻りましょうか。

さて、本編ではちょうど二回目の中間テストが終わったところですね。この二週間勉強することができなかったE組の生徒たちはカルマ君たった一人を除いて全員が順位を大きく落としてしまいます。

ま、そんなのホモちゃんには関係ないです。いつも通り一位を取って尾張！ 平定！（織田信長）

中間テストが終わって、新しい体操服を貰えば……次はいよいよ『死神』とのイベン

トです。正確には『二代目死神』とのイベントですね。ラスボスです。まあ、黒幕は柳沢なんですけどね、初見さん。

このイベントに関しては正真正銘本当に何もすることができません。原作通り進むためビッチ先生を生贄に捧げる必要があります。ビッチ先生、お許しください！

しかしこのイベント、状況によつては少々内容が変化します。これも友好度が関わってくるのですが、この時点でビッチ先生との友好度が70%以上ある場合、“洗脳”の部分に関しては回避することができません。原作では積極的に死神に協力していた彼女ですが、彼女と仲よくなっておくことでそれが起こらなくなるんですね。

とは言え人質になつてしまうのは避けられませんし、結局は烏間先生が死神を倒すのを待たなければなりません。これが一つ目のパターン。

もう一つのパターンはビッチ先生の部分がオリキャラに置き換わった場合のものです。めったに起こりませんが、大体3%くらいの確率で死神がプレイヤーの操作キャラを人質に取つて洗脳してくるんですね。

まあこちらに関してもビッチ先生のと何ら変わりません。強いて言うなら洗脳に関してですが、これは『心』のステータスが高ければ高い程防げます。

いずれにせよ人質になつてしまうのは避けられないため、こちらでも結局は烏間先生の活躍待ちです。

長々と語りましたが、要するにどうあがいても死神との因縁はできませんよって話です。彼との因縁はこの物語のためにも必要不可欠ですからね。

さて、結局原作通りに進む以上ここでホモちゃんにできることは何もありません。このままピッチ先生が誘拐・洗脳されて物語が動くまでひたすら倍速倍速つとく。

……ここまでするかイベントをこなしてきましたが、本当は飛ばせる筈なのに飛ばせないってのは走者的にかなりストレスですね。あくあ、友好度さえ何とかなればなあ……。いちいちコミュ取るのは時間かかるし、なんか短時間で爆上がりさせる方法とかないすかね？ そしたら今以上にタイムがもつと縮まるのに……。

あ、そうだ(唐突) 素晴らしい提案をしよう。お前もこのゲームのRTA走者にならないか？

これまで話してきたように多分更新点はまだそこそこ残っています。友好度問題さえどうにかなれば一気にタイムを更新することができますよ？ 世界一位も夢じゃありません！ だから皆も走って♡ 走れ(豹変)

……。

すいませくん、木下ですけど、ピッチ先生誘拐まくだ時間かかりそうですかね？

(ホモはせつかち)

うえーい、チンタラやってんじやねえぞー!

あくしろよ。あくしろよ。あくしろよ。あくしろよ。あくしろよ。あくしろよ。あくしろよ。あくしろよ——

ん?　なんで等速に戻す必要があるんですか?

▽帰り道、貴女は花屋を見つけた。誕生日がすっかり過ぎてしまったイエラビッチへの贈り物を何にするかと思案していた矢先のことである。そこに飾られていた美しい色彩の花々を見て、貴女に一つの妙案が浮かんだのだ——花束などどうだろうか、と。

▽元より花にも興味があつた貴女は早速その店に近づいていく。すると中から一人の男性が現れた。

▽「いらつしやいませ。……ん?　その制服、もしかして君は……」

▽貴女の姿を見て驚いた顔をする男性。貴女は合点がいった。以前『わかばパーク』の園長先生を怪我させてしまった時、その時に救急車を呼んだのがたまたま近くを通りがかつた花屋の店員だったという話を貴女は同じクラスの子たちから聞いていたのだ。

▽その節はお世話になったと頭を下げる貴女に対し、彼は爽やかな笑顔を浮かべて応対したのだった。

ええ……（困惑） まーたこの子は好奇心でウロウロ動き回ってるのか壊れるなあ（呆れ） しかもよりによって何で死神さんに話しかけてんですかねえ……。

まあ、こんな人のよさそうな人物の正体が死神だなんて普通は思わないでしょうし、仕方ないっちゃ仕方ないんでしょうが……。

……それにしても何だか嫌な予感が（フラグ）

いやー、まさかとは思いますがこの妙に不穏な空気、これつてもしかして――

▽「……このまま君を帰す訳にはいかないな」

▽『貴女』の操作ができなくなりました。

……うん、知ってた。やっぱりな♂ どうせこうなるんだらうなつてもう分かかってましたよ（諦観）

しかもこれの何が驚きかって、人質にされただけにとどまらずすっかり洗脳までされてるんですね。キャラクターを操作できなくなってしまうのがその証拠です。

先程死神の洗脳は『心』のステータスが高い程防げると説明しましたが、具体的な数値を言うと300以上。ここまでであると100%確実に防ぐことができます。



ホモちゃんの『心』のステータスは300には届きませんが、それでも272はあります。つまり彼女が洗脳されてしまう確率は……およそ9%といったところでしょうか。そもそもこの人質からの洗脳コンボに至るまでの確率も3%とごく僅かなのに……。

……。

エツエツどういうコト!? 確率が……ひたすら下振れてるよ! b i i m兄貴とチルドレン特有の屑運が発揮された……ってコト!? (タテワレ)

あはっあはっ、こんなになっちゃった………たはは。なっちゃったからにはもう……ネ……。

当然続行します(確固たる意志)

馬鹿の一つ覚えみたいにガバだの再走案件だの連呼してるホモガキどもは†悔い改めて†

というのも、そもそも別にこれってガバでも何でもないですからね。単にビッチ先生とホモちゃんの配役が入れ替わっただけに過ぎません。このイベント自体元々どうあ

がいても避けられないものですし。

いや、むしろRTA的にはこっちの方がいいのか……う？

よくよく考えてみたらビッチ先生が誘拐されるのをわざわざ待つ必要はないですよ？ それならこっちから自発的に死神の元に出向いていつて人質になった方が……。

はえ、つまりホモちゃんが取った行動は最適解だったんすねえ、（感服）ホモちゃんやりますねえ！ 俺たち二人がチャートを支える……ある意味「最強」だ。

▽貴女は意を決して扉を開く——そこには皆が、いつもと変わらない様子で。

▽「水雲ちゃんおはよう！」

▽「おはよ〜」

▽「おはようございます、水雲さん」

▽貴女のことを温かく迎え入れたのだった。

……はい、無事に死神関連のイベントも終了しました。

ホモちゃんの洗脳も解けたし、皆との絆もより一層深まりましたね。いやあよかった  
(kousei)

「ぬわああああん疲れたもおおおん」「チカレタ……」「いやもうキツかったつすねー

今日は「ああもう今日は……すっげえキツかったゾ」(実家のような安心感)

思わず心の中の空手部が出てしまいました。まだまだイベントは続きます。

さて、次のイベントは進路相談と学園祭ですね。

まあこれらのイベントはどちらも原作通りと言うか、特に説明することはないので――

今回はここまでです。

ご視聴ありがとうございました。

## 「萌芽」

『糸成、見てごらん。この小さな町工場から世界中に部品を提供している。うちにしか作れない技術なんだ』

『勉強を重ねた腕スキの職人、研究を重ねた製造機器』

『誠実にコツコツとやっていけば……どんな大きな企業とでも勝負ができる』

そんなものはまやかしだった。

どれだけ勉強しようと、誠実に積み重ねようと、それを上回る圧倒的な力の前には意味がない。

だから俺はひたすら力を求めた——全てに打ち勝つことができる、ただただ圧倒的な力を。

……その結果がこの様だ。

惨めにも俺は負け続け、挙げ句の果てには協力者からも見捨てられた。

俺は無力だった。

俺には力がなかった。

俺は弱かったのだ。

もはや俺にはビジョンがない。加えて頭も割れるように痛い。耐え難い激痛がずっと俺を蝕み続けている。このまま続けばやがて死に至るのだろうなと、学のない俺でもそう悟ってしまえる程だ。

……それでも俺はこの触手カを捨てられなかった。これが俺の最後のよりどころだったから。これを失ったら、俺は本当にどうしようもなくなってしまうだろうから。

『——俺らのところでこいつの面倒見させろや』

詰み。袋小路。行き場のないガキ。

そんな俺に手を差し伸べたのは四人の人間だった。

『まずいだろ？　うちのラーメン。親父のやつ、何度言ってもレシピ改良しねえんだよな。……ああ、そういう穂波は前食いに来た時うまいっつってたっけ』

『ええ……。マジか……』

『お人好し極まつてるわね、あの子』

村松とかいうやつは俺にめちやくちやまずいラーメンを食べさせてくれた。

『ドーよイトナ!?　嫌なことなんざスピードで全部吹き飛ばしちまえ!』

吉田とかいうやつは俺をバイクの後ろに乗せて走り回ってくれた。

『シロのやつに復讐したいでしょ？　まずはこれを読んで暗い感情を増幅させなさい』  
狭間とかいうやつは俺にやたらと分厚い本を読むようすすめてきた。

『無理のあるビジョンなんざ捨てちまいな』

『一度や二度負けたくらいでぐれてんじやねえ。いつか勝てりやあいーじやねーかよ』

『今日みてーに馬鹿やつて過ごすんだよ。そのためにE組俺がいるんだろーが』

そして寺坂とかいうやつは、俺の触手による一撃を受け止めたうえ、さらに俺を論してきた。

……馬鹿な連中だ。こいつらは日々を楽観的に、適当に過ごしているんだろう。誠実とは程遠い。

でも、その言葉は不思議と俺の胸に染みだ。

……俺は焦っていたのかも知れない。これまで結果を追い求めるばかりだった。執念のままに生きてきた。そんな俺だからこそ肩の力を抜くことが必要だったのだ。

「目の色が変わりましたね、イトナ君。今なら君を苦しめる触手の細胞を取り除くことができますが？」

「……勝手にしろ」

この触手も、兄弟設定も、もう飽き飽きだ。

この日を境に俺はただの『堀部系成』になった。  
当然失ったものは大きい。けれども、代わりに得られたものはそれ以上に大きかった。



触手を取り除く決意をしたイトナ君。

そんな彼の姿を目にした僕は他の皆と同様にほっと安心のため息をついた。

イトナ君がまた暴走し出した時はどうなることかと思っただけ、最終的には丸く収まったようだ。クラスの中では一番不真面目な寺坂君だけど、そんな彼だからこそイトナ君を説得できたのかも知れない。……ううん、きつとそうだ。これは彼にしかできないことだった。

緊張が解けた僕は何となく隣を見た。

理由なんてない。本当に何となくだった。

何となく隣を見て、そして——驚愕した。

「…………え？」

僕の隣に立っていたのは穂波さんだった。

……いや、それは別にいい。彼女もまた皆と同じようにこの事態を外から見守っていたのだから。

ただ、その時の彼女の表情がとても印象的だったのだ。

彼女は、酷く寂しそうな顔をしながらイトナ君のことを見つめていた。他の皆のように安堵の表情を浮かべる訳でもなく、ただただ寂しげな顔でイトナ君の方を見ていた。

……今にして思えば、これが最後のチャンスだった。

たればの話になるけれど、もし僕がこの時彼女に何か声をかけることができなければ、あるいはあんな事態は起こらなかったのかも知れない。

そして、それからは様々なことがあった。

A組と体育祭の棒倒しで勝敗を競い合ったり、保育施設の園長先生を怪我させてしまい、その償いとして二週間施設でただ働きしたり、結果ろくに勉強できないまま二回目



の中間テストを迎えてしまったり……。

この中でも特に大変だったのは体育祭だ。

ある日、浅野君はいつもの四人とともに突如として磯貝君が密かに働いている喫茶店に押しかけ、そしてこう言ってきたのだった——『今度の体育祭の棒倒しで勝負をしよう。さもなければこのことを学校側に報告する』と。

いつぞやのようにまた穂波さんの所有権を賭けてどうのこうの言い出すのかと思っただけど、そんなことはなく、どうやら彼はただ単に僕たちに期末テストの時の仕返しをしたかっただけのようなのであった。

『期末テストでは随分と世話になったからね。その雪辱を果たしたいんだよ、僕たちは』……しかしながら、じゃあ彼女が彼女のことを完全に諦めたのかという別にもうどうもなくて。

『……は？ 諦めた？ 僕が穂波さんを？』

『寝言は寝てから言ってくれないか。僕は彼女を諦めてなんかいない。ただ、少し考えを改めただけさ』

『さすがに僕ももう察してる、彼女がE組に留まっているのは彼女自身の意思によるものだと。……逆に言えば、君たちの存在が彼女をE組に留まらせている訳だ』

『実際その通りだった。彼女がE組行きとなつてから、非常に、非常に癪なことに、君た

ちの成績は著しく飛躍している。それこそ僕たちに迫る程に」

『つまるところ、僕らが取るべき手段は一つ——君たちをこてんぱんに打ち負かせばいい』

『そうすれば彼女はきつと愛想を尽かしてA組に戻つてくるだろうし、僕たちの溜飲も下がる』

一石二鳥とはまさにこのことだね——そう当たらずといえども遠からずな推理を披露した浅野君。

彼のそれはかなりいい線行つて居るけれど正解ではない。まあ、いくら彼が優秀といつてもノーヒントで殺せんせーの存在までたどり着くのはさすがに無理だろう。

いずれにせよ磯貝君が退学処分になつてしまう可能性がある以上拒否することもできず、こうして僕らはまたしてもA組の生徒たちと争う羽目になつたのだつた。

結果的に勝つたからよかつたものの、この勝負では彼の大胆な策略を見ることができた。まさか勝つためにわざわざ外国から助つ人と呼んでくるなんて……。

本当に、本当に様々なことがあつた。

こんな濃い体験、中々できることではないだろう。

とても大変だつたことは確かだ。成功だけじゃなく、時には失敗をしてしまうこともあつた。

けれども、だからこそクラスの結束は強まっていった。

当初の頃とはえらい違いである。この時の僕たちは、例えばどんな大きな壁が立ちましたか。かっでも皆で力を合わせれば必ず乗り越えていけると、僕らは確かな絆というもので結ばれているのだと、そう信じていたのだ——彼女が、穂波さんが学校に来なくなるまでは。

……あんな事件が起こるなんて誰も思いもしなかった。

ただ一つ言えるのは、僕らは同じ組の仲間であつた筈の彼女について何も知らなかつたということである。



ある日の午後、僕が表向きに経営している花屋に一人の客が訪ねてきた。金色の髪に碧色の眼という日本では非常に目立つ容姿をした少女である。

この少女、確か名前を穂波水雲と聞いたか。

僕の次の標的であるあの百億円の賞金首、地球の破壊を目論む存在でありながら、同

時になぜか柵ヶ丘中学校三年E組の担任教師としても働いているという超生物——集めた情報によれば、彼女はその怪物に教えられている生徒の内の一人だった筈だ。

「プレゼントに花束を？」

「はい。本当は当日に渡したかったんですけどね……。まあ遅れてしまったものは仕方ないってことであちこち探し回っていた時に偶然この花が目に入って、それで花とかどうかなくと思いつつたんですが……」

「うん、とてもいいと思うよ！ 近頃、花束を贈るのは相手の迷惑になるからやめておいた方がいいだなんて風潮があるけど、それに流されるのはもつたいない。色、形、そして香り……花程人の本能にはまるものはないんだ」

「なるほど。で、本音は？」

「……売り上げに響くから勘弁して欲しい」

「あはは、花屋さんも大変なんですね」

さて、十月の誕生花で代表的なのは……オレンジバラやカトレア、ガーベラといったところ。僕はそれらの中からいくつも見繕うと早速花束を作り始めた。

「この鉢植えは……」

「ああ、それはアセビだね。ちょうど今ぐらいの頃からつぼみをつけ始めて、その状態のまま冬を越し、そして春のまだ寒い内から開花し始めるんだ。実は木には有毒な成分が

含まれていて、だから害虫がつきにくかったりする」

「へえ、そうなんですか……。あ、これは知ってますよ！　これってあれですよね、確か——」

その間、彼女は店にある他の商品を眺めていた。

しかしそれにしても……。この少女もしよせんはただの子どもという訳か。クラスの中でも特に聡明とは聞いていたが、僕の正体に気づくそぶりを見せることはない。

いくら何でも不用心過ぎやしないかい？　今、君の目の前にいるのは死神とも呼ばれる暗殺者なんだよ？

まあ、別に取って食おうだなんてつもりはないが。

こんな子を手駒にしても意味はない。適当に相手をしたら返そうと、この時の僕はそう思っていた。

「——よし、完成だ。こんな感じでどうか？」

「わー、すつごく綺麗ですね！　これならイリーナ先生もきつと喜んでくれますよ！」

「それはよかった。気に入ってくれたようで何より」

「はい！　あ、ついでにこのアセビの鉢植えも一緒に頂いていいですか？　なんか見たら欲しくなっちゃって」

「もちろんさ！　店として助かるし、僕個人としても花に興味をもってくれる人が増え

るのは嬉しいからね」

「ええ、花にも興味がありません。でも、私が今一番興味があるのは貴方ですよ——死神さん」

……ん？

「死、神……？ 急にどうしたんだい？」

「うまく気配をぼかしているんですね。道理でこれまで貴方の正体を見破れる人間がいなかった訳だ」

おやおや。おやおやおや。

これは……どうしたことかな？

この態度、彼女は明らかに僕が死神だと確信しているようだが、一体いつから気づいていた？ ……ひよつとして最初からか？ 最初から気づいていたうえで、僕に対してあんな風に接してきたと？

「——面白い」

面白い。久方ぶりに僕は動揺という情動を思い出した。

限界まで極めた筈の変装の技術が、まさかこんな少女に見抜かれるなんて予想だにできなかった。

「改めて自己紹介をしよう。僕は殺し屋だ。その界限では死神なんて呼ばれていたりも

する」

「ご丁寧にも。それじゃ私も自己紹介を——と言いたいところですけど、貴方は私のことをすでに知っているんでしよう?」

「そうだね。ただ、その情報も大幅に更新しなければならなくなつた。……なぜ僕の正体が分かつたのか、参考までに教えてくれないかな?」

「理由ですか……。ん、強いて言うなら……。未来を知ることができから、ですかね?」

精神の波長に乱れはない。いい加減なことを言つて煙にまこうとしている訳ではないということか。

……いやそれ以前に、この子の波長は読みにくいな。

これも技術なのか? それとも先天的なもの? 気配をぼかすものとはまた別種であるような気がする。

彼女がもつ謎の技術を解明して自らのものにするのができれば、僕は殺し屋としてさらなる高みへと近づけるに違いない。……本物の死神に、また一步近づける。

「うーん、参つたな……。何にせよこのまま君を帰す訳にはいかない。僕の正体を知れた以上は、ね」

「安心してください。私も帰るつもりはありませんから。そうじゃなければ、わざわざ

貴方に向かつて堂々とこんなこと明かしませんって」

「確かに。なら、君は何を望むんだい？」

「……死神さんの次の標的、私の担任の殺せんせーで間違いないですよね？　それなら

——」

——内通者<sup>スパイ</sup>、欲しくありません？

およそ中学生とは思えない程に艶やかな笑みを浮かべながら、少女は僕にこう提案してきたのだった。